

特116  
153

如鬼坊作 國松齋

池沼鯉之助

~~271~~  
~~166~~

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19m</sup> 1 2 3 4 5

始



特別  
253

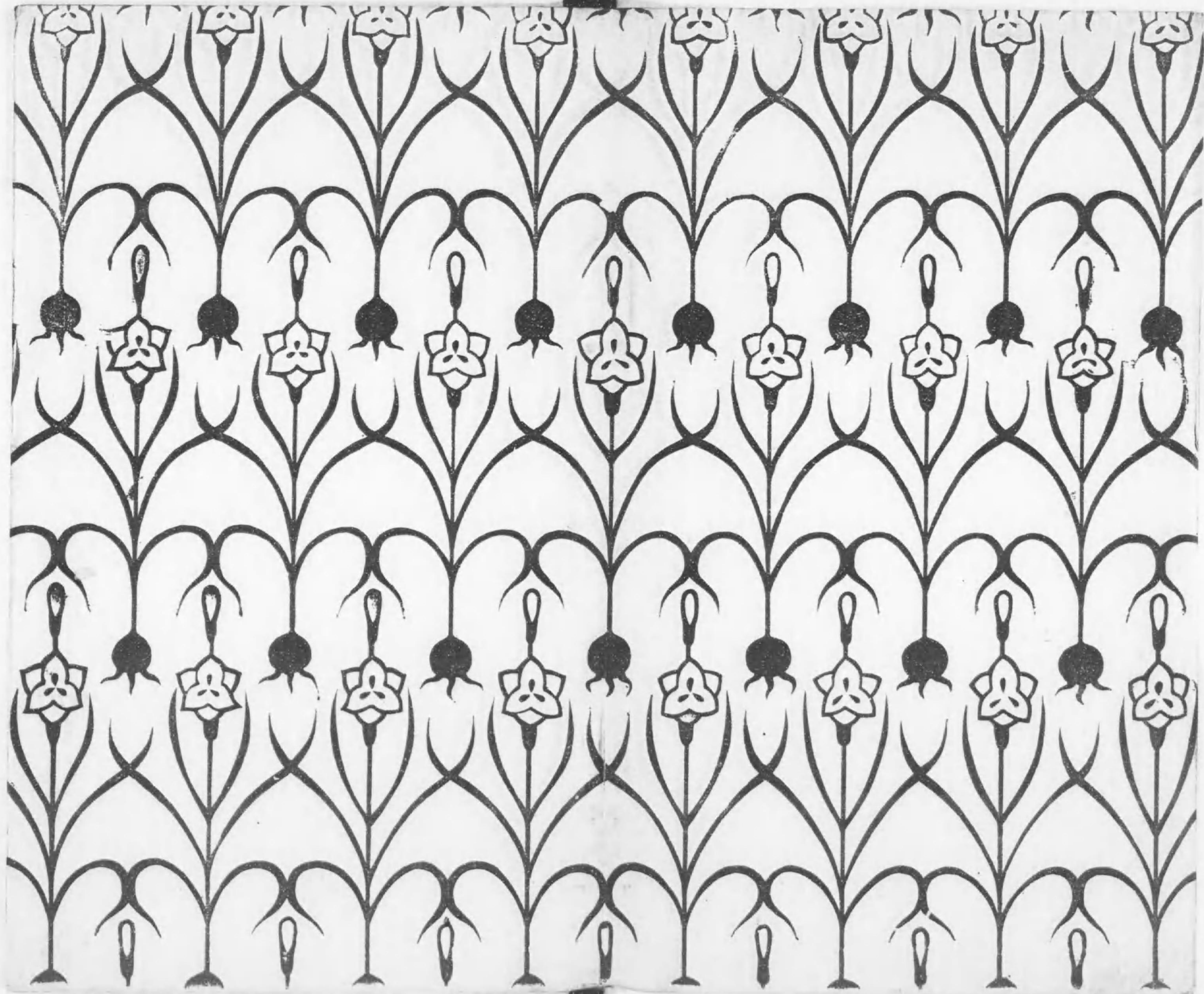
如鬼坊作

國松畫

池沼鯉之助

いけぬまこいのすけ

271  
206

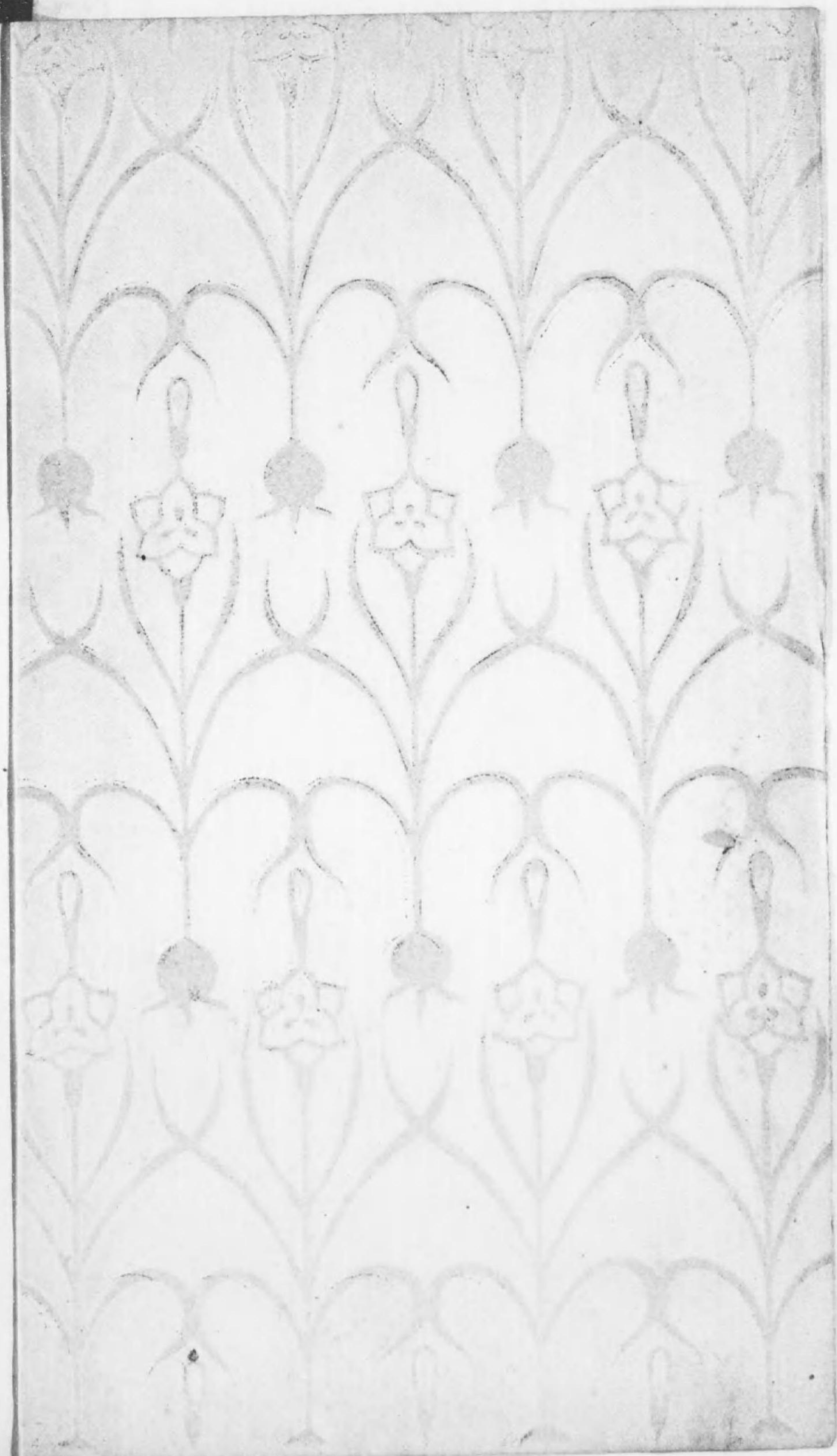


如鬼坊作

國松畫

池沼鯉之助

いけぬまこいのすけ





◀ 次目説小刊新館文隆口樋 ▶

花	根	同	小	同	同	如	伊	同	同	同	渡	同	須	同	和
冠	本	同	嶋	同	同	鬼	原	同	同	同	邊	同	藤	同	田
者	吐	人	孤	人	人	坊	青	人	人	人	黙	人	南	人	天
作	芳	作	舟	作	作	作	々	作	作	作	禪	作	翠	作	華
	作		作				園				作	作	作	作	作

思三浪梅池乳鱗迷櫻風千磯新闇浪靜

は人が 沼守 與 井流 ののま  
 ぬのし 花鯉の ひ 一 里 主う  
 戀仇ら録助仙助子策薩眼風人、ら子

い白面極至もでん讀をれどは物版出の館文隆口樋



◀ 次

◎ 花 根 同 小  
冠 本 嶋  
者 吐 孤  
作 芳 人 舟  
作 作 作 作

思三浪梅  
は人が 花  
ぬのし  
戀仇ら録

◎ い白面極至

御用  
御用

大正  
山口  
山口

(1) 池沼鯉之助

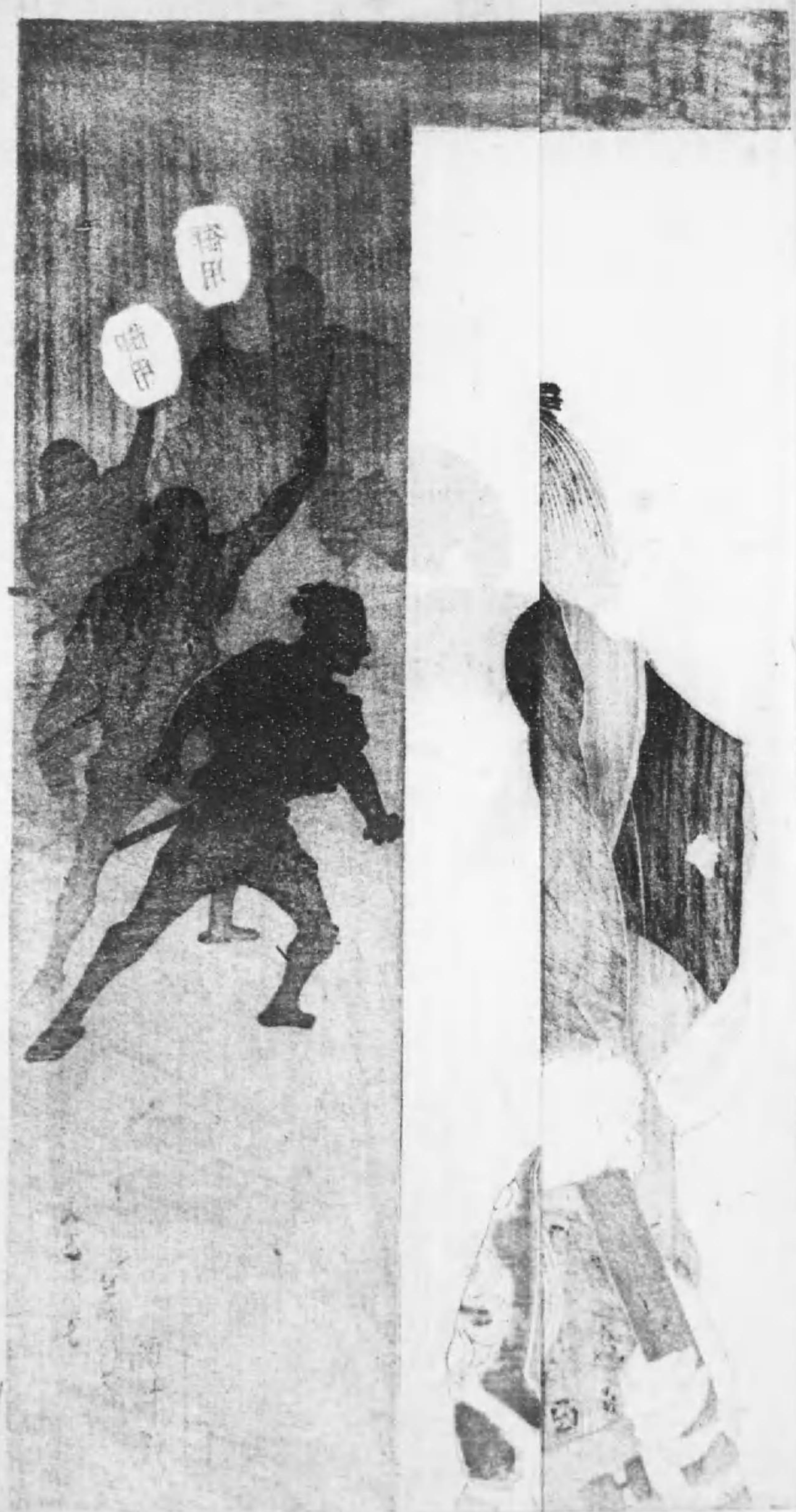
池沼鯉之助

ん、もへしだけ枇  
 呼たろが一杷  
 處んだら、岡崎小町酒は止められず、度々其富士屋へ遊びに行きやした、何  
 がね事客は「お雪に一寸座敷へ来て呉れ」と誰でも言ふので、俺  
 彼方ありやした此方長者とお雪を張込んで妾に欲しい女房  
 の大やした此方長者とお雪を張込んで妾に欲しい女房  
 の大やした此方長者とお雪を張込んで妾に欲しい女房

(一)

如鬼坊

大正  
1.11.22.  
内交



にしてえつて、随分金を山に積んで言込んださうです、夫れが妙で  
 すね、お雪は厭たくと冠りを振つて、堅氣の家へは嫁に行かえと  
 變な事を言つてると思ふと、其時分驛で一二人の女郎屋、三島屋大助  
 とあの文三とが毎日毎晩詰懸けて、マア鞘當てといふ始末です、随  
 分時に寄つちやア、喧嘩にもなり兼ね、え權幕で、側のはヒヤヒ  
 ヤしてゐたさうです、だから未だに御覽なせえ、岡崎と篠原とは犬  
 と猿で、従つて知立の町と岡崎の町とは、若い者が祭禮にさへ、便  
 り競争をしてゐやす、俺ア夫れ切り親分許へ歸つて了つたから、ハ、ア  
 を聞かなかつたが、お雪が文三の女房になつてゐるのを見て、ハ、ア  
 此奴ア大助が負けて、文三の方へお雪が縁づいたなと思つた、ッリ  
 ヤ全く文三は年も若いし、女は好い男、大助はモ一五十に手が届くし、片  
 ヲ面に刀疵はあるし、女は好かねえや、到頭負けて了つたんだ……  
 其處だ親分、大助は屹度文三を懸の敵と怨んでゐるに違ひねえ、今  
 親分が大助の家へ乗込んで、實に文三が天下のお尋ね者、鱗與之助

を隠まつてゐるが、土地の勝手が知れねえので、困つてゐるんだが一  
 番腕貸しをして呉れねえか、と斯う言へば厭とは言はねえ、意恨晴  
 らしかた、思ふ存分の事をするだらうと思ひやす、何うでせう  
 岡崎へ行つちやア』と油に火を懸けた、源四郎初めて笑ひ顔をして  
 「さうか新太、汝は宜い事を知つてゐて呉れた、そんな達引がある  
 なら、屹度大助が引受けやう、満更知らねえ仲ぢやなし、コリヤ事  
 が面白くなつて来た』乗り氣になつたので、新太は愈々調子に乗り  
 親分、夫にしても唯行つたんぢや面白くねえ、黙つて三島屋へ押登  
 つて、アツサリ器用に一散財して、藝妓から女郎、店の者にまで惣  
 花を打つて、ア、近頃にない好いお客様だと思はせて置いて、一杯  
 嬉嫌の處で借俺は斯ういふ者だが、お部屋がお閑なら一寸お目に懸  
 りたい、と言つてやる、大助は不思議に思つて會ひに来る、其處で  
 イヤ岡崎の貸元、久し振りだつた、當り前の挨拶して逢ふのも面白  
 くねえから、斯して客になつたんだと言つちやア、両方笑つて打解



「やせう」「ナール程面白いなア、萬事汝は任せらるから、一つ大助に會はせて呉れ」「宜うがす」と呑込んだおさらば新太、是から駕籠を二挺仕立てさせて、岡崎まで三枚で飛ばせた、丁度日の入り時、「お客だよ」と駕籠の一聲に、好い客だと見て取つて、鶴婆や妓夫が、「お登んなさるよ」と掛聲、トントンと階子段を登る新太が、「旅の者で勝手が判らねえ、面白い藝妓を四五人呼んで呉れ、女郎は惣上げだ、酒肴はドン、擔ぎ込め、此親方は賑かな事が好きだから、鉦太鼓で囃し立て、呉れる」と云ふ觸れ込み、サア藝妓仲間などの顔が揃ひ、惣花の祝儀が出た、近來にない上客と、樓中は上を下へと賑ひにて三島屋許りは宵から引繰り返るやうな騒ぎなり、大助は部屋にゐて「何處から来た客人だか、行届いた器用な遊び方だ」と言ひ居たり、「あの親方、二階の客人がお部屋とは知合の仲だから、一寸顔を貸して呉れと被仰います」と仲どんが告ぐれば大助は「ハテ知合の仲……判らねえな、俺は客人の座敷なんかへ、顔出

しするのは眞平だ、何とか休めく言つて断はつて呉れ」「でも親方、何うやらお連れが遊び人のやうですから」大助仕方なく「誰か知つた者が申藏半分、そんな事を言ふんだらう」と親分とは博徒仲間だのけの事、女郎屋渡世は別ですから、是非なく會はうと二階へ登りたり。

(11)

三島屋大助が、其座敷へ顔を出せば「ヤア岡崎の貸元、久し振つたなア」と枇杷島の源四郎が、笑つて聲を懸けしに「オ、名古屋の貸元か、コリヤア一番芝居をされた」と双方大笑ひになり、更に大助が馳走として、驛の藝妓を惣上げにし、肴を改め盃をさして、又一層の賑ひとなる、扱其夜は何事も言はず、夜明けかして騒ぎて翌朝になり飲み直しといふ時、人を遠ざけて源四郎と新太が今度の一伍十

郎に來られて、直に喫驚りして篠原村を放れたと言はれちやア、人の物笑ひになりやすから、何とか敵に一泡吹かせる工夫をした。思ひやす、就ちやア先生、貴君の千里見透しといふ術は斯ういふ時に用ゐる法はありやせんか」と問ふ、與之助も笑つて「私利私慾の爲には、何の効もない事ぢやが、一方ならんお世話になつた文三殿の爲、一つ法を行つて見ませう」「へイ有難う存じやす、夫で敵の仕事が判りやア、又此方にも方法がありやすから」と與之助早速千里見透しの術を行ひ、「フーム文三殿、コリヤ面白い事になつてゐる。明晩吾々が出立する、必す敵の計略に陥る、夫れはコレ」と聲を潜めて詳しく敵の手筈を語れば「成程そんなら此方も斯ういふ事に致しては何うでせう」と協議して遂に何事か計略は出来、其夜は休息致せしが、夜が明けると文三が乾兒の貝塚の三次、蒲郡の伊蔵上州熊なんといふ連中に「皆は不意に妙なる事と思ふだらうが、俺少し急に思ひ立つた事があつて、尾州の半田へ行かなかきやならぬ

什を語りて、大助に腕貸しを頼みました、人に頼まれては厭と言はれぬ俠客、殊に怨みある一色の文三、源四郎に向つて「名古屋、心配しなさんな、此の大助が引受けて、三日と経たねえ中に文三を繩に配して見せる、其のお尋ね者の與之助が、未だ篠原村にありやア重疊して見え、其の文三を御用に與之助が、未だ篠原村にありやア重疊は判るといふもの、一切此三島屋大助が呑込んだ」と胸を叩いた、源四郎も思ふ坪に徹まり「イヤ何分三島屋頼む、就ちやア與之助の見知り人、共、戸小源太といふ浪人を呼寄せると早速飛脚を立てる小源太は名古屋から、此の岡崎へ着く、文三は與之助夫婦に向ひ「飛んは、枇把島の源四郎が歸つてから、文三は與之助夫婦に向ひ「飛んは、奴が舞込ました、併し強く附けたから、モ一度と來る事はありやせん、此の上は一刻も早く吉田まで、送りなくちやなうねえん、だが……源四郎、彼の奴もあの儘指を嘲へて歸りやしやめえ、俺も源四手を變へて貴君の方の行方を突止めやうとするに違ひねえ、俺も源四

「今夜は久しぶり振権現堂に大賭場が立つ篠原の親分が半田から、瀬戸の方へ行く首途だ、皆行けッ」と云ひて、知立近在の博徒連中、其夜権現堂に集まり、月夜を幸ひに車座になるもあり、彼處此處にテシ博奕が始まり、月夜を幸ひに車座になるもあり、百目蠟燭を照らし、して木蔭に陣取るもあり、却々騒ぎに、此方は一色の文三が、モ本旅立の儘の足拵へ、脚絆甲掛に切れ緒の草鞋、長脇差を一、本手挟んで、菅の一文字笠を、脚絆甲掛に切れ緒の草鞋、長脇差を一、け、一同益莫産を開いてゐる真中に突立ち、客人方も身内の者も今

(三)

三郎、八日市の八平なんといふ者へ、何事か言合めれば「合點承知しやした」と呑込み、尙ほ大助は源四郎や新太と何事か打合はせたり。

えが、半田へ行くと龜崎へ廻る、あれから瀬戸へも一寸行きてえ、彼等は百日は留守にする氣だ、就ちア繩張り内の者にも、一寸百日の間、顔を見せねえといふ譯だから、今夜皆呼んで一杯盃の遣り取りがしてえと思ふ、夫に久しく大きな賭場も開かねえから例の權現堂へ集まつて貰ひてえ、一切彼處へ支度をしておいて、皆に喜んで貰つた上、幸ひ月夜だから事に依つたら、權現堂から直に出立しやうと思ふのだ、何うか汝達ア直に觸れて呉れ」といふ「ヘエ、夫れは又急な事、でさア」だと言出すと聞かねえ親分の事だ、何しろ早く手を廻さな、さや、間に合ふめえ」と承知せし一同の乾兒達、是から繩張内へ急、に觸れを廻せば、岡崎の三島屋大助の廻し者は、直に此段を注進せ、身内の者に張番させ、與之助を逃がさうとする卑怯な考へ、文三の奴め今に青い息を吹かせてやる」緒川の安五郎、源四郎と新太に語つて、是から乾兒中の利き者、緒川の安五郎、大垣の銀次、飛彈の伊

れてあつて許されてある、一同に夢中になつて奇偶を争ふ、宵の間  
 の場所の盛る時を見込んで、此の権現堂へサリ、近寄つて來まし  
 四郎の手になつて、遠巻きに御用の聲で恐れさせ、蜘蛛の子を散ら  
 た、大助の方には多く博徒に御用の聲で恐れさせ、蜘蛛の子を散ら  
 す、如く追拂つて了はうといふ計略、源四郎は三十人一手になつて  
 見、知る引捕まへん、又萬一與之助の調べたり逃げんとせし時は  
 むるを引捕まへん、又萬一與之助の調べたり逃げんとせし時は  
 謂はば伏勢と川積り、東西の要所々々におさらば新太と三島屋  
 の一乾分、緒川安五郎と、二人の要所々々におさらば新太と三島屋  
 モ一腹の隙もなく考へたり、文三は權現堂の屋根に、目立たぬや  
 うに吹かすて、來る道を窺ひ、「フム野郎共來やアがつたな、今  
 中に泡吹かすて、來る道を窺ひ、「フム野郎共來やアがつたな、今  
 低く、何れも足音を忍び、モ一好い頃と思ふ時、三島屋大助はヒ、一

夜は能く來て下すつた、文三も二月三月留守にしやすから、何分お  
 頼ん申しや、す、採今夜は知立の役人衆も、文三の顔に免じて此賭博  
 は大目に、見方此方で酷い目に逢つた、近頃岡崎の方には賭場荒らしが流行  
 つた、賭場、其奴等が來ねえものでもありやせん、御用の聲に、十手  
 風にも、別に恐れる事はありやせん、何うやら、岡崎で女郎屋になつてお呉ん  
 なせえ、其賭場荒らしといふが、何うやら、岡崎で女郎屋になつてお呉ん  
 る、三島屋大助の身内らしいといふ事、又加勢にやア遠く名古屋、仲  
 枇把島の源四郎も來てゐるとか、お官の目を偷ひ吾々無職渡世の仲  
 間、ありながら、お官の御用風を借りて、領分違ひの土地へまで乗  
 込むたア、憎い奴ぢやございせんか、皆さん何うか其積りで、恐  
 れず、にゐて下せえやし』と、言へば一統の血氣の連中は「太い奴だ、  
 偽御用の偽十手なら、アベコベに引捕まへて、町役所へ突出して呉  
 れやう』と、教團まきした、其頃の事ゆゑ賭博は公然の秘密、禁じら

と、呼子の笛を吹いた「御用々々」と四方に聲の起つた、時定めて  
 一同は「ソレ大變」と逃げかと思ふと一向平氣で「フーム來だな  
 莫迦にしてゐやアがる」と立ち上る者もない、振上げた十手の手前、  
 岡崎方は面目ないから「コリヤ御用だぞ、多勢打寄つて天下御禁制  
 の博奕を致す横道者、御用である尋常にお細を受けれ」と我鳴れば  
 一色文三の乾兒、具塚の三次、蒲郡の伊藏、上州熊などがヤット立  
 上つて「何んだ籠棒奴の三次、蒲郡の伊藏、上州熊などがヤット立  
 の知立ちやア見ねえ面だ、御用だ………汝達ア全体何處から來た、此  
 ねえよ、寝違えて戸惑ひでもしたのか、小便で面でも洗つて出直し  
 やアがれ」と罵れば、メレ氣味になつた岡崎方「オヤ」と魔誤づ  
 くを、大助も黙つて見ているられず。

(四)

「オイ篠原の身内、大きな事を云ふな、領分違ひにせよ、天下のお  
 尋ね者、鱗與之助を隠まつた一色の文三、何方の領分だらうが、苦  
 情の言へた義理ぢやなからう」篠原方の具塚の三次が「巫山戯た事  
 を吐すな、今何と言つた、天下御制禁の賭博と言つたぢねえか、今  
 更苦しがらやアがつて、方角違ひな事を吐すな………ヤイ皆、此の捕  
 方は賭場荒らしに來たやつ、方角違ひな事を吐すな………ヤイ皆、此の捕  
 と叫べば、皆彼方此方、向ふ勇氣もなくなり「リアー」と  
 波の聲を揚げた、此の大勢に手向ふ勇氣もなく「アッ」と言つて枇  
 杷島の源四郎、惘れ顔になりし處へ、一色の文三が参り「ちやア皆  
 さん、俺は先を急ぎますから、此場の所は宜しくお願ひ申しやす  
 ど言ひ人の男を急ぎますから、文三が一刀の柄前に手を懸け、寄ら  
 ば斬らんの身構へで、三人連れ悠々と行く「ヤアあの若い武士は  
 が、お尋ね者の與之助だ、中へ遮り入りし具塚の三次が「賭場荒らしの  
 跡を追はんとせしが、中へ遮り入りし具塚の三次が「賭場荒らしの

張本、枇杷島の源四郎、三島屋大助を逃がすな」と押取り巻く、現在目前に敵を見ながら、其側へ近寄る事が出来ません、残念無念と一同足摺りしたが、魔誤々々すれば命が危なく「ソレ引上げろ」でトソク逃げ出したが、跡は亂暴にも「逃げる奴は追ふな」「馬の草鞋でも叩き付けてやれ」などと小石を投げて、篠原勢はトツと笑ひ一同以前に親分の思ふ通りに行つた、源四郎や大助の裏をかいて、「マア是で幾挺となく列べて、柄杓を立て、各自に酒を呷りたりの泡を吹かしてやつた」と快く笑ひ用意の酒樽を開き、無論拭冠りの鏡を抜きて、幾挺となく列べて、柄杓を立て、各自に酒を呷りたりの此時蒲郡の伊藏が「貝塚の哥兄」「何だ」「上州熊が未だ戻つて来ねえ」此「フム、何うしやアがつたらう、彼奴は氣の勝つた野郎だからせ」源四郎でも叩ッ斬らうと思つて、長追して行きやアしめえか」「さア夫を案じてのやすがね、若しや間違ひでもなけりやア宜いと思つて……」と心配してゐますと、走り奴の金太といふ若い者が飛んで來

た「哥兄達、熊哥兄が生首を提げて歸つて來やしたせ」と知らせれば「ナニ、生首だ……ッレ見ろやつけたんだ」「酷い奴だなア」と憫れる處へ、上州無宿の熊五郎は、血汐の滴たる首を、重さうに提げてると、「兄弟、ア、重いもんだ、首なんてものは自分の胴の上に乗つてると、何でもねえが斯うして提げると重い」とゴロと權現堂の前へ抛り出した、三次も妙な顔をして、首に逆しなくつても宜いの……」と苦笑ひする「イヤ、ヤ、哥兄、此奴は何うしても首にせにやア、親分の前へ濟まねえのだ、今夜は之を肴に此の上で飲明さう」蒲郡の伊藏も不審顔で「ヤ、熊、親分が源四郎や大助に、一泡吹かせろとは言ひなすつたが、首にまでしろとは言はない、そんな者前は兎角氣が早くつて可かねえ」「蒲郡、莫迦を言ふない、そんな者の首ちやねえ、奥にゐた客人の敵と言つた、戸小源太の首だ」「ギエ」「親分の歸んなさるまでは、鏡を抜いて首を入れ、柄杓でチャブと有合

りです。から、失禮だが此處でお別れ申しやす」といふ、與之助は、「イヤ親分、三州前芝に於て、御辭退申したを斯くまで遠くお送り下されて、私共夫婦は實に安樂に故郷へ歸られました。此度は何から何までのお世話は、與之助死すとも御恩は忘れました。お恩返しに女性の手紙を「文三様、夫婦の身が落着きました。安心なし、御恩返しを致します」と夫より外に言葉なく、文三は是で安心なし、伊豆から陸を東海道へ出て、三州知立の篠原村へ歸れば、文三の思ふ壺へ陥りて名古屋の枇杷島源四郎、岡崎の三島屋大助は、這ふて、名古屋で其筋へ訴へ出でしが、故かお取上げたが源四郎が怒つなり、其後に判りしは、全尾州公は勿論の事、藩中の人々も鱗與之助の事に就ては、御承知故、總て與之助の事に就ては、詮議と見

を入れて打笑へば、夫と聞いて二人は喜び「熊、何日にねえ大手柄だ定めし喜びなさるだらう、マア親分の歸るまでは、汝に預けて置く」やがるな」三次も苦い顔して受取りたり、茲に首尾能く尾張と三河の一場は片附きしも、扱一方は伊豆へ渡らせ、義に依りて鱗與之助夫婦を三州前芝まで送り、便船で伊豆へ渡らせ、スツカリ案内を教えふ地といふ、下總銚子の港まで行かれ、やう、案内を教え立別れたり。

(五)

一色の文三は與之助夫婦を案内して、首尾能く伊豆まで送りしが、「モ一向ふ地へ渡るの便船が澤山ありやすから、心配は要りやせん、俺もモット送つて行く」と宜いんだが、権現堂の跡始末も氣懸

救かかれ、何の弱味があるのか、段々に身代を絞取り取られるを見て、  
 異見もした。到底自分此の力に及ばず、同じ下總の内でも、遠く離  
 近しい處の父の許へは、此の都合行かれず、同じ下總の内でも、遠く離  
 れし銚子の港へ來りしものにて、又與之助に取ては、現在の伯父  
 故斯く取急ぎて尋ねしなり、與之助は銚子の町へ出て、印橋村から  
 出た佐原屋兵衛といふ、廻船問屋は何處でござるか」と尋ねれば  
 「ヘイ佐原屋さんの跡ですか、夫は此本町通の角で、アレ〜向ふ  
 に見え黒い店藏のお家です」と教へて呉れた、與之助は心附かず  
 其言ふが儘に角へ來て見ると、成程表は六間の間口又折曲つて、六  
 間引廻して十二間の間口、立派なものだがヒヨリと戸が閉切つてあ  
 る、不審に思ひ其ツイ前の煙草屋へ入り煙草百目を買ひ、一寸一喫  
 しながら「向ふが佐原屋兵衛ぢやな」「ヘイ以前は佐原屋さんで  
 さいました」「フ〜、然らは何れへか轉宅致したか」「イ、エ……其  
 お氣の毒ですが……轉宅といふ譯でもございませせん」「全体何う致し

ろか大いに同情する方にて、夫を追廻したり召捕つたりしやうとす  
 る者の訴は取上げにならず、間違へば訴へ出た者の方が危なく  
 マア、お咎めがなかりは未だしもの事、遂に源四郎も大助も、今  
 度は眞個の泣寝入りとなりたり文三は此れが爲に近國へ名が響き、  
 名古屋と岡崎の両貸元を凹ませしといふので、双方の乾兒がソロソ  
 ロ「篠崎の身内にならう」と三人、五人と毎日に如く尋ね來て文三  
 の方は大繁昌となりたり。下總の銚子港に上陸し、勞れも忘れてお経だ  
 話變りて鱗與之助は、宿に置き、自分は一人で佐原屋を尋ねたり、此  
 けを、市川屋といふ宿に置き、自分は一りで佐原屋を尋ねたり、此  
 佐原屋といふは、與之助の父左衛門の唯一の弟で、與兵衛と申し  
 たるが生來好きなしな廻船問屋の仕事で、次男でもあり銚子に出  
 たるが、夫が一朝鱗  
 世を始末、無鱗の家から莫大な資本も出したるが、夫が一朝鱗  
 の家の没落となり、お淺の父は隣村にゐるが、お淺が悪醫者の上岡良庵に  
 より外なく、お淺の父は隣村にゐるが、お淺が悪醫者の上岡良庵に



たのか」「御主人様始め御家内中、お行衛が判りませんので、誠に何  
 うもお氣の毒な事でございます」「行衛が知れん、ソリヤ又如何なる  
 仔細か、身共は少々佐原屋に縁故ある者、何うか詳しく聞せかて貰  
 ひたい」「左様でございますか、マア何うかお登り遊ばして下さいま  
 し」といふより店頭ながら鱗與之助は、一寸登つて主人の話を聞か  
 んとせり。

(六)

煙草屋の亭主は、左も氣の毒さうな顔で「貴君様が佐原屋與兵衛様  
 の、御縁家と聞きますと、洵に何うも申し難い事ですが實は當時佐  
 原屋さんは、身代限りといふ始末で、御家内中行衛知れずにお成り  
 なされましたのです」與之助も餘りの意外に、惘れしが亭主の方は  
 愈々氣の毒さうに「マアあの與兵衛様が、平生好いお人だけに、私

は尙お氣の毒に存じますので……夫は世間の者が皆お氣の毒だ、  
 と申し暮らして居ります、併し何分にも金銭上の事は、何うも仕方  
 のないもので、自然に身代限りをなさらなけりや別に致方のない始  
 末にお成りなされたのです、マアお話は長うございませうが……コレ  
 よお茶を差上げな」と小僧に番茶を汲ませる、與之助も心配ゆえ一  
 心に聞く「佐原屋さんには、持船が三艘ございまして、マア斯う申  
 すと失禮ですが、回船問屋となる、彼方の荷を預つて、此方へ賣  
 つてやつて口銭を取る、此方の荷を捌いてやつて、其口銭を申受け  
 る、其中には遠國から捌いて呉れと言つて、大層な荷を任せて来る  
 夫を一方へ廻して賣ると、斯ういふ取引ですから、身代と申すのは  
 此地商家藏と、船三艘なのでございます」與之助を武家と見て詳し  
 く、商ひ向きを話せし上「夫が先月の大風に三艘の船は但馬の沖で  
 難船して、サア之が御運が悪かつたのです、御身代といふ船は失なつ  
 ませう、サア之が御運が悪かつたのです、御身代といふ船は失なつ

て、積荷は沈めて荷主へは、其償なひをせねばならず、多くの乗組の船頭水主の妻子は、お店へ泣き込んで来るといふ始末です、與兵衛さんは涙脆いお方ゆゑ、何は扱置いても今日に差支へる人々を救はねばならぬとおつて、船頭衆へは有金残らず、分けてお遣りなされ夫から地所家藏を賣拂つて、三艘の荷主へ償ひをされました、譬え自分には編笠一蓋の身となる人も、人様に迷惑を掛けねば宜いと思切りの宜い被仰り方で、他へお移りなさうといふ矢先、今までの取り引先から、佐原屋さんの没落と聞くと、貸した者は取りに来る、借りた奴は拂はずにお家の没落を幸ひに、平氣であるといふのでサア又苦しみの上苦しみ夫を、與兵衛様は宜しうございます、御迷惑は掛けませんと被仰つて、お宅の世帯道具、お内儀様の頭髪のお物まで、皆賣拂つてソレハ、美しく、一錢残らずお拂ひをなされまして、夫からといふものは、何處へお越しになつた事やら、少しも判りませぬのです、實に何うも人の運勢といふものは、判らないもの

でございませぬと長物語り、與之助は餘りの事に涙も出ず、伯父の薄命に憫れ返れり、尙ほ心配なのは母と妹の身の上にて「御亭主お蔭で能く判りましたが、してあの佐原屋には印幡村から三人の女子連れが、厄介になりましたが、居る筈ぢやが、夫は如何致しましたらうか御承知かな」と尋ねれば「へい承はりて居りました、若い美しい、娘さんと、能く宵た妹娘さん、其阿母様と三人で、久しくお在でした、何でも印幡村の名主様の御内室や娘さん方で、其お宅が御不運続きで、到頭大家が潰れて其名主様の御兄弟といふので、佐原屋さんへお引取られなすつたとか、イヤ御不運な時には、寔に何うも仕方のないもので、其の又引取つたお宅も又ア、いふ事になりますとは……何れも佐原屋さんとお隠れなすつたと、風の便りに聞きました、何れも判然とは判りませぬ」といふ與之助も此上立入つて聞く處もなく、之は種々御心切に忝ない、お蔭で能く判りました

迦に下等、格段の遠ひが出来たり、與之助は一色の文三から贈つた  
 金があるゆゑ宿屋に泊つてゐても差支はなきが、幾日経てば母や妹  
 の行衛が判るか知れず、ソコで町盡頭を目立たぬ處に、一軒の小や  
 かなる家を借り、夫婦暮らして質素になし、お縫は先づ嬉しく思ひ  
 て「貴君、妾は斯うして貴君と睦まじく暮らして居れば、此上の喜  
 びはございませぬ唯氣になるのは貴君様の、阿母様や妹御のお行衛  
 日々御城下へお探しに出で遊ばして、お歸りになるとア、今日も  
 知れなかつたと、被仰る度に遊ばして、お歸りになるとア、今日も  
 まする、處で貴君様斯様なすつては下さいませんか、貴君様は水戸  
 でも以前お尋ね者とお成りなすつたお身、お探しになるにも定めし  
 其お氣支ひがございませう、之れは妾が代つて當分御城下を探して  
 見ませう、先方が御婦人の事ゆゑ、猶且女は女同士、一寸氣の附い  
 た處から判るまいものございません、毎々聞いて大抵夫と判つて  
 りませんが、人相も御容子も貴君から、毎々聞いて大抵夫と判つて

水戸の祝町といへば、天下お許しの遊女場にて殊に濱が近きより、  
 船頭漁師が荒ッぽく錢を費ひ、又は水戸の御城下に遊女場を許して  
 なき故、城下の者は此祝町まで遊びに行くと、大磯ヶ濱といふ大きな  
 町もツイ側にある、隠れて田舎の宿場女郎屋とは言はれず、夫に極内々で  
 水戸の武家も、隠れて遊びに来る、愈よ遊女は高く止まつて、船頭  
 漁師の遊ぶ家は、別になり、上等の家は莫迦に上等、下等の家は莫

(七)

た「と挨拶を致して、此の店を出でしが、宿の市川屋へ歸り直に、  
 お縫に此事を語りて、兎も角水戸へ行かんとして、是から其足で發足  
 する、水戸は與之助に取つては、鬼門になるより水戸より濱へ出て  
 祝町といふ遊女場の助に取つては、鬼門になるより水戸より濱へ出て  
 の市中を探らんと決心せり。

居ります、如何でせうさう致しましては……」とお縫の言葉に、與之助も膝を打ち、「コリヤ好い所に心附いた、成程女を探すには女の方が宜しい、俺は唯顔を知つてゐるからと、夫のみ思つて自分參つて居つたが、コリヤさうして貰ふ方が、洵に以て好都合ぢや、何うか明日からは左様致して呉りやれ……」併しお前も水戸よりは遠かぬ、筑波山の麓、椎尾村に父母もある事ゆゑ、己が村の者に顔を見られてもなるまい、其邊は随分氣を附けるやうに……「ハイ有難う存じます、被仰る通りでございます」お縫は其翌日から、與之助に代り城下まで、三里の道を通ひては町の本通りは上市下市、裏かに裏へ入つて、門並に覗き込むやうにして、四方八方八重文字に町の中を歩き廻りて探し歩るき、丁度半月許りは城下通ひを致し、時は霜月の末、モ一極月に入ると正月は目の前願はくば當年の中に、探出して目出たく母子兄妹の名乗りがさせたいと、お縫は道々神佛

の堂宮を見ると、立寄つては祈念を懸け、今日は霜月の晦日、明日からは師走月に入ると齧も結ふ間もなく、櫛卷の儘でス々、何となく氣も急ぎ、又今日も良人へ無駄足でしたと告げねばならぬと思へは足も進まず、冬の日脚のモ一暮れ近きに、驚きて足を早めし時アツ、リ草履の前鼻緒を切り、生憎持合せたは座紙許りにて困つて居るを夫と見兼ねたか、格子作りの氣の利いた家の出窓より、十七八の娘が「モシお困りでございませよ、麻を差上げますから、此方へお入りなすつて、お立てなさいませよ、麻を差上げますから、此方へも嬉び「有難う存じます」と其家の軒へ入る「オヤ失禮ですが其お草履では又切れませう、幸ひ私共に麻裏がございませよ、之をお召なすつて……」と麻裏草履の生新らしのを、一足出したらば、三里の道を歸るのですから、お縫も「左様ですか、では失禮ですが拜借して参ります」と受取りながら心中では此邊には草履屋もなければ此草履を借りて行き、明日は新らしいのを買つて返さうと思ひたり、

此時其家の門へ一人の武家が来り、お縫の顔や姿をシロく見て居たりしが、お縫が禮を言ひ、出て行くを見済まし其跡へズツと入り

(八)

彼の武士は其家へ入れば「オヤ旦那宜うこそ被入りました、サア何うかお登り下さいませ」と娘に奥へ案内して「阿父さん、犬飼の旦那様がお越しですよ」と呼べば聽て奥より此家の主人が出て、客室へ案内せり「ヤア旦那、チツトもお顔をお見せなさいませんでしたね、二三日前も家内とさう言つてたんで、旦那は何うなすつたらう、若しお風でもお引きなさりやしめえかつてね、今日あたりはお見舞に出やうかと思つてたんです」「ア、存外無沙汰を致した」「イ、御無沙汰はお互ひです」とて大層心易さうに座に着きたり、此

家は水戸様へ出入の町人、平生之と云つて御用達はせぬが、御禮とか他の諸侯方をお招きになると、儀式の事があれば、万事御用を承はる、桐生屋佐左衛門といふ人物、先代は水戸黄門光圀卿が當國太田の西山に御隠居の折、お相手に出て殊の外御氣に入りにて斯ういふ歴史の家柄ゆゑ城主より御扶持を頂き氣樂に暮し、常に唯アヲ遊び、恭將棋俳諧、香花茶湯などを、人に教へて樂みとなし斯ういふ人物ですから、藩中の人も皆遊びに参り、妻の半分と娘お品の三人にて外に召仕も四五人あり、今参りしは犬飼三郎といふ、御勘定方なるが「お品」「ハイ」「今お前、若い女中に麻裏草履を貸して遣つたやうだが、アリヤ全体何處の者だ」「ハアあの人は、全然知らない人なんです」「お品」「ハイ」「今お前、桐生屋お前知つては居らんか」「イ、エ………お品、一体どんな女なんだ」「ハア何日も自家の前を通るんですがね、何となく奥床しい姿で、妾お通りの着てゝすが、舊は身分あるお方だらうと思ひまして、

にア、可愛さうに、落魄れたお方の果と、失禮ながら見ておまし  
 た處今日は自家の前で鼻緒をお切んなすつたから、妾が一度紅葉見  
 の時に、穿いた切りの草履を上げたのです」「さうか、夫は能く上げ  
 た、往來で鼻緒を切ると、眞個に困るものだ」「何氣なく言ひしが  
 犬飼三十郎は尙氣にして「毎日通ると申すからは、明日も通るであ  
 らうな」「ハイ」「何と氣の毒だが明日通つたらば、一寸なりとも呼入  
 れて、一つ俺に面會させては呉れまいか」「佐左衛門は笑つて「アハ  
 、品も嬌然、次の室にゐる母に「阿母さん、犬飼の旦那様は置けない」娘の  
 つてお貫ひなさいよ、何日も通るお女中に、大變なんですから……」  
 ……」佐左衛門の妻お半も茶を入れて持出しながら「マア憫れて了ひ  
 ましたね、だがあのお女中ならば、お武家様はお目を附けなさる  
 のは當り前ですよ、何日もお品に言つてるんですよ、女といふも  
 のは戶外を歩くにも、キヨロ／＼後方此方を見たり、又澄し過ぎて

ツン／＼して行くものぢやない、あのお方の御舉動を御覽、お急ぎ  
 のやうではあるが、何となく約束しやかで、身に飾る處がなくつて  
 も、着物でも帯でもチャンと着こなして、あの頭髪でも油氣の少な  
 いのに、髪のもも亂さずはんに躰みの好いお方だつて……旦那様  
 つて下さいましたしな」心易立てに言つたが三十郎迷惑顔で「イヤ左様  
 に取られては困る、全くそんな譯ではない」「そんな譯でないなら、  
 どんな譯なんですすよ」と女房は眞顔に問ふ、娘のお品も冷評してゐ  
 たり、佐左衛門は考へて「たが其女中といふのは、何方の方から來  
 るのだ」「ハイ下市の方からですが、何うやら城下の人ぢやないやう  
 です」「幾つぐらゐるだ」「二十一……」けだも寢てゐなさるから、モツ  
 トお若いかも知れませんが、時々丸髷に結つての折もございます」三  
 十郎は不審顔して「ナニ丸髷……」良人があるな」「マア旦那のあのお  
 顔は……」と一同に笑ひ出だせり。

す「宜しい」と約束は出来て、佐左衛門が「旦那、マア御怒りなすつて被居い」と勧めたけれども、三十郎は「他に立寄る家もあるから」として、引止めても聞入れず立ち出でしゆゑ、桐生屋でも不思議に思ひゐたり、扱翌日に午の刻少し過ぎに、三十郎は来りて「昨日は邪魔をした、お品何分頼むぞ」お品は母のお半と共に迎へまして「サア此方へ……大層お早うございましてね」佐左衛門も笑顔で「旦那は氣が短いから、晝からモ一お越になつたんだ、ボンヤリして待つてもゐられまい……お半や、一口上げて……」と酒肴を出して、四方山話の中にも三十郎は、彼の婦人の事を考へ居りて談も、何日もものやうでなく、例の通り夕方に細のある事を思ひしが、佐左衛門は問はんとせす、例の通り夕方に細のある事を思ひしが、佐左衛門は子から一心に戸外を眺めて居れば例の如くお縫は今日も是といふ懸りもなく、打つて帰る中にも、御免遊ばせ」と入り来たれり是にはして呉れた家、此處だと思ひ「御免遊ばせ」と入り来たれり是には

犬飼三十郎は、桐生屋佐左衛門一家から笑つて冷評されしが、一向真面目顔で「イヤ其様にお其方が怪しく思ふならば、俺が其女に會つて尋ねたい事があるのぢや、其尋ねた時に聞いてゐたらば、總ての事が判るではないか」佐左衛門も少し真に受けて「ヘイ面白さうな、那に失禮を申してはならん、兎も角若りは後の事に……イヤ旦那にして其女中は、又明日は通るだらう、旦那の被仰る通りして……イヤお品やお前が呼込むが宜からう」ハイさうしませう」といふ、三十郎は「では又明日参ろうが、全体何時頃に當家の前を通行するな」可「左様ですまい、暮六つの鳴る少し前でしたら、大底お通んなさいま

(九)

お品も意外で、向ふより家に入つて來るとは思はぬのに「あの昨日は御心切様に有難う存じました、今朝程出がけにお返し申さうと存じました、早朝から失禮と存じまして、延引ながら唯今持つて上りました、洵に何うも御大切な履物を有難う存じました」と昨日借りた麻裏草履、泥を拂つて紙に包み、鄭重にして返せば、お品は「マア御鄭寧に……イヤエお返し下さらなつても宜しうございませぬ、今日には遅くなりなりましたので、一寸急ぎますから、ほんの御挨拶だけ申上げます、御免遊ばせ」と言つて歸らうとする、お品は未だ初心氣に、之を止める言葉に困りて「阿母さん」と呼ぶと、夫と心得た母のお半が「貴女」一寸お待ち遊ばして下さいますし、失禮でございませぬが……」「ハイ」「妾は此子の母でございませぬが、チト貴女様にお伺ひ致した事がございますので、一寸お登り下さいますか」「ハイ」とお縫は當惑して「あの……今日少し遅くなりましたか」

ので、心も急ぎますから又……」「イヤ、エお手間は取りませぬ、一寸だけで……穢い家でございませぬが……此方へ」「何う致しまして……妾はチト……」と辭退する、お半はお品に目配せして「お前もお勸め申してお呉れよ」お品も心づき「サア貴女、一寸の間なら宜しうございませぬが……」お品も心づき「サア貴女、一寸の間なら宜しうひつつお品は手を取つてお縫を引上れば、迷惑がるお縫は、何とでも言ひ断はらうとせしが、折角昨日も見ず知らずの此身へ、麻裏草履を貸して呉れし心切、又満更悪い人とは思はれず、一寸ぐらゐならと思ひ返して「左様ならば何ういふ御用でございませぬか、何ひませう」と上にあがれり。

(十)

お縫は是非なく桐生屋佐左衛門方へ、遠慮しながら登りしに、お品



が、お長家門の一軒を拜借して居つたのでござる、何うして其許は  
 仕掛、お縫は気が急ぐよりモソ、茶煙草盆を薦め、四方山の話  
 の今日お引止め申したの、は、實は昨日女様が立寄の處を、一寸  
 御覽なすつた去る方、是非お目に懸りたいお目に懸れば判るか  
 らと被仰つて、先刻から待つてお在でな、何うか一寸お會ひ  
 下さいますやう」と言はれて疵持つ足のお縫は大に弱りました、若  
 しや此身を鱗與之助の妻と知つては、夫とも伊勢の四日市  
 で、二人の者を害めた時の事、知つた人ではあるまいかと、其處は  
 女の事とて氣も打付かぬ、處へモ一お品が通じて、犬飼三十郎は莞  
 爾笑ひて入り來たり「お品もお半も、氣の毒ながら一寸遠慮して呉  
 れ「畏りました」と二人は引下れば、三十郎はお縫に「イヤ突  
 然の事で定めてお驚きなすつたらう、拙者は其許の父上伊勢屋清左  
 衛門殿に、種々お世話に相成つたらう、犬飼三十郎でござる、如何と存  
 許は未だ子供……今より丁度十年以前ゆゑ、お覺えは如何と存する

に、お疑ひも晴れやう……今より十年前には、此三十郎は若氣の自然  
 は無理でござらぬ、唯下俯向いてゐるを見し三十郎「イヤお包みある  
 に困りしお縫が、唯下俯向いてゐるを見し三十郎「イヤお包みある  
 阿父様が世話を焼いてゐる、思ひ出し何と返辭をして宜いか、答へ  
 見れば成程自分幼少の時分、長家門に一人の見る影もなき浪人を  
 當時此水戸にお住居でござるか詳しくお話を伺ひたい」と言はれて  
 儀致し居つた、御前の首尾悪くなり、十年以前には、此三十郎は若氣の自然  
 りにお疑ひも晴れやう……今より十年前には、此三十郎は若氣の自然  
 儀致し居つた、御前の首尾悪くなり、十年以前には、此三十郎は若氣の自然  
 お邸へ引取り下され、種々御意見下されて、諸方へ手廻し方  
 舊主水戸家へ歸参願ひ、僅一ヶ年にして主家へ立戻り今御勘定方  
 として五十石の祿を頂戴致すは、是全く清左衛門殿のお庇、御恩は  
 決して忘却致さず、毎々昨年の秋お訪ね致したる時、何日になく清左  
 居つたる處、一昨年秋お訪ね致したる時、何日になく清左

は母お半と共に、中の間へ通して、茶煙草盆を薦め、四方山の話  
 仕掛、お縫は気が急ぐよりモソ、茶煙草盆を薦め、四方山の話  
 の今日お引止め申したの、は、實は昨日女様が立寄の處を、一寸  
 御覽なすつた去る方、是非お目に懸りたいお目に懸れば判るか  
 らと被仰つて、先刻から待つてお在でな、何うか一寸お會ひ  
 下さいますやう」と言はれて疵持つ足のお縫は大に弱りました、若  
 しや此身を鱗與之助の妻と知つては、夫とも伊勢の四日市  
 で、二人の者を害めた時の事、知つた人ではあるまいかと、其處は  
 女の事とて氣も打付かぬ、處へモ一お品が通じて、犬飼三十郎は莞  
 爾笑ひて入り來たり「お品もお半も、氣の毒ながら一寸遠慮して呉  
 れ「畏りました」と二人は引下れば、三十郎はお縫に「イヤ突  
 然の事で定めてお驚きなすつたらう、拙者は其許の父上伊勢屋清左  
 衛門殿に、種々お世話に相成つたらう、犬飼三十郎でござる、如何と存  
 許は未だ子供……今より丁度十年以前ゆゑ、お覺えは如何と存する

に、お疑ひも晴れやう……今より十年前には、此三十郎は若氣の自然  
 は無理でござらぬ、唯下俯向いてゐるを見し三十郎「イヤお包みある  
 に困りしお縫が、唯下俯向いてゐるを見し三十郎「イヤお包みある  
 阿父様が世話を焼いてゐる、思ひ出し何と返辭をして宜いか、答へ  
 見れば成程自分幼少の時分、長家門に一人の見る影もなき浪人を  
 當時此水戸にお住居でござるか詳しくお話を伺ひたい」と言はれて  
 儀致し居つた、御前の首尾悪くなり、十年以前には、此三十郎は若氣の自然  
 りにお疑ひも晴れやう……今より十年前には、此三十郎は若氣の自然  
 儀致し居つた、御前の首尾悪くなり、十年以前には、此三十郎は若氣の自然  
 お邸へ引取り下され、種々御意見下されて、諸方へ手廻し方  
 として五十石の祿を頂戴致すは、是全く清左衛門殿のお庇、御恩は  
 決して忘却致さず、毎々昨年の秋お訪ね致したる時、何日になく清左  
 居つたる處、一昨年秋お訪ね致したる時、何日になく清左

衛門殿は、元氣なくして血氣宜しからず、お内儀も亦打鬱いでゐら  
 る、故、其仔細をお尋ね申したるに、唯一人の娘お縫、家出致して  
 行衛知れずとの事、心當りは四方八方、心の懸け下され、娘の行衛を探  
 たが、今以て判らず、手前も驚きました、及ぶだけお申して、夫よ  
 し呉れよとの事、人にも頼み自分も心を附け居りましたが、夫よ  
 り水戸へ歸つて以來、人にも頼み自分も心を附け居りましたが、夫よ  
 す昨日其許のお顔をみて、稚顔に見覚えある許りか、豫て父上より  
 承はる目印は、右の眉の下に一つの黒子……何うかお隠しなくお打  
 明し下さい、何事も手前に打明けて下されば、お力となつて思ふお  
 方……其事も承知致し居るが、是のみは此場では申されぬ事、兎も  
 角悪いやうには致さぬ、何うかお縫様といふ事、お隠しなく萬事御  
 相談下さるやう願ひます」と、恩人の娘と思へばこそ、犬飼三十郎  
 は言葉をお断はり犬飼三十郎も夫と覺れば「イヤ然らば萬事は明日の  
 「洵に御心切深い仰せ、唯今までは何事も申上げまいと存じて居り

ましたが、其御心切に絆されまして、申上げます、妾は筑波山の麓  
 椎尾村伊勢屋清左衛門の娘お縫に相違ございませぬ」「ア、能くお打  
 明し下さいました」「併し父母の許へは、決して妾の居所は……」「宜  
 しうござる、夫は萬事貴女の思召し通りに仕りませう」事が判りて  
 佐左衛門方でも大に驚き、改めてお縫に、お品もお半も會ふ事にな  
 りたり。

(十一)

桐生屋佐左衛門、妻お半、娘お品の三人がお縫に會ひて、種々慰め  
 られてお縫は頻りに歸りを急ぐゆゑ「そんならお送り申しませう」と  
 佐左衛門の方で心切に言ひしも、お縫は現在の住家を打明かさぬよ  
 り跡よく断はり犬飼三十郎も夫と覺れば「イヤ然らば萬事は明日の  
 事と致した方が宜からう、日暮れぬ間にお歸り下さい、明日は相違な

い、外に致方はない、明日は其犬飼三十郎と申す人に面會致すが宜  
 さらう「イエエ會ひますのは宜しうございませうが、若しや父の方へ知  
 かせまして、又何かと喧まし事でも申して參つたらば何う致さう  
 かい存じます、貴君……何處へか轉宅致さうではございませんか」  
 「イヤさう氣を狭く持たんでも宜しい、先づ明日は犬飼氏に面會致  
 すが宜い其上で又何とか相談も致さう、先方でも亦悪いやうには致  
 すまい」「ハイ貴君がさう被仰る事ならば、會つても宜しうございま  
 す、若しも父母の方から何と申して參ると……妾は何うしやかと  
 思ひまして……」  
 れり、存外平氣な與之助、翌朝になるお縫は早く參つて、常に  
 尋ねる方の事は差措き、犬飼氏に會つて能く御相談申すが宜い」「ハ  
 イ……有難う存じます、兎も角會つて見ますとお縫は何か氣が進ま  
 ぬも其日は早く宅を出て、例の通り探せるだけ歩けるだけ諸方を尋

く手前邸へ……」とて上市の鍛冶町の私宅を教へたりお縫は厚く禮  
 を述べ、此家を立出で其日は遅れて我家へ歸れば與之助も心配して  
 「オ、お縫か今日は大層遅かつたのう」「ハイ思はぬ事で遅なはりま  
 した、肝腎の阿母様や御姉妹の事は判りませす、知れずとも宜い事  
 が判りまして、妾は難儀致しました、昨日草履の鼻緒を切りまして……」  
 「あの妾が悪うございまして、昨日草履の鼻緒を切りまして……」  
 と是から其話を詳しく致しました上、貴君、妾は困つて居るので  
 すが、何と致したものでございませう、怒じ父の方へ知れましては  
 又、何う申して參るか判りませせん、妾は寧ろその事明日はあの桐生屋へ  
 も犬飼さんのお邸へも參らない事に致さうと存じます」「併し先方か  
 ら當方へ尋ねの參つたら何うする」「イヤ、エ其心配がございませ  
 妻は決して此祝町の住居は申しませせん」「イヤ言はずとも狭い此土地  
 此濱の方へ歸つたと見たらば、二里や三里の道、忽ちにして此處へ  
 參らうと思ふ」「飛んだ事を致しましたねえ、皆妾が不行届きでござ

お縫は今は是非なく、與之助と共に暮らしてゐる事を打明せば、犬飼三十郎大に喜び、「イヤ能くお打明し下された、此上は及ばずなから儀でもござらぬが、與之助が尋ねると申すも、三年の月日も経つてゐる、下總印幡村の方には何うか知らぬが、此水戸の御領地は大丈夫、紀州家の名前、將軍家御落胤と偽はりて、御三家は捕り相成つた天一方を、前以て與之助殿が見破りし事は、御越下は能く御承知であるゆゑ、縦令其許の上、御處判るとして、目出たく伊勢屋清

(十二)

かれてゐればお縫は今更ながら返答に困れり。

ね廻りしが相變らず何んの手懸りも付かず、仕方がなく兎も角もと上市の鍛冶町へ来て犬飼といつて尋ねしに判りて板堀に小ぢんまりした一構へ、流石水戸様の御家來質素な造りになつて居ります、案内を乞ふと、「サア何うか此方へ……最前から旦那様がお待兼でございます」と下へも置かぬ女中の扱ひで、奥へ通され、三十郎は妻のお節と共に出て來りて挨拶をなし殊にお節は初面會とて感慙なる事は、主人を扱ふも同様に、恐縮せしお節は隅の方小さくなる事、三十郎はニコニコして「お縫殿、昨日は四邊を憚つて何事も申上げなかつたか、今日はお女もお心置きなう、悠りとお話し下さい、決心は有難う存じます、何ぞ父の方へお知らせぬから……」  
 「ハイ御助殿も御一緒であるやうな」  
 「ハイ……」  
 「イヤお隠しなさらんでも宜しい何うやら祝町邊にお住居らしいな」  
 「イヤお隠しなさらんでも宜しい何うやら祝町邊にお住居らしいな」  
 「イヤお隠しなさらんでも宜しい何うやら祝町邊にお住居らしいな」

左衛門殿の、跡目相續といふ事に致しては如何でござらう」と打語ればお縫には誠に以て嬉しく思ふ所、併しお縫は熟ら々々考へまして、  
 「何から何までお心添へは有難う存じますすが、良人は母と姉妹の  
 行衛を捜して居ります、夫も宜しい、斯う申すと失禮ぢやが、伊勢清殿へ  
 物語れば、成程、夫子として入られた上は、其母上や御姉妹の行衛を探  
 すの助殿が、養子として認められ、上は、其母上や御姉妹の行衛を探  
 が出られたならば、元目懸つての上の事、間のない事と存する、後見は伊  
 勢清殿があれは、元目懸つての上の事、間のない事と存する、後見は伊  
 つ之は奥助殿にお目懸つての上の事、間のない事と存する、後見は伊  
 前も折甲斐があるといふもの、お縫殿は御家の事を再興させらう、  
 めなされては如何ぞう」といふ、お縫殿は御家の事を再興させらう、  
 す、奥助殿の表立つて良人と定め、お縫殿は御家の事を再興させらう、  
 やうに不自由な暮らしの中、姑お浅妹お鶴お龜の行衛を探すのは

却々一通りの事ではないが、モ、我家へ歸れば、入費は構はず、  
 を澤山雇ひ金に飽かせて捜したら、屹度早く知れるに違ひなし、  
 うして鱈の家を建てたら、定めて良人も喜び、三方四方が宜い  
 事なれば、身は家出した事ゆえ、父は何んと言はうか、イヤ、  
 ……併し此身は家出した事ゆえ、父は何んと言はうか、イヤ、  
 飼様が説言を被仰つて下さらう、外ならぬお方の事ゆえ、コリヤ無  
 事に濟まうかよ、其處は賢いや、何分宜しくお願ひ申上げます、  
 先立ちつものは涙にて、犬飼様、萬事宜しくお願ひ申上げます、  
 から良人へは勸め致しませう、然らば直に手前も御同道致して、  
 下さいまし、「イヤ承知致した、然らば直に手前も御同道致して、  
 之助殿にお目に懸り、萬事御相談申さうか」「イエ、それでは又早  
 まつた事と、長人か申すやも判りません、承知致させました上、  
 りましたで、貴君様の御心切を申聞け、承知致させました上、  
 人を連れて參る事に致しませう」といふ、御同道あらば、之に越したる

水戸の濱、祝町へイッとして歸りしお縫は、土産の品の數々を  
 良人の執成しで戻り、其上父の跡目相續、鱗の家、の再興、此二つが出  
 來ると言へば、定めし良人も喜ぶならんと唯夫れのみ、氣も急ぎ、心  
 「貴君、唯今戻り、門口から聲を掛けるが、家の内はヒッソリ返辭がない、  
 易立てに、唯今戻り、門口から聲を掛けるが、家の内はヒッソリ返辭がない、  
 「オヤ何處ぞへお出でになつたのか知らん、貴君……」と表戸を引  
 いても押しも明かす據るなく裏口へ廻れば、戸も直に開きたれ  
 ば「マア未だ日も暮れないのに……何うしたのだらう、何か御用が  
 出来て、お出なすつたのであらうか」と家の内を、獨りキヨロく  
 見て居りましたが、別に之れといふ用事の心當りもなきより、行燈の

(十三)

事はござらぬ、では明日は……」「ハイ明日と申す譯には參ります  
 いが……」「併し善は急げと申す事もあれば、與之助殿より其許のお  
 氣が變つたりする、折角手前の考へも水の泡になるといふもの、  
 何うか明日は是非とも、否やの返辭を承はりたい」「畏りましてござ  
 います、成るべくお早くお返辭を致します、妾も嬉しう存じます事  
 で、今日歸りましたらば、直に話は致す積りでございます」「フム、  
 夫れが宜しい、今晩の中にも與之助殿が御承知になつたらば、御同  
 道下さるやうに……」「夫れは又餘り早急な事でございます、三十郎も  
 成るべくお早くお返辭を致します」と茲に相談定まりて、  
 大いに喜び「ソレよお縫様に、御馳走をせんか、お土産も宜しいか  
 な」と何から何まで鄭重なる用意は整つて居ります、お縫は、快  
 く馳走になり、數々の土産物を貰ひ、之を携へて祝町の我家へ戻り  
 て參りたり。

せる、千里見透しの術の爲め、諸國遍歴すると、書添へてあります  
 「アッ」と許りに泣伏せしお縫は、恰も狂気の如くなり、其書面  
 を抱いて家の内を駆巡り戸外へ出ては西東を眺め、唯思ひ惱んで居  
 りしが、此方は犬飼三郎が、事初より承知の事ゆゑ萬事  
 も今度の事に就ては、桐生屋佐衛門が最初より承知の事ゆゑ萬事  
 此男に相談して一旦與之助夫婦は桐生屋へ参り、夫から何かの用  
 意をせんと、其日お縫を歸して後、直に桐生屋へ参り、コレコレの  
 次第と語り、佐左衛門夫婦が「夫はマア結構でございまして、御夫婦の  
 私等は夫婦引受け申して下さいますなら、宜しうございまして、御夫婦の  
 身はお引受け申して下さいますなら、宜しうございまして、御夫婦の  
 日御夫婦のお越しになりましたのを待つて、此方から参つて、御夫婦の  
 お似合なさる事です、伊勢清様へ歸参の事になさるは、チト犬飼様にも  
 様に、お勤め申して、伊勢清様へ歸参の事になさるは、チト犬飼様にも  
 私が一つ参つてお勤め申しませう」と打出せば「イヤ成程さうだ、

火を掻き立て机の上の書置に目を止め、「お縫殿へ………奥之助より……  
 ……ヤ、ツ」と驚き直に開封して見れば、今までは流浪の身、世を忍  
 ぶ身を、能く愛想を盡かさず仕立て呉れた、命を捨て、今までも、  
 共に伊勢四日市の危難、三州知立の不慮の難を、此身に離れず、  
 呉れた真節は死して身も忘れぬ難い、併し考へて見ると俺のや  
 うな、廣い天下に身を置き、夫と成れるか判らず、是までも此一事  
 は、度々思案して、快く別れ、成れるか判らず、是までも此一事  
 幸ひに此度は好い人に逢つて、お前も父の許へ詫言して、今日  
 たのだ、お前の生みの父、母は、ツイ目の前、父の命に依つて、  
 人に頼んで、父の許へ歸り、養を盡すが宜い、父の命に依つて、  
 を定め、伊勢清の家の子孫繁榮を願はねばならぬ、最早此身の味  
 れて呉れ、伊勢清の家の子孫繁榮を願はねばならぬ、最早此身の味  
 尙自分母姉妹の行衛を採す爲めと、二つには豫て其奥を究めんと  
 火を掻き立て机の上の書置に目を止め、「お縫殿へ………奥之助より……  
 ……ヤ、ツ」と驚き直に開封して見れば、今までは流浪の身、世を忍  
 ぶ身を、能く愛想を盡かさず仕立て呉れた、命を捨て、今までも、  
 共に伊勢四日市の危難、三州知立の不慮の難を、此身に離れず、  
 呉れた真節は死して身も忘れぬ難い、併し考へて見ると俺のや  
 うな、廣い天下に身を置き、夫と成れるか判らず、是までも此一事  
 は、度々思案して、快く別れ、成れるか判らず、是までも此一事  
 幸ひに此度は好い人に逢つて、お前も父の許へ詫言して、今日  
 たのだ、お前の生みの父、母は、ツイ目の前、父の命に依つて、  
 人に頼んで、父の許へ歸り、養を盡すが宜い、父の命に依つて、  
 を定め、伊勢清の家の子孫繁榮を願はねばならぬ、最早此身の味  
 れて呉れ、伊勢清の家の子孫繁榮を願はねばならぬ、最早此身の味  
 尙自分母姉妹の行衛を採す爲めと、二つには豫て其奥を究めんと

に、今は氣も心も狂はしきまでになりたり、桐生屋佐左衛門に引取  
 られて後には、話分れて一方は與之助、幸ひに母と妹二人の事に就て  
 聞込んた事が、あるより、夫れを便りに今一度探して見んと今は唯一  
 人にて足手纏ひはなきもお纏の身も思ひ出して、其後を氣支ながら  
 野州都宮に懸りたり、下總銚子港の佐原屋兵衛が身代限りをせ  
 し上、水戸に隠れてゐると風便に聞きしを、夫婦諸共に詮索した  
 が判らず、見れども叔父與兵衛は水戸に居るとして、不圖母の姿  
 を宇都宮で見しといふ者ありて、何うも之は當てには出来ぬが、下  
 總と常陸と下野、何れも隣から隣といふ譯ゆゑ、何んとも知れない  
 と思ひければ、與之助は先づ此都宮へ來り、此の城下は奥州街道  
 の入り口、江戸へも便利が宜いので、却々繁華な町にて、日光街道へ  
 の参詣者は當此時此地を通り又其時分に、大名家の通行が有りて、實  
 にも賑やかなりが與之助は何方を向ひても、知つた者なき土地とて、少  
 氣兼ね入りぬより片ッ端から城下を探して廻り、水戸の城下で

然らば氣の毒ぢやが、頼む事にしやう』と遂に仕度をして佐左衛門  
 が祝町なる與之助の隠れ家へ來りしが與之助は居らす、先づお纏  
 ら一十什を聞いて厚く之を慰め「兎も角與之助様の御行衛を探す  
 事に致しませぬ未だ遠くは参られませまい、何うなとして私が手の  
 せらだせしませぬ未だ遠くは参られませまい、何うなとして私が手の  
 せるだせしませぬ未だ遠くは参られませまい、何うなとして私が手の  
 お纏を連れて水戸へ歸れり。

(十四)

鱗與之助は妻お纏の身を憐れみ、現在間近い筑波山の麓に、其父母  
 が加之福に暮らして居るに、此の身の爲に肩身を狭くし、貧しい  
 其日を送らせざるが不意さに自分身を隠してお纏は親許へ歸らせ、  
 是から先を安樂にさせてやらんと、思ひ遣りしが仇となり、お纏は  
 縦令乞食をしてなりと、死んでも與之助の側を放れまいといふ一心



が、何うであらう「左様でございますねえ、今お師匠さんが居りま  
 せんので……」「ア、何時頃に歸るかな」「左様です廊の方へ行つ  
 て、すから遅くなりませう」「然らば歸るまで待たう」「上り框に腰を  
 掛くれば、其梳子も少し驚き、早速奥へ入つて誰やら男を呼起して  
 ゐるらしい、之は御亭主らしい、今午睡してゐしが、起されて目を  
 擦り、出て来た。「さうか、お武家様だつて……難かしいな、そん  
 な堅苦しい人に、二階を貸した日にやア、俺なんか窮屈で耐らねえ」  
 と獨語ちつと出て、奥之助を見ると存外優しい年若な武家なので、  
 「へい私が亭主で御座います、其斯んな穢ねえ家の二階を、貴君  
 が借りやうと被仰いますか」「いかに……手前は仔細あつて  
 生國は申されんが、少々尋ねたき者があつて、今日宇都宮城下へ参  
 つたのちやが、何日まで居つて判るか知れぬ尋ね者、宿を取つたの  
 では何かと無用の入費も要る、當家で貸して呉れるとなら、誠に以  
 て手前の僥倖ぢやが、何と主人承知しては呉れまいか」「へエ、成程

も覺えがありて、何うも唯空しく四方八方を、キヨロ／＼歩き見廻  
 る許りでは判らず、何か宜い便利な方法はなきかと考へて、不圖町  
 をブラ／＼行くに一寸曲つた小路に、女髪結といふ小さな看板が出  
 て居り、隣家は按摩按腹灸點鍼の療治といふのは大きな招牌で、  
 別に女が両肌脱いで、灸を据へる所の書が描いてあり、其女髪結の  
 二階には、貸二階と紙の札が貼附ければ、與之助は考へて「之は  
 勿化の幸ひである、先づ顔の廣きもの又隣の按摩も療治に出れば  
 を彼方へ請賣りして、女髪結は諸方へ出歩いて、女に近寄り此方の話  
 世間の噂は多く聞くであらう、あの二階を借受ければ是等から母上  
 や妹の便りが聞かれるかも知れぬ、コリヤ好い事を見出した」と獨  
 りで喜んで宿も取らずに此家へ差當り住む積り「許せよ、ハイ被入  
 いまし」と女の聲、梳子と見えて十五六の小娘がお武家さんなんぞ  
 が、何の用があつて来たのかと言はぬ許りの顔でゐる「當家の二階  
 は貸して呉れるか」「ハアお貸し申すさうで……」  
 「身共が借受けたい

お年若で尋ね人……判りやした、親の敵を……といふやうな事で……  
 ……」イヤ、左様な事ではない」「イ、エお隠しなさいますな、宜  
 しうがす引受けやした、俺も男です」妙な男でスツカリ肩を入れた  
 りけり。

(十五)

此の女髪結は宇都宮では有名なものにて、藝妓とか女郎とかは、是  
 非此女に結つて貰ふ、お鹿と言ふ通り者なり、亭主は米藏と言ひ、  
 之も髪結なるが今は女房の稼ぎで澤山ゆゑ、之の助の風体から舉動を見  
 根が物好きで俠氣で閑人と來てゐるより與之助の取り、與之助も  
 て、何うしても親の敵を探さず、豪い若武士と見て取れり、暖味な返辭  
 を迷惑とは思つたが、此家の二階を借りる事に取極めたり、米藏は女房が歸ると  
 をして、此家の二階を借りる事に取極めたり、米藏は女房が歸ると

「オイお鹿、喜んで呉れ、斯んな穢ない家だが、何うも立派なお武  
 家様がお出でなすつてよ、二階を貸せと被仰るんだ、俺ア直にウン  
 と言つて、お貸し申したんだ、お粗末を申し上げちゃならぬえせ」  
 「マアお前さん、お武家様なんか二階を貸して何うする積りなの  
 さ、窮屈で困つて了ふはね」「莫迦を言へッ、手前なんか判るもん  
 かい、敵討の助太刀をするも同様なんだ、俺も手前も浮び上らア、窮屈  
 髪結のお鹿さんは大したもんだつて、俺も手前も浮び上らア、窮屈  
 ぐらゐは辛抱しろい」「ヘエいそんなら何かい、二階へ來なすつたお  
 武家様は仇討をなさるお方なのかい」「さうだらうと思ふんだ、隠し  
 てゐなさるが、其處が奥床しいんだ、察して上げろよ」「さうかね、  
 マア妾もそんなお方に、お目に懸りたいもんだね」「フム、今俺が會  
 はせてやらア、何うも好い男だア」是から二人は二階へ參つて、與之助に  
 をするの、女房の好い男だア」是から二人は二階へ參つて、與之助に  
 撥をなし、女房のお鹿もスツカリ與之助に惚込んで了つて、夫婦は

ねえか、阿父様を討たれて無念やる方なく、一家内一同其仇討に、分れくになつて旅をしてゐなさるのだ「イヤ亭主、さう取られては手前誠に以て迷惑致す」「なんてお隠しなさいますなよ、嬬も俺も斯んなガラガラした人間ですが、人様の一大事となりやア、何んで人に申しやせう、近所へだつて今度二階へ来た旦那は、俺共夫婦の者のお主筋に當る方だと言つて眞個の事は言つちやアありません、御安心なせえまし、して阿母様と妹さんは、何ういふ人相で……」

夫れも詳しも申すが、手前が唯當城下を探し廻るのみでは、何うも何日判るか知れん、何卒其許等御夫婦のお心に懸けられて詮索して頂きたいのだ「ヘイ宜うがす、嬬アはア、して女許りの中を廻るんです、です、ソリヤ屹度探し當てやせう、俺も亦元は一軒の床屋の主です、交際は随分廣くして、今でも月に五人や十人の、旅鳥が飛込んで来やすが、皆相當の事はして歸します、仲間を渡つて探しやせう」と

請合ひ込みたり。

下へ降りると「お前さん、お賄ひの處は何うしたもんだらう、訝しな物は上げられないよ」「ソリヤ心得てるよ、俺が斯うしてプラク、遊んでるんだから、賄ひ役は引受けた、何でもドンク、魚屋から取つてよ、お氣に入らなきやア仕出し屋から、刺身でも照焼でも取らア」「そんな事を言つてお前さん、全体お賄ひは幾干に極めたの」「構うもんかい、損徳なんかの勘定して、敵討が出来るか」「大變な勢ひである、或日の事「御亭主、お内儀もお揃ひだから氣恥かしく思つてゐます、四邊に人のゐない處を見て云ひたるが、お鹿も米藏も膝を進めて、中にも米藏は乘氣になり「旦那、敵の人相は何ういふ風で、年の頃は……」與之助も困つて「イヤ左様な事ではない」「ヘエー」「手前、母と妹を尋ねて居るのぢや、夫れに就て一つ相談があるとお申すのぢや」「ヘエー……」阿母様と妹さん……フーム判りやした、お鹿や何うだい、旦那は偉いが阿母様も妹さんも、皆大したもんぢや

出ツト立ち、夜中は人出なく、女子供は勿論の事、宵からモ一用達に  
 出て、又男の方でも廊通ひや、素見連は段々減りゆき、廊は寂れ  
 る一方にて、その響きが髪結の方へまで及ぼし、お鹿も差向き己れ  
 の營業に影響するゆへ、米藏に向ひ「お前さん、あの二階のお武家  
 様ね、妾ア餘ッ程腕の出来るお方と思ふが、何うだらう此の頃流行  
 る辻斬を、退治して貰つては……ねえ」「成程、ユリヤ好い思ひ附きた  
 ヲリヤ父の仇討をしやうといふのだ、柔術だつて劍術だつて確かな  
 ものだ、俺ア未だ腕を知らねえが、平生の目の配りといひ、何うも  
 當り前の者とは違つてらア」「そんならお前さん、一つお武家さんに  
 願つて御覧な」「宜しッ、一つお話をしてみやう」と米藏は早速二階  
 へ登つて來ました「旦那、御退屈でございませう」「オ、亭主か、何  
 うぞ此處へ……」「ハイ有難う存じます、時に少し御相談がありやし  
 て、伺つたんでげす」「ハ、ア相談……何ういふ事かね」「ハイ外の事  
 でもありやせんが、此頃は世間が不景氣でしてね、自家の邊が行く

父の仇討と間違へらし鱗與之助は言譯してもお鹿と米藏が昔かぬ故  
 其儘にして唯母と妹の行衛を頼み、勿論人相も年頃も話して母の名  
 はお淺、妹はお鶴とお龜の二人といふ事迄も何の的もなげ、何うか  
 宇都宮にゐるならば、探して會ひたし、他に何の地へ行く、與之助  
 はお鹿の二階に、唯アラ遊んで居り、お鹿は新地へ行く、此の廊  
 内の者に片ッ端より尋ねてゐる、十日程も判らず、米藏も來る人毎に、  
 事を申し居らねばなる、十日程も判らず、米藏も來る人毎に、  
 一月以上を頼んでゐる、十日程も判らず、米藏も來る人毎に、  
 一便りのみ相待ち居りしが、其後ち何者とも知れず、此城下の櫻の馬場  
 と申す處へ、夜な夜な現はれて、通行人を斬る、此物願が起  
 りしか、其頃の事ゆゑ、町人は斬られ損といふ有様、此の願が起

(十六)

廊らうなんか、淋しみしいもんださうです、成なり程ほど、夫おとこれは困まどつたものぢや、  
 當あた年は米こめの出で來きも好よいと聞きいたが、何なにんで不ふ景けい氣きなのであらうかな、  
 『サア御ご相さう談だんといふは此こ處ちの事ことです、且かつ那なが一いち番ばんウウンと言いつて下くださ  
 りやア、此この不ふ景けい氣きは忽たちち變かつて、上う々々景けい氣きになるんで、『ハテ妙めう  
 な事ことを申ます』『マアお聞ききなせえ、此この半はん月げつ許もとり前まから、櫻おうの馬ば場ばと  
 いふ所ところで、何なに處ちの武ぶ士しか知しらぬが、何なにれ城じやう内ないのお武ぶ士しでせう、日ひが  
 暮くれると往わう來らいの者ものを、スバリと斬きるんです、可か哀あさうに横よこ町まちの  
 半はん公こうなんかは、たつた一人ひとりの稼かせぎ人ひとで、母はは親おやは盲めくら目めなんでさア、夫おとこ  
 れが且かつ那なの前まへだがお武ぶ家けつて者ものは罪つみな事ことをする、半はん公こうを叩たたつ斬きつた  
 んで、幸さいひ氣き丈ぢやうな男おとこだから、ドドンン其その場ばを逃にげ、漸おそく知しつた者もの  
 の家うちまで來きて轉ころがり込こんだんで、醫い者しやに見みて貰もらふと肩かたから袈げ裟さが  
 けに斬きられたので、マア命いのちは取とれぬ、唯たださへ母はは子こが其その日ひ暮くらしの上うに  
 の體かたにアなれめえといふんです、唯ただ目めに見みへてゐます、まだく斬き  
 二月ふたつきと病やま附つきいたら、二人ふたりとも飢う死しは目めに見みへてゐます、まだく斬き

(十七)

宇う都と宮みやの城じやう下か、櫻おうの馬ば場ばは一方いっぽうを堀ほりを叩たたへ、夜よは人ひと通とほりも杜と絶たつえて  
 思おもひた者は五人ごにんや六む人にんぢやありません、氣きの毒どくな者ものが外ほかにもあらう  
 と思おもひやす、處ところで且かつ那な一つ貴あや君きみが、ああの櫻おうの馬ば場ばへ行いつて其その辻つじ斬きり  
 する奴やつ等を、片かたッ端はから叩たたつ斬きるとか、巧たくまく行いく事ことから半はん殺ころしの目め  
 に會あはせた上う、ググルル卷まきに引ひ縛ばつて、自おの身み番ばんへ突つ出だしたら何なにうで  
 せう、諸しよ人にんを助たすけの爲ためにもなるんです、且かつ那な何なにうせ出で來きななる腕うで  
 だ、一いち番ばんやつ、け下くださいませんか、と大おほ變かなる相あ談だんを持もつ込こみけれ  
 ば、與よ之の助たすけは一寸いっすん返かへ答こたが來きません、米こめ藏くらは何なに處ちまで、與よ之の助たすけを柔じゆう道だう劍けん  
 術じゆつの達たつ人にんと思おもひ詰つひ、仇あだ討うち々々と夫おとこれのみ思おもひ込こんで、與よ之の助たすけを柔じゆう道だう劍けん  
 に取とりては迷ま惑わくな事ことなるが、辻つじ斬きは實じつ際さいにて廊らうでも町まちでも、藝げ妓ぎな  
 どは灯あかりが点ともくと、直ただにお座ざ敷しきから歸かへりて用もち心こころせり。

「今晚は何處へ出る、明晩は何處へ出る、人の數は何人、人相はコレ、ヤイお鹿……、今旦那の被仰つた事を聞いたか、驚いたもんぢやねえか、劍術なんてものは驚いたもんだ、旦那位になると見なくつても相手は何ういふ者で、そんな面附きで何の着物を着てゐるといふ事まで判るんだ怖いもんぢやねえか」「マア恐ろしいもんだねえ」と與之助は米藏夫婦の問答に可笑しくなりしが、兎も角例の術を施して見んと、両眼を閉ぢて暫時考ふれば、鱷て驚きし風にて「亭主、亭主、能く判つた」「モ一判りやしたかい、早いもんですなア」「櫻の馬場へ」「櫻の馬場へ……大變ですなア、大丈夫ですかい、其三人も四人も一緒に懸つて来て、辻斬にされるやうな事はありやせんかい、夫は心配せんでも宜い、俺が附いてゐる」「へ旦那が一緒だから安心ぢやアありやすが、若しも側杖でスパーツと害られると、何うも大變ですから

淋しき所にて、唯さへ寂寞の此の櫻の馬場へ辻斬が出ると言ひ出でてより愈よ通行人はなく、辻斬する方でも據ろなく、そろ／＼町の方へ出張り來りて城下市中の寂れとなり、モ一夜分は女子供は申すに及ばず、大の男でも大抵他出を見合せたるが、夫れと聞きし與之助は、お鹿米藏の夫婦へは、當城下の爲ゆゑ、辻斬の者を取押へる事は、及ばずながら致して見やう、併し身共も大望抱えた身なれば、輕々しく無法者に刃向ふ次第には參らん、篤と先方の模様を試して見る、米藏も感服して「成程、大切のお身ですから御道理です、併し何うして先方をお試しなさるので」「辻斬の曲者は、唯城内の者とのみでは判らぬ、何ういふ身分の者で、姓名は何といふか、是等を調べてから、取押へる事にしよう」「旦那、串戲言つちやア可げやせん、夫れが判る位なら、何も驚く事はありやせんが、櫻の馬場へ出るといふだけなんで、誰も顔を見た者はねえんで……ソリヤ知れつこはありやせん」「イヤ夫を身共に知る法を心得てゐる」「へエー」

ね「イヤ身共一人で行つても宜いのだが、誰か立會人がなくては面白くない、一緒に参れよ」宜うがす、俺も男です、御城下の爲になる事だ一番命懸けで行きやせう」で其辻斬の發當人といふは、身分あるお人だから、無暗な事は出来ん、相當の禮を以て取押へやう」

「成程、引捕まへたら構ふ事はありやせん、アン殿つてやりやすよ身分のある者だつて、判らねえ中は知らねえ振りして殿つてやりやす」

「無法な事をしてはならぬ、先づ身共が怪我をさせないやうに懲らせて進せる積りだ、アア黙つて見物してゐるが宜い」面白いなア

旦那そんなら何うか今夜は側杖だけ食はねえやうにして下せえ」宜しく、時に内儀、お前は廊へ毎日髪結に行くさうぢやな」左様でございませう」今日は何時頃行くか」エ、今日は八ッ時から行つて、夕方まで……夫れも淋しくなりますから、日のある中に櫻の馬場を通つて、歸ります積りですよ」左様か、では今日は何と申す揚屋へ参る」大抵良い家へは行きますので、今日は巴屋か一番暇が要りま

すので、後にしやうと思つて居ります」然らば一番終りが巴屋といふ家ぢやな」左様です、何と氣の毒ぢやが其の巴屋と申す家へ、俺を案内して呉れんか、田舎の郷士で金満家だとか觸れ込んでな」ハア宜うがす」ソコで少々調べる事があるのぢや」旦那、櫻の馬場へ行くといふに、廊へ行くのは方角違ひありぢやせんか」あの家で遊ばんと櫻の馬場へは参られぬ、妙ですな」不思議に思つてゐます、夫婦は與之助の申す儘にして、其日の夕方になりたり。

(十八)

鱗與之助は一色の文三より少しなからぬ金を錢別に贈られしを、皆お縫に與へては参りしが、尙多少の用意はあり、素より金銀などには無頼着の男、十兩の金を米藏に渡して、萬事頼むといふから、米藏

や、直に此座へ呼んで呉れ「あの折角でございませうが、  
 鶴婆は長まつて大盡氣取りで、當家申すは、何と申すか」  
 之助は故意と大盡氣取りで、當家申すは、何と申すか」  
 下へも置かぬ扱ひ、其頃の十兩故に、却々器用な遊で出来れば與  
 さるよ」と聲高く景氣を附ける、サア晝から入らつしやい、お登んな  
 ました、モ一階から聲を懸けてあるから入らつしやい、お登んな  
 誠、此の位勿体附けて置いて、夫から登れば値打がありやす」  
 事、米藏も小聲で「旦那、勤めさせるやうにお鹿に吩咐して、お勧め申す  
 だらう」「何んと被仰るか、妾が一つ自家の人にお上げ申したら何う  
 隠居といふ御身分さね」「さう、そんなら此方へお上げ申したら何う  
 になつて暮らしたいと被仰るの、ソコで自家の夫がお世話する事に  
 なつたんだが、何しろお金がウンとある裕福なお方だから、マア若  
 事、米藏も小聲で「旦那、勤めさせるやうにお鹿に吩咐して、お勧め申す  
 だらう」「何んと被仰るか、妾が一つ自家の人にお上げ申したら何う  
 隠居といふ御身分さね」「さう、そんなら此方へお上げ申したら何う  
 になつて暮らしたいと被仰るの、ソコで自家の夫がお世話する事に  
 なつたんだが、何しろお金がウンとある裕福なお方だから、マア若

は面白がり「妙ですなア、辻斬の曲者を退治するに、方角違ひの女  
 郎屋へ登るとは、何んだか旦那判りませんよ、私には……」日暮れ  
 になる、米藏も羽織を引懸け、一寸鬚の刷毛先を直して「サアお  
 伴を致しやせう」と是から與之助と二人で、新地の廓へ参り、與之  
 助は「米藏」「へい」「内儀は巴屋に参つてゐやうな」「へいあれ程堅く  
 申しましたので、屹度行つて居ります」と今巴屋の門まで来ますと  
 二階から「アラお前さん、何處へ……」旦那のお伴で、マア……オヤ  
 旦那様、二階から失禮でございませうが、旦那のお伴で遊ばしては如何  
 でございませう」と聲を懸けた、スルト其お鹿のゐるの、此家のお  
 職を勤める花魁、千山といふ美人の部屋です、側に居合せた鶴婆な  
 ぞが「お鹿さん、若い立派なお武家様だが、アリヤ全体何處のお方  
 なの、お前の御亭主さんが一緒なんだね」と問ふ「ハアあれは自家  
 の夫の、舊の御主人様でね、江戸のお旗下の御次男で、江戸のやう  
 な騒がしい處は厭だと被仰つて、此邊の田舎へ引込んで、一生郷士



揚げ詰めのお客様がございますので……お氣の毒さまでございます  
 が、花里さんといふ花魁に願ひます、先づ此家では此の花里さんが  
 二枚目で……」「黙れ、武士たる者は二枚目だの、二番目だのと申す  
 婦人は厭ひぢや、其一と申す千山を呼べ、其代り金子の處は、其  
 揚げ詰めの客人より、二倍三倍も高く拂つて遣はさう、早速其の千  
 山を呼んで参れ」米藏は困つて「旦那、御無理を被仰つては困りま  
 す、廓でお遊びになれば、どんな立派なお武家様でも其廓の法に従  
 はなくちや可げやせん」「フム然らば何うあつても、其廓は参れん  
 か」「へい」「よしッ此上は藝妓を呼べ、歌い女ならば又趣きが變つて  
 宜しい、何人でも構はん、呼集めて當家の引繰返るやうな騒ぎを致  
 せ、其騒ぎに降参致して、千山が此座へ参るやうに騒げ」と愈々  
 大盡らしい、金に飽かせた我儘を言出せば、巴屋でも近頃辻斬一  
 で、夜遊ぶ客人が少ない處へ、斯うして晝間から好いお客が舞込  
 とは、有難い事だと言ひながら、サア藝妓や舞妓、翫間を揚げてド

ンチヤンクの大騒ぎ、此方は千山を揚げ詰めの客といふは、是も  
 與之助と同年配位、立派な武士でありまして附添の武士は三人、何  
 れも筋骨逞しく、武藝者らしい人物「何んぢや先刻からの騒ぎは」  
 と一人が言出せば、一人が「怪しからん奴、吾々の遊興を妨げんと  
 して、あの悪騒ぎを致すのでがなあらう」「何者ぢや」と聞きますと  
 鴛婆が「何處のお人ですか、初會のお客様です」「して町人か武士か」  
 「へい立派な若いお武家様です」武士と聞き先客は承知せず。

(十九)

四人連れの武士客は、却々承知せず「其客と申すを引張つて來い」  
 と我鳴り、鴛婆も仲どんも困りしが、此方も近頃での上客、捨て、  
 も置かれず、據ころなく鴛婆が與之助のゐる座敷へ参り、ドンチャ  
 ンク／＼の賑やかな騒ぎの中へ「エ、お客様へ申上げます」と言つたが

三味太鼓の音のために話はず、與之助「コリヤ一寸静かに  
致せッ」鶴の一聲、ヒタリと静まつた。「お遊びの中へ申兼ねますが  
一寸彼方のお客様から被仰り付けて、據らなく参りましたが、あの  
失禮ですが私の方の座敷へ、御一緒になつては下さいませんか、あの  
も角旦那様にお越しを願ふ」この仰せでございませぬ、與之助は笑つて  
「フム、お前は却々如才ないな、先方の申す通りを此方へ通じたら  
ば、定めて立腹しやうと思つて御一緒になつて遊んで呉れなご、  
巧い事を言つたな」「イ、エ眞個にさう被仰いました」「イヤ、俺は  
此處にゐても能く知つて居る、四人の武家は俺の騒ぎに驚いて、吾  
々の遊興を妨げるは怪しからぬ、何者だと言つたらう」「へい」「夫れ  
見ろ、夫から町人か武士かと尋ね、武士なら愈よ面白い、其客と申  
すを此處へ引張つて参れと言つたらう」「マアお客様、貴君立聞きを  
なさいましたね」「莫迦を申せ、俺は能く知つてゐる、引張つて行か  
れやう、コリヤ米藏一緒に参れ」俺は能く知つてゐる、引張つて行か

なりましたな、何うなさる積りです」「フム俺は何うもせん、先方の  
爲す儘に任せて、引張つて行かれるんだ」與之助を腕前確かな者と  
は思つてゐるが、未だ其手際を知らないから、米藏も今夜の辻斬退治  
を、大きに心配してゐる處、夫が前にモ一四人の武家を相手に、喧  
嘩らしいから愈よ心配になつて来た「旦那、何うか穩便になすつて  
下さいましたしよ、今晩の肝腎な一件がありやすから」「心配致すな、今  
晩の口明けに一寸やつても宜い」「大變ですな」と憚れて跟いて行き  
今彼の四人が坐して、大盃を傾けてゐる廣間へ通れば、正面には未  
だ年若の武士、其左右には節痛立つて見るから強さうな武士が三人  
側に千山花魁が控へてゐる、與之助は四人の前へ出まして「お召し  
に依つて参上した、手前は江戸表から参つた浪人、池沼鯉之助と申  
す者でござる」名乗つて叮嚀に一禮しますと、正面の若年なる氣高  
い人物が「フム、盃を取らせる、當宇都宮の御家老、鴈坂右内殿御息  
イヤ御姓名は承知致し居る、當宇都宮の御家老、鴈坂右内殿御息

同苗右馬之助殿でござらう。斯る遊里の事ゆゑ宜い加減な名を言はんとせしに、反對に先方から本名を言はれ、一同身分を隠して遊興をしてゐる事故、ハッ、と困じ三人は、目に角立て、何事か言はんとするを「御三方、野暮でござる、何事も打解け合つて、笑ひ話を致すが遊女の湯上郷右衛門殿の高弟、水木八平……其許は家中の若侍衆に剣道を教ゆる安深藤助……皆お名前は承知致し居る、其方が石塚兵藏……來お心易くお願ひ申す」と前へ出て無断で盃を取り「コレ一杯注がいか」此一言に度膽を抜かれて、四人共顔を見合せしが其中に「コレか、お前の座敷にゐる藝妓を、残らす此座敷へ連れて參つて、お取遣り多々の藝妓が繰込みて來る、據ろなく脇坂右馬之助も盃の取り

御息様ださうだよ」と耳打する、與之助の池沼鯉之助は、米藏を呼び何やら之も耳打せしに米藏は一、人面白がり四人の酒の相手をし、て酔はせて仕舞へり。

(二十)

酒宴も酩酊になりて、與之助の池沼鯉之助が、米藏と喋し合せて、か鹿を始め鴛婆から藝妓などへ申付け、頻りに酒を惡強ひさせれば、脇坂右馬之助も思はず盃を過ぎし、水木八平、石塚兵藏、安深藤助も酔ふて了ひ、日が暮れて了ふと尙の事、モ一、同へレケとなれり、鯉之助は右馬之助の側へ寄り、小聲になり「扱脇坂氏、大分酩酊致したが、此の勢で如何でござる、豫てのお樂しみを遊ばしては」と右馬之助は怪訝な顔で「ハテ初めて御面會致したに、豫ての樂しみとは」お隠しなさるな、手前能く存じます、フム、扱は敵婚千山を

斬、なれど唯一人にては何となく氣後れ致して出来ませぬ、貴殿御  
 同道をお許し下さらば、今晩にも早速御同伴が願ひたく、其爲に今  
 日斯様に手を盡し、各々方にお目通り致したのでござる、何卒御承  
 知が願ひたい、聞いて見て右馬之助にも合點が行き「フム、左様  
 でござつたか、然らば唯今三名の者へも申聞け、早速御返辭を申上  
 げやう」と言つて、大抵承知せし様子故、大いに喜び、鯉之助は返辭  
 を待つ、別席で四人は相談したれば、水木八平が「あの鯉之助とい  
 ふ奴は唯江戸の旗下といふが、何うも油断のならぬ奴、四人の者  
 姓名を知つてゐるのも不思議と思ふに、尙櫻の馬場の一條まで探り  
 知ることは、愈よ以て怪しい奴、此上は辻斬に同道と見せかけ、今晩  
 櫻の馬場に於て、彼奴を試し切りに致しては如何」「イヤ之れは面白  
 い」「併し彼奴も武藝の嗜みもござらう、容易には斬れませぬ」「イヤ  
 ヤ最前より窺ふに、未だ若年の身の上、吾々四人を一齊に蒐らば、  
 何程の事やあるべき、殊に脇坂氏が手練を以て斬らば何れの恐るゝ事

呼んで、琴を弾じさせよと仰せらるゝか、其儀なれば手前も好める  
 道、尺八を合せて拙ひながら申す處、柔和な御人、何か手前も承は  
 は御堪能であらう、お見受け申す處、柔らかな御人、何か手前も承は  
 りたい」と何氣なく言へば、鯉之助笑つて「イヤ左様な風流の事  
 ござらぬ、手前まで武骨ゆゑ、武藝の外には何も用意がござらぬ」  
 「フム然らば何が樂しむと仰せらるゝ、其許の毎夜のお樂しみで  
 ざる」と他へ洩れぬやう小聲ながらヒツリと言切つた、右馬之助判  
 らない、考へてゐると鯉之助は「櫻の馬場のお樂しみでござる」ギョ  
 ッとして驚く右馬之助「ウーム」と言つて答へが出来ず、誰知るま  
 いと思つた辻斬の一條、併し黙つてもゐられないから「何事を仰せ  
 られるか、池沼氏手前には判りませぬ」「イヤお隠しあらば申上げや  
 う、豫て貴殿が水木石塚安澤の三氏を召連れられ、櫻の馬場へ夜な  
 夜な辻斬りに出らるゝ事、手前は疾くより存じ居る、決して手前は  
 其事を荒立てやうと申すのではござらん、實は手前も大好きの試し

不 思 議 や 與 之 助 の 五 躰 に は、 四 人 の 者 の 斬 附 け る 白 刃 が 立 た ず、 斬  
つ て も 何 と も な い、 與 之 助 の 池 沼 之 助 は 莞 爾 笑 つ て 「 各 々 方  
此 池 沼 之 助 は 不 死 身 同 然 で ござ る、 斬 る と も 突 っ 違 ひ ます、 到 底 及 ば  
ぬ 事、 毎 夜 辻 斬 り せ ら れ た 町 人 や 百 姓 と は、 全 然 違 ひ ます、 一 人 宛  
し 各 々 方 の 軀 へ は 此 池 沼 之 助 の 刃 は 通 り、 突 っ 違 っ 違 っ 違 っ 違 っ 違 っ  
お 見 舞 申 す」と 言 ひ ぎ ま、 ス ラ リ と 引 抜 い た 一 刀 に、 一 同 は モ 一 逃  
げ る 暇 も な し、 與 之 助 の 五 躰 に 何 故 白 刃 が 立 た ぬ か と 云 へ ば 與 之 助  
が 巴 屋 で 酒 宴 の 真 最 中、 四 人 が 追 々 酔 つ て 來 る を 幸 ひ、 大 小 を ソ ン  
と 次 の 室 へ 持 出 させ、 有 合 せ た 床 の 間 の 花 瓶 の 尻 で、 ゴ リ 大 小 を ソ ン  
を さ せ た、 其 役 目 は 例 の 米 藏 で、 却 々 素 早 い 男 だ か ら、 狐 鼠 狐 鼠 と  
一 振 宛、 側 に あ つ た 大 小 を 持 出 し、 ゴ リ 安 藤 助 の 四 人 に 前 に 突  
坂 右 馬 之 助 を 始 め、 又 水 木 八 平、 石 塚 兵 藏、 安 藤 助 の 四 人 に 前 に 突  
然 姓 名 を 言 は れ、 又 水 木 八 平、 石 塚 兵 藏、 安 藤 助 の 四 人 に 前 に 突  
身 に 立 た ぬ と あ り て 唯 々 恐 れ を 抱 き 仙 人 か 天 狗 か と 惘 れ たり、 與 之

が ござ さ う」と 家 老 の 御 子 息 と い ふ だ け、 三 人 は 煽 て 上 げ れ ば 「フ  
ム 高 の 知 れ た る 若 者、 拙 者 が 美 ン 事 梨 子 割 り に して 御 覽 に 入 れ ば  
と 威 張 り、 承 知 の 旨 を 鯉 之 助 に 告 ぐ、 然 ら ば 最 早 時 分 も 宜 し、 直 様  
お 作 致 さ う」と 是 より 五 人 にな り 告 ぐ、 然 ら ば 最 早 時 分 も 宜 し、 直 様  
し に、 米 藏 が 「 旦那、 大 丈 夫 で す か、 心 配 致 す な、 先 刻 の 計 畧 を 一  
人 と し て 知 る 者 は な い、 大 丈 夫 で す か、 心 配 致 す な、 先 刻 の 計 畧 を 一  
う か ら、 其 方 は 女 房 と 共 に 早 朝 まで 待 つ て 居 れ、 面 白 い 事 に な ら  
は お 庇 と 共 に 宅 へ 歸 り、 辻 斬 の 本 人 は ま だ 廊 に 居 る 事 故 安 心 し て 夜  
道 を 戻 り たり、 此 方 は 與 之 助 が 故 意 と 先 に 立 ち、 四 人 を 隨 へ つ、 彼  
の 櫻 の 馬 場 へ 差 蒐 れ り、 背 後 の 四 人 は 時 々 宜 け れ、 ソ レ ッ と 何 か  
合 圖 し て 一 齊 に 抜 き つ れ、 與 之 助 に 斬 附 け たり。

(二十一)

助は四人の者が憫れ感ふのを見て愈々可笑しく「各々方を斬つて進  
 せやうと存じたが、逃げもせず憫然と見てござる、其殊勝さに愛で  
 て、命だけは助け申さう、其代り、手前が其仇討として以後の見せし  
 其妻兄弟の怨みを買つた報ひ、手前が其仇討として以後の見せし  
 め少々許り冷たい目に逢はせて進める、サアお一人宛来さしつやい」  
 四人は青くなり、何ういふ目に逢はれるのかと、顔を見合せて今更  
 逃げられもせず、アル者でれば、與之助は刀を左の手に取直  
 し、右手を伸べて一人の襟髪引掴み「ヤッ」といふと、前の堀の中  
 へ抛り込んだ、幸ひ水はないが枯れた蓮が澤山あつて、泥深い事甚  
 だし、丁度投げられたのが俯向けなで、両手両足も泥の中へ、  
 グッ突込んだ、手の方が抜けない、犬つく這ひになつた處を、又も「ヤッ」  
 の方が堅く入つて抜けない、前の石塚兵藏、次の安原藤助「ヤア  
 御苦勞様」ども言はぬが「ウーム」  
 と唸つてゐる處へ、又「ヤア

ッ」と来た、今度は水木八平でビツヤリと抛り込まれた時、顔へ臭  
 い泥が舐ねたが「アッ」と思はず口を開いた途端に飛出した、  
 尾咽喉へヌラ、ア、苦しい」三人は美ン事泥堀の中へ三人列ん  
 て犬つく這ひとなり、残るは家老の御子息で未だ部屋住ながら、  
 ては其家督を相続すべき人、今自分の番だと思ひ、コリヤ耐らぬと  
 ノコ、逃げんとするを與之助が引捕へて、貴殿は、四人の中でも  
 御身分ある方ゆゑ、手柔かに扱ひ申すお覺悟あれや」といふ間もな  
 もなく、三人を投げた其上へ、スボンと投げた乗せたり、宜い災難  
 で三人は唯さへ手足が深く入り、始末が附かず「オ、脇坂氏でござるか  
 ので愈よ手足は深く入り、始末が附かず「オ、脇坂氏でござるか  
 モッット軽く願ひたい」「ヤア三人御苦勞千万お庇で身共は手足へ泥  
 は附かぬ」「申戯ぢやない、下の者の苦しさを察し下さい」「ア、さ  
 う動いてはならん、落ちる」「動かすにはゐられませんか、生きて  
 ゐるのだから」「では此儘三人でソロソロ歩いて、岸までお連れ下さ

中に又事が判り来て、多分女髪結のお鹿か其亭主米藏の口から出て  
 いか、四人は確かに辻斬りした奴等だ、諸人助けの爲に池沼鯉之助と  
 いふ、若いお武家が四人を堀へ投げ込んだのだ、評判は城下に高  
 くなり城内の家中、残りす知れ渡れば、唯悴の所存を憤り勘當と  
 職でも勤める人、池沼鯉之助は怨み身から出た錆、宇都宮城下より何  
 いふので追拂ひたり、上州高崎に乳母が縁づいてゐる、夫を頼つて行  
 處といふ的もなく、皆父母もなきより叱言の言ひ、人もなく、重役  
 きしが、三人の連中は皆外に事なく濟みしが此惡い噂が師匠湯上郷  
 から嚴しい咎めを受け、弟子の誤りは師匠の名折れだと、水木八平、  
 右衛門の耳へ入らせて、三人の誤りは師匠の名折れだと、水木八平、  
 石塚兵藏、安澤藤助の三人を呼付け、師匠の名折れだと、水木八平、  
 ざさぬか、町人の辻斬りも宜しいが、四人も蒐つて及ばず、堀の中へ  
 揃つて抛り込められると、何事ぞ重役衆の前は、何の面目も濟んだとは武藝者の同  
 席が出来ませう、お上通りや重役衆の前は、何の面目も濟んだとは武藝者の同

い「馬ぢやあるまいし、左様な事は出来ません」四人は愚圖々々言  
 つてゐる、與之助は之を見て「諸人を苦しめる奴、宜い態だ」と笑  
 ひながら立ち歸る、跡の四人は何とも出来ぬが、斯うして何時ま  
 でもゐられず、漸くの事で岸まで這ひつき、夜の明けぬ間と思ひし  
 が、モト東が白んで町人は往來し始め「オヤ、あのお武家は狐に  
 魅まれたのか」と笑はれたり。

(二十二)

悪い事は、世間へ知れ易いもので、狐に魅まれしか御家老の御子息  
 と三人の武士が櫻の馬場から、堀の中へ落ち込み、三人の上へ御子息  
 が馬乗りになり、漸くの事で這上り四人であつたのだ、神様の罰が當  
 して見ると櫻の馬場の辻斬りはあの上り四人であつたのだ、神様の罰が當  
 つて、四人はア、言ふ目に會つたのだ、恐ろしいものだといふ、其

がら、手前は決して夫で済まされませぬ、今日限り師弟の縁切り、  
 以て來當道場へ出入はお断はり申す」と断はられて、取附く島もなく  
 仕方なきより一旦歸り人を頼み詫をして見しが聞入れず、三人は青  
 くなり「水木、何うしたもんだらう」「仕方がない、唯仕方がないで  
 は済まされぬ、湯上の道場へ出入りの出来なくなつたゞけの返報を  
 するより外はない」「成程、石塚尊公は池沼鯉之助と申す者の、居所  
 を御存知ださうだな」「フム、今日前町へ参つて、海老床で髪を結つて  
 居つたら、例の大評判で手前冷汗をかいた、顔を見られぬやうにし  
 て、ソコへ出て参つたが、其時に聞いた「フム、何處ぢやな」  
 「直に海老床の裏で、女髪結のお鹿と申す者の宅の二階を借りて居  
 るさうだ、其お鹿の亭主米藏といふ者が猶且海老床と同家業であつ  
 た縁から、詳しく當家の模様を聞いたのだ」「さうか惜い奴だ」「尊公  
 が一番先に抛り込まれた事まで……」「フーム、一番年上の男が下に  
 なつてゐたと申しして……」「誰が見たんだらう、あの時は通行人が、

四五人しかなかつたが、今更何と言つても仕方がない、惜いと思ふ  
 鯉之助を、一刀の下に騙し討ちに致すより外はない」「刀までも及引  
 にされて残念千萬だ、やつゝけやう」と相談を極め、尙其手筈を定  
 めて、米藏方へ斬込まうか、與之助の外出を待たうかと、此二つに  
 就て手筈はチャソと定まりしが、石塚兵藏が不圖氣が附いて「待た  
 つしやい、少し思ひ當る事がある、吾々の姓名を早くも知つてゐた  
 事と、辻斬が吾々の所爲であるといふ事まで知つてゐて、刀を及引  
 にした事なご考へると何うも鯉之助は不思議な奴だ、事に依つたら  
 先年贈の高かつた、切支丹破天連の鱗與之助ではあるまいか、彼奴  
 は千里見透しの術といふを知つて居る、何うもさうらしく思はれる  
 が……」  
 夫に定まつた、兎も角も叩ツ斬つて構はん、間違つた處で何とでもなる、  
 あるし、年配も夫に遠くない」「言葉の中に下總訛りもあつた」「愈よ  
 るまか、兎も角も叩ツ斬つて構はん、間違つた處で何とでもなる、



萬一與之助であつたならば、却つて一つ手柄となるのだ、ユリヤ事が面白くなつて来た」と三人は愈よ打合せを續けたり。

(二十三)

石塚兵藏、安澤藤助、水木八平の三人が愈よ池沼鯉之助を殺害せん  
と、充分企んで女髪結お鹿の宅を窺ひたり、此方も與之助が宇都宮  
城内の、其後の模様は何うあらんと、見透しの術で窺へば、家老の  
悴は勘當、三人は師匠湯上郷右衛門から破門されて了ひ「ア、先づ  
諸人の爲にはなつたが三人の者の怨み一身に懸つて来た、此儘では  
濟ますまい、今日まで考へて見るに母上と妹の行衛は、何うも判ら  
ぬやうだ寧ろその事當地を去つて他に手懸りを探す事にしやうか併し  
銚子でも水戸でも判らず、今又宇都宮で知れぬとすると、モ一駄目  
だ、此上探す先がない」と大に力を落し、兎も角當地は近日引上げ

んと決心せり、スルト例の亭主米藏が、二階へ登り來つて「旦那、  
何うも大變です」「何が大變だ」「何が貴君の評判が何うも何處で  
も大變なもんで偉いお方だつてね」「困つたものだ、夫で身共も當惑  
致して居る、全体誰が左様に評判をしたのだらう」「へい大抵私が……」  
……「困るなア、何處へ饒舌つたんだ」「心易い床屋と湯屋へ……」  
「人寄りの場所を撰つて饒舌つたんだな、困るなア」「けごも悪い事  
ぢやなし、仇討をするお若いお武家が……」「サア夫を言はれるので  
困る」「時に旦那、今日は真劍のお話があつて來やした」「何だ真劍と  
は」「貴君ね、池沼鯉之助といふ名は、一体真劍の名ですか」「フム」  
「屹度眞個ですか」「何で偽はりを申さう」「へい夫ぢやア駄目だが旦那  
那、妙な事があるんです」「何だ先日御一緒にお伴をした新地の巴屋  
ね」「フム」「あの千山ッてお職の花魁ね、あれを旦那御覧なさいまし  
たか」「イヤ手前は諸人の爲に、辻斬致す者を引捕へんと思ふ積りゆ  
ゑ、婦人などは少しも見ずに居つた」「へい困つたね、ぢやアお話し

やすがね、あの千山花魁の許へ、自家の婿アが今日髪を結ひに行つたら、ア、丁度好い處へ来た、實は今日はお遊びにお越しになつたお方は、大層豪いお方で、辻斬する人達の心中を知つて、櫻の馬場で惚は、多々の者の爲め、仇討をして下すつたと聞いてから、實は氣が附いたのだが、お名前はあの時池沼鯉之助と被仰つたが若しや外に御本名がありやしないかつて、夫だけを直に聞いて来て呉れといふのです」「フォーム成程……あの折に一さす見た千山……フォーム」「貴君も妹さんを探してお出でなさる、コリヤ何か曰くがありやしないか旦那の方にお見覚えがあつたら、面白いかと思つて、一寸伺ひに来やした」「一寸見たゞけだが……米藏、千山の人相は「サア豫て貴君から聞いてみた通り、年頃はキツチリ合つて色が白く、鼻筋の通つた二重の目に愛嬌のある、地藏眉の頬のムツクリとした口元の尋常な、齒列びの好い、糸切齒のチラリと見える……何うです、スツカ

リ注文通りぢやありやせんか」「オ、稚顔に見覚えある、妹のお鶴……心附かずしてあの折見なんだが、豈夫賤しき遊女と成下り居るとは心附かなつた、實は身共の本名は鱗與之助と申す、此事一刻も早く先方へ申して呉れ、萬一妹お鶴ならば直様參つて面會の上、母上やお船の行衛も聞かねばならぬ」「宜しうございます、そんなら私が一走り巴屋まで行つて来やせう」「オ、大儀ながら宜しく頼む」「畏りやした」と下へ飛んで降りて「お鹿やい大變な事になつたぞ、何うやら旦那の尋ねなさる妹さんといふのが、巴屋の千山花魁かも知れねえだ」「まア不思議だね、花魁の方から聞いた位だから、モ一夫に違ひありやしないよ」「何しろ俺は一走り行つて来る」夫婦に大喜ひて米藏は飛出し、お鹿は二階へ来て又饒舌り立たり。

真個に夫婦とも儂倅なもんですね」と言ふを、此方に腰掛け聞きおしは、水木八平、石塚兵藏、安澤藤助の三人にて豫て夕景より米藏方を附視ひ、與之助の他出を待ち、殺害せんとせしが夫が今明らかに鱗與之助と、本名を聞き、大に喜び髪も結はすに少々用事が出来たからと其儘床屋を立ち出てたり。

「探安澤、水木、コリヤ手を下して與之助に及向ひ、又失策を致さうよりは、モ一鱗與之助と知れたる上は、天下のお尋ね者、切支丹破天連の餘類と、表面から取押へさせては何うであらう」「面白いな城内へ取押へ早飛脚を立て、江戸から御行、大岡越前守殿の手にあるか知らないが、幸ひ拙者は江戸南町奉行、與之助を取逃がして、大に残念がつて居る、豫て伴作はを立てれば、喜んで先年の失策を取返さうと來るに違ひない」「成程」

「ソコで斯ういふ大きな捕物ゆゑ、石子伴作は兎も角、大岡殿が捨

米藏は我家を飛出せば、向ふ横町の海老床で「オイ米公、何處へ行くんだよ、大變な勢だなア」「ウム今大急ぎだ」「何事が始まつたんだ」「何しろ巴屋の千山花魁と、二階の旦那の用なんだ、大急ぎで行くんだ」「フム何ういふ用だ、話せよ」「今話しちやゐられねえ、大急ぎなんだから」「マア少し許り言つても宜からう」「エ、面倒臭いな、千山花魁と二階の旦那とは、多分兄妹だらうと言ふんだ」「不思議だなア、何うして判つたんだ」「エ、夫まで饒舌つちやゐられねえ鱗與之助といふ本名さへ言へば、チャーンと判つて了ふんだ、又歸つてから話してやらア」と言つて、夢中で又も飛び出したり、海老床の亭主は、下剝りに向ひ「金太、米公は宜い人に二階を貸したなア、何うだい辻斬した悪い野郎を、堀の中へ抛り込んで、城下の人の爲になつたお武家様、お利げに廊で一番全盛と言はれる千山花魁と兄妹とは、米公愈よ器量を上げるなア」「エ、親方、米さん許りぢやありません、お鹿さんまでが人の顔さへ見りや、二階の旦那の癖です、

て、は置かぬ、是と申すも吾々三人が知らせて呉れた爲だあつて  
 此段主君の方へお禮が来る、三人共近來の失策が、是で取返しがつ  
 くといふものだ「オ、好都合だ、天下の名奉行と言はれる大岡殿  
 から、主君へ禮を言ひ呉れば、吾々三人は大功名になるといふもの  
 コリや與之助を殺害して、腹癒せ許りするのとは譯が違ふ、一擧兩  
 全といふものだ」と巧い相談を纏めたり「ソコでな誰彼と言はうよ  
 りも、水木お前が飛脚替りに、早馬で行つて、其心易い石子伴作に  
 會つて、話をしたら一番早からうぢやないか」「さうだ、近來御前  
 の首尾も悪いから、病氣と稱して四五日お暇を頂いた上馬で飛ばせ  
 やうか」「夫が宜しい」「夫に限ると勤められ水木八平乗氣になり、  
 馬を撰び御前体病氣の披露、直に江戸へ飛んで行きたり、斯る事と  
 は神ならぬ身の夢にも知らぬ與之助如何あらうかと米藏の返辭を待  
 ちゐれば、馳せて飛んで歸りて「大變ですよ愈よ御兄妹と判りました、  
 千山さんはお鶴さんといふ事も、チャンと被仰いました、モ一丈

夫です、サア参りませう」「して母上やお龜の身は、何う致して居ら  
 る、か」「そんな事まで聞いては居りません、何でも直にお連れ申せ  
 ん、引張つて來ませうといふ譯で、飛んで歸つたんですから、委細  
 は行つてからお聞き下さい」「オ、然らば案内して呉れ」と流石千里  
 見透しの鱗與之助も久し振り妹に會ふ嬉しさに、足も地に附かぬ許  
 り、新地の巴屋へ参りたり。

(二十五)

鱗與之助も嬉しく、此巴屋へ登かれば鶴婆其他の者へも、お職の千  
 山花魁より其事を申してあるより、以前お客にした時よりも、一層  
 扱ひも鄭重にて、直様千山の部屋へ通せば、千山は見ると先藏の  
 前も忘れて、與之助に取付き「兄様、お懐かしう存じます」と先立  
 つものは涙です、與之助も其背を撫で、「お鶴早速尋ぬるが、阿母

様は何う遊ばした、御無事で暮らしか、當時何處にお越しぢや、  
 「ハイ有難う存じます、兄様を酷い目に會はせたあの妾の母を、會  
 ふなり直にお尋ね下さる其か志、唯々お禮を申さうより、昔の母の  
 曲つた心を、妾よりお詫を申すのみでございます」コレお鶴、何う  
 したものでちや、母上を誹らうの、説を聞かうのと思つて参りはせぬ  
 又其方も随分孝行であつたに、兄に會ふと直に母を誹るとは、心ま  
 で遊女傾城になつたのか、左様な事は聞きたうない、母上やお龜の  
 事、サア話して聞かせなさい」「成程、之は兄様飛んだ事を申しまし  
 た、貴君か御潔白な心では、左様に被仰るのも御道理に存じます  
 母は當時此宇都宮御城下の町盡頭、池町と申す處に病氣の養生を致  
 し、お龜が介抱に附添つて居ります」フリーム、母上は御病氣……し  
 て御容體は……醫者にもお懸け申したか」「ハイ其病氣に就きまして  
 お恥かしい妻が今の身の上……兄様お察しなすつて下さいませ」  
 「フム、豫て印幡村の家没落、醫者岡田良庵の悪企みより其の後銚

子港へ参り、佐原屋の家まで不幸續きに、水戸へ一同が移つたとま  
 では承知致し居る、定めて其日の暮らしにも差支へし事ならん、其  
 話の後、命までも取られんとした事を忘れ、唯母の身を氣支ふ有  
 にも會ひ、嬉しくも亦恥かしく「能くお尋ね下さいました、母は烈  
 様にお鶴は嬉しくも亦恥かしく「能くお尋ね下さいました、母は烈  
 しい痛風でございまして、足腰の痛みに身動きも出来ませす、妾が  
 此麻へ参つてからは、妹一人が看病致して居ります仕儀、此冬の寒  
 さが難かしいと、お醫者様は被仰つてございませす」「宜しッ、兎も  
 角お見舞申して参らう」と立上りませす、お鶴は引止めまして「兄  
 様、暫くお待ち下さいませ、母の見舞をお急ぎ下さいませ、誠  
 に有難い事でございませ、妾も貴君にお目懸つたらば、お國許  
 を、お遊ばして後、何うしてお暮らし遊ばしましたか、又承りま  
 すれば、筑波山の麓尾村の、伊勢屋清左衛門様のお嬢様、お縫様  
 が貴君のお跡を慕つて、家出を遊ばした事やら、兄様には切支丹破

天連宗門に入つて、魔法をお使ひなさるとやら、諸方で御詮議が厳  
 しかつたやら、夫等の事も何うかお話しなすつて下さいます。成程  
 兄妹の仲隠す事はない、話して聞かされたが……夫等の事は、誰から  
 聞いた「ハイ以前宅の船頭でございまして、直助が東海道阿部川で  
 兄様にお目に懸つて、江尻で御災難をお受けなされた事を、銚子ま  
 でわざつて参つて呉れまして、詳しく話しを聞きなされた事、直助  
 が申したか」と判りしより、與之助は今までの一五十什を語る、お  
 鶴の千山は與之助が、今日まで千辛萬苦してゐた事、取分けお縫の  
 不幸と、乳守のお仙が横死に涙を流し、又一色の文三が倅氣などに  
 太く感じて居れば「お鶴、少しも早く母上をお見舞申す、又お龜が  
 年端も行かぬに、能く看病致し居る事、之れは褒めてやらねばなら  
 ぬ、何れ又便りを致さうから、今日は是れで歸る」米藏が再び案内  
 する事になり、再會を約して一先づ此處を立出でたり。

(二十六)

本意ない事に思ふお鶴に、暇乞ひせし與之助は、米藏に案内させて  
 池町と申す處へ参りしが、宇都宮城下でも寔に淋しい町、町盡頭の  
 事、藁葺屋根許り、二三軒で聞いて見れば、母親お淺の宅は直に知  
 れ、與之助は懐かしいと思ふ母と妹、門口の腰障子を開けて、米藏  
 の取次も待たず「御免下され」と言つて入る、破れた二枚屏風の中  
 に、母のお浅はゐるらしく、藥を煎じて居るお龜は、立派な武士が  
 来た故、門違ひではあるまいと驚きながら一禮致すを與之助と打  
 見ると、稚顔に見覚えある末の妹のお龜なるゆゑ「オ、妹であつたか、  
 お龜」と言はれて未だ怪訝な顔「お龜、兄を忘れたか、與之助ちゃん」  
 とお言はれて嗅驚り「オ、兄様……何うして此處へは……阿母様、兄  
 様がお越しでございます」と呼んだ、屏風を押退けて「ヤッ與之助  
 様」

居りましたして、御介抱申上げます、又お鶴が苦界に身を沈め居るの、何と私が救ひ出しますれば御安心遊ばして一日も早く御病氣御全快を祈りますする」と申して唯々母の病氣に障らぬやうと、母は嬉しは此後何うして、鱗の家を再興せんと思ひたり、母は嬉しれに「與之助や、妾は心の曲つてるに、今又お前が其様に言つて呉れる夫れで死んでも宜いと思つてるに、今又お前が其様に言つて呉れる嬉しさを眞個に妾は子の罰が當るだらうと思ひます、何うか印幡村にゐた時の事は、水に流して是からはお鶴やお龜の力になつてやつてお呉れ、妾は何うせ死んで行く軀だけど、兄妹三人は睦まじくして阿父様のお位牌を守つて呉れますやう、是から私が命を縮めまして、阿母様の御病氣を治さすには置きませぬ、氣を大きくお持ち遊ばして下さいます」何を被仰います阿母様、是から私が命を縮めまして、阿母様の御病氣を治さすには置きませぬ、氣を大きくお持ち遊ばして下さいます」

か、能く来て呉れた」と言ひながら面目ないか俯向きたり「阿母様、何からお話を致して宜いか判りませぬが、父上の御死去より銚子へか引取の事は、直助より承はりました、又圖らずも今日お鶴に面會致し、手支へて涙汲めば、お取敢ずお見舞に参上致しました」と言つて、何とも言はうやうなく、又鱗の家の没落せし方も大方は自分の罪と、思ふゆゑ、愈よ以て面目なき様子、側でございませぬ、左様な事とは知る筈なく、「コレハ、旦那様の御母親様でございませぬ、私ハ此旦那が二階にお住居下された御縁から、世間へ對しましてはグット男振り上げてました米蔵と申すアンサイ者でございませぬ、併しマア斯うして皆様が、お巡り合ひなされた上からは旦那様も抛つてはお置きなさいませぬ、私亦及ばずながらお力になりませう、兎も角大望抱へたお身の事ですから……」と未だ與之助は仇討する身分に思つてゐる、與之助は打消し、阿母様、兎も角今日よりはお側に

水木八平は江戸表へ早馬で飛ばせて、石子伴作に面會して、委細の事を告げれば、伴作は大岡越前守殿へ申立てたと見え、石子伴作より「水木氏、兎も角直ちに宇都宮へお歸りの上、餘所ながら鱗與之助の住居を見張り、怠らず其出入に氣を附け、取逃がさぬやう致されよ、其許御發足に續いて、捕方も出致すが、捕方の着さぬ以前に、決してお手を下しなつては相成らん、何れ上より其許等お三人へ、御褒美もあらうと存するが、何分急速の事ゆゑ、其許は急ぎお立歸り下され」とある、八平は大いに喜び「左様ならば石子氏片時も早く捕方衆のお乗込を待ちます、では是れにて御免を」と直に又も馬を飛ばして宇都宮へ歸れば、待構へてゐる石塚兵藏、安澤藤助の二人が「オ、水木、御苦勞であつた、留守中御前体は、

(二十七)

家は引拂はねばならぬ、何うか左様思つて呉れるやうに……」  
 「旦那、そんな事だらうと思つてやした、チャント嫁アとも相談してゐやし、又お家も……斯う申すと失禮ですが、私の二階は狭くつて仕方がねえし、ッコで自家の表通りに今度大屋が建てた三軒長屋がありやせう、御存知でせう、ソレ質屋の土藏から折曲つて、極靜かなあの家を借りやす、何うか彼處へ移つて下せえ、さうすりや私共からも朝晩のお世話が出来るといふもの、何うかさうなすつて下せえ」「イヤ心切に忝けない、然らば其方に任せるど得心すれば米藏はその取極に先へ歸りて、残りし母子三人は其の夜何かと永年の間の事お互ひに語り明かし、轉宅も早速翌日に致し、此段をお鶴の千山方へも知らせたり。」



手前共兩人で然るべく繕ひて置いた、心配さつしやるな、扱江戸表の模様は何うぢや「オ、其儀は上々首尾、拙者出發の後に直様捕方が出立する、纏て明朝あたりは到着致さう、御褒美が下らうと、石子が不作に見張つてゐると申す事、其上三人へ御褒美が下らうと、石子間が直つて参つたといふものぢや、して與之助は如何致し居る「サア其方も上々首尾、何か母と妹に出會つたとか申して、今は病人の母と、年端の行かぬ妹が、足手纏ひとなつて、モ一與之助は當分此城下は動かれぬ」「フーム」「夫に又妙な事があつたのは、脇坂氏が豫て熱心で通つた、彼の千山と申すが與之助の妹だと申す事だ」「オ、成程して見ると城下盡頭に、千山が養つて居つた母と妹、夫れが與之助の足手纏ひになつたといふのぢやな」「左様々々」「イヤ夫れは右馬之介殿が聞かれたら、定めし不思議な事と驚かれるであらう、併し當時は脇坂氏も、勘當の身の上にして、上州高崎にゐられるとか」

「併し吾々と違つて、脇坂氏は家老の子息、聽て勘當が許されて、家老格の家督は間違ひはない、莫迦を見るのは吾々三人だ、併し彼是いふ中に、天下のお尋ね者、鱗與之助を見出したといふ、功名が三人の頭に懸つて来る、イヤ何れにしても明日か明後日待遠だ」と三人は大いに喜んで居る「兎も角前祝ひだ、明日は勤めも休む事に届けをして、今晚から何處かで飲んで明日を待たう」「夫れが宜しからうと三人は、今晩から前祝ひをします、スルト與之助は左様な事は知らず、米藏の世話で一寸小綺麗な借家ではあるが、心持の好い家へ入つて、母の看病をお龜と共にしてゐる、處へ例の米藏が「旦那、御病人は如何ですな」と飛込んで来た「オ、亭主、何彼と世話になつて忝けない、大家も寔に心切で喜んで居る」「左様でございませうか、大家といへばね、今大家さん許で大騒ぎなんです、私が見て貰つて來やうつて今飛んで來やしたんです」「何んだな……又お前妙な事を

其勢ひで無法をやると見へる、夫れに之れは身共にも判らんが何か  
 たんでせう「師匠から破門されて、自棄半分は昨日から酒を飲み、  
 で、堀へ抛り込んだ三人の中の二人だ」「へエ、誰がです」「日外櫻の馬場  
 居ると、其處へ酷酔して来たのだ」「へエ、誰がです」「日外櫻の馬場  
 へ遊びに参つて、見世物小屋などの前に居つたが、不圖裏手へ出て  
 花と申して、二つちやらうな」「へエ、能く判りますな」「家主の子供は  
 は名をお菊と言ふだらうな」「へエ、能く判りますな」「家主の子供は  
 ます、少しは判つたのでございませうか、判つた、何うして事でござい  
 ひ考へ居るより、米藏は氣が氣でなく、旦那、何うして事でござい  
 等の無法、何として懲らして遣はさうか、憎むべき奴輩」獨言を言  
 與之助は兩眼を開くと、さも驚きし容貌で「フム、驚き入つたる彼

(二十八)

言觸らしちや困るせ」「イ、エね、大家さんで正午頃女中が嬢ちやん  
 を背負つて出たんだが、モーコレ夕方だつてえのに、二人とも歸つ  
 て来ない、若しや神隠しにでも會つたんぢやないか、若しも誤つて  
 淵川へでも、落ち込んだものぢやないかつて、大騒ぎをやらかしてゐ  
 るんで、女中も唯の子守ぢやなし、十九にもなる仲働ぎなんです  
 が、一寸標紙も好いし、尤も油断はなりませんが、今までの處では  
 少しも色氣の話はなし、極々初心な眞面目な女だつたといふのだ、  
 愈々判らなくなつて来るんです、何うか旦那一番之を見て下さい  
 せんか」「イヤ夫れは氣の毒な事ぢや、手前も易者ではなし、其行衛  
 を言當てると申す譯には行かぬが、一つ神佛の力を假り奉つて判る  
 事なら結構だ、暫らく控へてゐなさい」と與之助は是非なく、例の  
 千里見透しの術を行ひたり。

前祝ひだと申し居る、察するに身共に對しての返報か何かではなからうかと思ふ。「太い奴ですな、夫から何うしました」「お菊の美目好きより、兩人は其手を取り、酌を致せと申してあの新道へ連れ込み、瓢屋とした籠行燈のある家へ無理に引張込んだ、子供の泣くのも構はず、酒香を取寄せて、左右からお菊の手を取つて戯れて居る」「飛んでもねえ野郎で……ちや町會所へでも屈けて、一番酷い目に會はせてやりやせうか」「イヤ、家中の人々を苦しめる時は又報ひがあらう」「夫よりは拙者が參つて、お菊と其子供だけを返してやらう」「ナール程、さう願へりやア申分なしでさア」「彼奴等にも旦那にやア懲りてやすからお顔を見たら直に逃げ出しやせう、兎も角參るから案内致せ」「畏りやした、あの瓢家といへば詰らねえ待合茶屋です、俺の顔も知つてる筈ですから、一番脅かしてやりやせう」と先へ立つた米藏「サアお伴しやす」と飛出す、與之助は母の介抱をお龜に吩咐け、直に米藏と共に池上町の新道へ參れり。

此方は安澤藤助と石塚兵藏の二人、前祝ひと一つは自棄で、前日から酒浸りとなりぬたるが、不圖見せ物小屋の前で、堅氣な初心の美人を見て、面白半分町家の者だ、引捕へて弄さみ物にしてやらんとお菊の厭がるのを構はず、怪しい待合へ引張り込み、強て酒を飲ませ、酔はせし上、日が暮れ、此家の婆アに任せやうとする、お菊は大切の子供は邪魔になるより、此家の婆アに任せやうとする、お菊は大出、夫れを厭はず平氣で二人は、酒を飲んで居る、處へ「御免ねえ」と言つて米藏が、格子を開けて飛込めば、主の婆アが「オヤ米さんかい」「オイ婆さん、奥へ通るせ」「可けないよ、立派なお武家様のお客があるんだから」「其客に用があるんだ」「米さんなんかの知つた人ぢやないよ」「老耄れ黙つてゐろ、此方にも立派なお武家様を連れて來てゐるんだ」「サア旦那、お通んなせえまし」「可けないよ、米藏奥座敷へ來ラ奥へズン、入つては」と婆の慌てるも構はず、

見たらば手出し處が、ブル／＼者で逡巡りする、與之助はお菊とお花を、米藏に任せて連れ歸らせるやうにして置き、改まつて二人に向ひ、「御兩所、又折角お樂しみの處へお邪魔に参つた、併し脇坂氏ははお氣の毒な事、今は勘當の身となつて、上州高崎に居らるゝが之は最早御改心あつて、文武の道に御出精致さるゝゆゑ、聽ては御歸参の上、父上の跡目相続と申す事にならうが、其許等お三名は今に御改心の模様なく、町家の婦女子を捕へ、此場の有様は何事ござる、斯く池沼鯉之助が各々方に目を着けたる上は、如何なる所業をなすつてお暮らしたが、常に見透して居りますぞ、何卒今後はお身をお慎みに相成つて、主君大事に御出精が願ひたい、唯今其許等の在所を突止め、斯く推参致したる次第でござる」とキツパリと言へば、二人は困り米藏の前も降り参して了ふ譯にも行かず、と言つて此前の手に際し驚いて、手出しも出来ず、成程千里見透しの術がある斯んな處まで見附け出して來るとは、恐ろしい事だと思ふと、言合

て、此体を見れば「オ、お菊さん、悪い野郎に捕まつて、定めし心配してゐたらう、お嬢ちゃんも定めし喫驚りなすつたらう、モ一泣かなくつても宜うがす、サアお歸んなさいやし」安澤藤助、大いに怒つて「コリヤ何處から参つた」といふ、石塚兵藏も同じく酔眼をトンヨリさせて「ヤイ何者だ、遊興の席へ妨げに参つたのは」「オイ安澤さんと石塚さん、お前方に喫驚りさせる客人を見せやう、サア旦那顔だけ見せてやつて下せえ」と與之助はズツと其座へ入ります、二人は見ると酔も醒めてブル／＼と顔え上つた、米藏は構はずお菊とお花を連れて一方へ避けたり。

(二十九)

石塚安澤の二人が顔え上りしも道理、以前深の中へ抛り込まれ、命から／＼逃出した時の事を思ふと、憎いとは思ふものゝ、モ一顔を

内訴したるを知らざるか、最早今日限り此娑婆には居られぬ身の上  
 アハ、ハ、ハ、と高笑ひしたるを與之助も今は詮方なく、米藏にお菊  
 とお花を任せて、「いざ」と許り此家を立去れば、三人は尙ほ高笑ひ  
 して與之助を嘶るに、米藏も氣でなく、お菊とお花を大家へ送  
 り直に與之助方へ飛んで行き、大家の方でもお菊から委細を聞いて  
 「大切な吾子を救ひくれし方、若し取押へといふやうな事になつた  
 らお氣の毒、切めては御病氣の阿母様だけなり家主として私が預  
 り申す事にしやう」と是から羽織を引掛けて、與之助方へ飛んで來  
 る、與之助は尻つて見ると何事もなく、母や妹は無事である、ハテ  
 捕方が既に出了たといふに、何故未だ來てゐないのか、大岡越前守の  
 家來ともある者が、餘り迂闊な事だと思つてゐる、處へ米藏も家主  
 も來てお菊を助けて呉れた禮など申して居ります處へ、門口には乗  
 物が降りて、立派な武士が「頼む」と來た、格子の中から見下せ、  
 「ソレ來たぞ………大家さん何と加して旦那を助けて上げて下せえ、

せたやうに二人は、兩手が自然疊へ突く時、表口から消魂ましい物  
 音がしたかと思ふと、飛込んで來た水木八平が「安澤、石塚心配  
 すな、唯今此家の婆の知らせに依つて、鱗與之助が當家へ參つた事  
 は判つた、唯今江戸表より石子伴作殿の到着、既に人數も打揃つて  
 與之助の住家へ向つた、母や妹のお龜を引捕へれば、自然に多  
 くの人数は押取り圍みて、直様御用で繩を受けろのだ、此處構はず  
 と、サア與之助の宅へ參らう、定めて母や妹が泣面して居る事  
 であらう」と故意と與之助へ聞えよがしに言つた、驚いた與之助は石  
 子伴作と聞いて、日外東海道江尻の驛に於て、寢床を空にして一杯  
 食はせた大岡越前守の家來と思ふと、少しく驚き、殊に母や妹が繩  
 目に罹つては大變、コリヤ寸時も早く立上る、安澤石塚は今まで  
 連の秘法、千里見透しの術ありとも、「如何に鱗與之助、汝は切支丹破天  
 せ、たやうに二人は、兩手が自然疊へ突く時、表口から消魂ましい物  
 音がしたかと思ふと、飛込んで來た水木八平が「安澤、石塚心配  
 すな、唯今此家の婆の知らせに依つて、鱗與之助が當家へ參つた事  
 は判つた、唯今江戸表より石子伴作殿の到着、既に人數も打揃つて  
 與之助の住家へ向つた、母や妹のお龜を引捕へれば、自然に多  
 くの人数は押取り圍みて、直様御用で繩を受けろのだ、此處構はず  
 と、サア與之助の宅へ參らう、定めて母や妹が泣面して居る事  
 であらう」と故意と與之助へ聞えよがしに言つた、驚いた與之助は石  
 子伴作と聞いて、日外東海道江尻の驛に於て、寢床を空にして一杯  
 食はせた大岡越前守の家來と思ふと、少しく驚き、殊に母や妹が繩  
 目に罹つては大變、コリヤ寸時も早く立上る、安澤石塚は今まで  
 連の秘法、千里見透しの術ありとも、「如何に鱗與之助、汝は切支丹破天

俺が捕方へは何んとか愚圖々々言つてるから、其間に旦那や母親さん  
んを逃がして上げて下せえ」と夢中になつて申しけり。

(三十)

今更となりて此急場、況して日中の事ではあり、却々三人の逃がす  
といふ事は出来ず殊に一人は大病人の事です家主も閉口して唯氣を  
採む許り、與之助最負の米藏は、何でも手間取らせやうと思つて、  
裕子を開けて「へい誰殿でございます」と相手の顔を見る、アツナ  
キ羽織に義經袴、旅装束の立派な武家、夫れに従ふ家來は一人とし  
て捕方のやうな者はなく、彼の武家は鄭重に一禮しまして「當家は  
池沼之助殿お住居でござるか」「へい左様ではございますが、其少  
し違ひますので」「ハア違ふと仰せらるゝからは、お隣でもござるか」  
「イ、エ隣は空家で、曲ると大家さんの家でげす」「イヤ家主を聞く

のではない」「池沼氏のお住居は、此方かと伺ふので」「へい」「お考へ  
なすつては困る確に當家といふ事、聞及んで参つたのでござる」「そ  
んなら猶且さうでござせえやせう」「困つたお方ぢや、其許ではお話  
が判らん、何うか御主人をお呼び下さい、甚だ失禮ながらわざ／＼  
江戸表から参つた者ゆゑ……」「なんて優しい言葉で釣出さうと思つ  
て……コン畜生」「畜生とは何事」門では大變な騒ぎになつてゐる、  
與之助は素より覺悟して居ります、今更逃げ隠れするやうな事はな  
く、自身夫へ出しまして「手前は池沼之助でござる、是なる男は少  
々取逆上せて居りますゆゑ、何事も取上げの出来ないやうに……」と  
會釋する、米藏は「旦那、お前さんが出ちやア可いねえ、直に縛ら  
れて了ふぢやねえか」彼の武士は尙ほ丁寧「池沼氏、密かに申上  
げたい一儀がござる、暫時内談を……」「ハ、ッ畏りました、何うか  
穢苦しき家ながら、お通り下さるやう」「御免を蒙る」と通る與之助  
は母の病室を避けまして、奥の一室へ通したり、サア大家さんと米

り、斯く推參致した次第でござる」與之助は案外に思ひしが、少しは思ひ當る處もある、尙治右衛門は、先年其許を疑ひ、繩打たんとせし石子伴作も、召連れ参りましたれば、御同道下さるとならば、伴作より先年のお説を申し上げお伴を致させたら存じまするといふモト是れならば大丈夫、聊かも疑ひを容れる處もありませんから、與之助も頷きまして、天下の名奉行と言はるゝ、大岡越州公より左まで仰せ下さる上、何んで否やを申しませう、速かに御同道致すでござらうと答へた治右衛門大いに喜び「ソレツ」と命を下す時服一着を式臺に載せて、之れは大岡公よりの下され物、持參人は石子伴作で、先年江尻の失策を申して、罪を謝するといふ有様、之を見るとき米藏愈よ威張り出した、處へ表へ水木、石塚、安澤の三人が窺い寄れり。

藏は心配は一通りでない「大家さん、旦那を騙して繩を打たうといふんでせう、到底表面から御用と出では、捕まえる事が出来ぬから」「イヤ、米藏、お前の思ふ處は少し違ふ、俺も随分大切な罪人を取押へる處を見たが、却々あんなものぢない、コリヤ事に依ると旦那を縛りに来たんぢやないらしい」「ぢやア誰を縛るんでせう」「サア此町内で憎まれ口を利いて、頼まれられない事に駈廻る、出過ぎ者でも那を縛りに来たんぢやないらしい」「ぢやア誰を縛るんでせう」「サア縛るんだらう」「夫ぢやア俺が縛られら、申言つちやア困る」お龜も母の枕許で此模様を知つて是れ亦心配して居ります、件の武士は與之助の鯉之助に向ひ「何を隠し申さう拙者江戸南町奉行大岡越前守家來白石治右衛門と申す者、主人儀此度其許が千里見透しの術を知り何卒御面會致して天下の政道捌きに就き、之れを後學の爲に拜見致したいと申す望み、承はれば尊公御母堂は、御病氣どの事定めて御迷惑とは存すれども、御母堂御病氣の處は、お手當を仕りますれば、何卒是より江戸表へ御同道下さるやう、主人申附けに依

たのは少し違ふが、妙な事になつたもんだ」と眉を顰めてゐる處へ  
 早用意は出来て鱗與之助、背割羽織に義経袴、兩刀を手挟んで左右  
 に白石治右衛門、石子伴作を随へ、悠々として出て来る乗物は引戸  
 を開いて、供揃ひは大地に指先突いて一禮する、病氣の母に代つて  
 妹のお鶴が見送り、裏口から見舞に來た米藏の女房までが、首途の  
 盃だ云ひ祝儀をする、大家の市兵衛が荷物の中に止せば、宜い水木八  
 立派な武士になつた、三人は約束が違ひませう、切支丹破天連宗門  
 平が「石子氏、夫れで少々之助の在る所を届出づれば、御注進に參つた  
 にして、天下のお尋ね者鱗與之助の在る所を届出づれば、御注進に參つた  
 下の事、夫れは兎も角、手前が江戸表まで、御注進に參つた  
 ものを、取押へもなさらぬとは全體、コリヤ何うなつたのをごさる」  
 と問ひ懸れば、石子伴作冷笑ひ「鱗與之助殿を、天下のお尋ね者と  
 せしは、ソリヤ兩三年以前の事、今は大岡越州公始め、御老中若年  
 寄りの人々まで、千里見透しの術とは、今決して切支丹破天連の魔法にあ

水木八平は安澤藤助と、石塚兵藏とに必らず事故、大に與之助は引捕へら  
 来て見れば、捕方らしい者は一人もゐず、立派な乗物が置いてあり  
 所へ此三人が來た事故、「オイ水木さん、安澤さん石塚さん、何うし  
 たんだよ、俺の旦那を引縛らせると言つたが、誰か縛りに來たんだ  
 へ、ふ、縛る所か、江戸表から迎ひに來なすつたんだ、大岡越前守  
 様といふお奉行様が、天下政道の爲に自家の旦那に來て呉れと被仰  
 るんだ、千里見透しの術でお前方を見たら、やうな、長くねえ野郎を調べ  
 させるんだとよ、愚圖々々する、三人顔を見合せて「石子伴作と約束し  
 せ用心して待つてるが宜い」三人顔を見合せて「石子伴作と約束し

(三十一)



らず、筑波山権現、小田原道了薩陀、三州地鯉鮒神社など、大日本に現はれ玉ふ神佛の利益に依り、與之助に感應あつて明かに相判る事と御鑑定あり、即ち其千里見透しの術を、天下政道の爲に試みんと斯くは御注進ひに參つたるなり、今日まで其在所を探し居りしを、其許が御注進下された功に依り若年なる、家老の一子脇坂右馬之助を唆かし、辻斬り致せる罪は許して遣はす、三人の者有難く心得て罷り歸れ」と言葉さへ變つて叱り附けるやうに申しければ、三人は惘然として、猫に追はれた鼠の如く、狐鼠々と逃げたり、與之助は遂に意氣揚々として、江戸表に乘出したや、斯うなる跡の始末は、家主市兵衛が引受け米藏夫婦が萬事世話をする、白石治右衛門から醫師其他の手當は、市兵衛に金を渡して頼むなど、充分ですから與之助も、跡に心は残らず、早速巴屋へ参り千山のお鶴へも話をなし、其の喜びに又一通りでなく、先づ皆結構な事になり來たれり、スル

ト或日の事女髪結お鹿の家へ見馴れぬ立派な武士が來り「お頼み申す」といふ、丁度夫婦揃つてゐる處で、お鹿が出て何方から「何の御用でございます」といへば武士は聲を潜めて「少々内談があつて參つたが、御夫婦にお頼みござるので……」「へエ」と言つてお鹿は「お前さん、又立派な御武家様だよ」「今度は俺をお召抱へなさるといふぢやねえか」「ウフ、莫迦な事をお言ひでないよ、兎も角頼みと被仰るから、悪い事ぢやありませんまいよ」「種々の事が出來て來るね」「兎も角奥へお通し申せ」といふので、彼の武士を通して夫婦は怪訝な顔して其前へ坐はれり。

(三十二)

お鹿米藏の前へ、彼の武士は膝を進めて、いと物和らかに「扱突然參つて甚だ失禮であるが、手前は當藩中袖木善之進と申する者、お

頼みと申すは餘の儀でもござらぬが、御夫婦が先頃から力を盡してお世話してゐられる、鱗與之助殿に就ての事ちやが、母も妹も共に御夫婦がお世話なされる由、寔に以て御夫婦の御厚意感服致す」米藏程の事も出来やせんが、エヘ、ハ、ほんの眞似事で……」イヤ、却々一通りの御心切ではござらぬ、與之助殿と妹とお鶴殿とが、初めて巴屋に再會されたのも御夫婦のお骨折りちやと申す」「ヘイヤそんないへば、あの花魁千山さんの事です」左様」「どんな事かは存じませんが、何分旦那がお留守なんですから、私共夫婦には何うしやうといふ事も出来やせん」「イヤお留守の事も承知致し居るが、唯御夫婦からお鶴殿へ、悪ろにお話下されば、夫れで宜しいのでござる」「ヘー何をお話をしやすんです」「千山の落籍でござる」「何んですつて……」あの花魁の落籍」「耻かしい次第ちやが、モーコレ四十の阪を

越した身が、不圖先夜千山を招きしより、其標緻なり萬事の振舞、寔に以て賤しき泥水の勤めを致す者とも思へず、幸ひ身共も妻に死別れ、獨身にござれば落籍致して、宿の妻と致すは面白からず、當人の得心行かざるものを、無理に手活けの花と致すは面白からず、御夫婦が縁あるを幸ひ、此儀お頼みに参つたのちやが、早速お二人から千山へ話し、得心の行くやうに致しては下さるまいか」といふ、夫婦は熟々其武士の舉動を見ますに、却々人品も好く、一時の浮氣や道樂で、落籍しやうといふ處はない、米藏も感服しまして「成程さういふ思召しなら、早速お話は致しやせう、千山さんも何んと被仰るか知れやせんが、精々お勤め申して見やせう」「何分頼む、尙身共は食祿二百五十石、今申す通り姓名は柚木善之進」「承知致しやした、二百五十石といふ御身分のお方なら、千山さんも大抵厭とは被仰るまい、なアお鹿」「さうさねえ、花魁も阿母さんの病氣で心配してゐなされるだから、身が自由になる事なら、喜んで承知しなされるかも知

れないよ」「では御夫婦、是より身共と巴屋へ同道しては下さるまいか、身共は客となつて遊び、其中に御夫婦が當人の腹を聞いて下さるれ、承知さへ致せば後とも言はず、今日、是より直様身の代金を取寄せ、落籍致さうから」「へい何うも急な事でございませぬ、善は急げで夫れも宜しうござえやせう、サア旦那お伴しやせう」と米藏夫婦は一緒に巴屋へ参れば、善之進は酒肴を誂へて、千山の座敷で遊びます、夫婦は千山を次室へ呼んで、柚木善之進に頼まれし一條、詳しく話を致しますと、千山は「有難うは存じますが、今は兄も留守の事なり、兄に會はぬ以前なら、妾の一存で承知も出来ませうが何うも母が力にする兄から、宜いと許しの出ません中は、どのやうな結構なお客様でも、妾から承知といふ譯には参りませぬ」と堅い断はりです、して見ると與之助が江戸表から、歸つて來ての上でなければ、千山の返辭は聞かれませぬので、此段を善之進に申しませうと「ア、夫れで愈よ千山の心意氣も相判つた、他に間夫といふ

やうな者がありはせぬかと、實は心配致し居りしが、兄さへ許せば何れへなりとも、落籍されやうと申すは感心ぢや、然らば早速江戸表へ使を立て、否か應かの返辭を聞かう、千山から兄への書面を書かせろといふので、可否を問ふ處の一通を、千山のお鶴が書き、其時に彼の柚木善之進が「其手紙の中に少々書加へて貰ひたい文字がある」と切出した、千山始め米藏夫婦は何事かと思ひたり。

(三十三)

お鶴の千山は、今認めたる手紙の中へ、書加へて貰ふ文字がある」と柚木善之進より聞き、千山は勿論米藏夫婦も不審に思ひ、れば莞爾笑ひし善之進が「此度宇都宮の藩中、柚木善之進と申す武士、妾の落籍致し呉れ候に就き何卒右御許し下されたく候……と書きなさい」「ハイ」と千山は答へる「夫からちや落籍致され候上は、右柚木

之助の返答一つにあり。妻に異存はございませぬ。是れも亦千山同様「兄さへ承知の事なら  
 た」と詳して話しませば、是れも亦千山同様「兄さへ承知の事なら  
 蔵夫婦は早速お鶴の母の許へ参りたり、其日は夫れで立別れて、米  
 やり、身共の仕立で飛ばせる事になりたり、直に廊内の飛脚屋を呼びに  
 は身共の方から拂ふ話に早いもので、別飛脚でなくは遅い、入用  
 ました。然らば即刻飛脚を仕立てる、別飛脚の通り問合せます事  
 與之助への書面を認ため、善之進の言葉の承知の筈はありませぬ、兄  
 是から千山も蔵夫婦に相談する勿論不承知の筈はありませぬ、兄  
 助殿へ、可否問合せの書面を出し下さるやう、偏にお願ひ申す」  
 道理なる仰せ、其許や米蔵御夫婦に異存なくば早速江戸表なる與之  
 處へ嫁入り致す事も出来ませぬ、何うかお察し下さいませぬ中は、何  
 ませぬ、併し唯今も申上げます通り、兄の許しの出ませぬ中は、何  
 でに思召して下さりませぬ、何んともお禮の申上げやうがござり

善之進の進假親として……「同藩中臈坂右馬之助に縁付き申候……と明ら  
 之進は澄したもので「ハイ……」と言ひしが、ハツと許りに驚きし  
 かに書いて貰ひたい」「ハイ……」と今又不意に此身を妻に於て之を懲  
 は現在城下に迂斬りしたる爲め、兄與之助が櫻の馬場に於て之を懲  
 し、其後勘當されたと聞いた夫れが又不意に此身を妻に於て之を懲  
 實に妙な事だと怪しんで、筆を止めて居ります、善之進は笑つて、  
 「米蔵御夫婦、實は何を隠さう、最初から斯うと打明けてお頼みし  
 やとは存じたが、夫れは又敵同様に右馬之助、千山殿初め御夫婦も  
 何んと言はるゝか判らぬと思ひ、斯様は芝居致して参つたのちや  
 身共は彼の右馬之助の爲には、叔父に當る者、此度勘當を許され右  
 馬之助は、父の許に歸り文武の道を勵み居るに就き、來春勿々父は  
 隠居の上、右馬之助は跡目相續の筈、左すれば千山殿は家老格の家  
 山は嬉し涙を流し「有難う存じます、一同御承知は下さるまいか」千

扱てお話しは變りて、鱗與之助は江戸表へ着致して、白石治右衛門が八丁堀の邸へ連れ込み「當分御窮屈であらうが、手前邸にて御辛抱下さるやう、何れ主人指圖もございませうから」と鄭重に扱ひ、石子伴作と共に及ぶだけの待遇しを致せり、兩人は早速大岡越前守公役宅へ罷り出で「恐れながら申上げます、仰せに依りまして鱗與之助、宇都宮城下より召連れ歸つてございします、越前公大にお喜びになつて「太儀であつた、勞れを休めし上は、少しも早く與之助を當役宅へ召連れよ」「畏りましてございします」「粗器なきやう、禮を厚く致して迎へ參れ」「ハッ」といふので、白石、石子の兩人は邸へ歸つて「扱て鱗氏、明日は早朝主人役宅へ御同道下さるやう願ひます主人も禮を厚くお迎ひ申せといふ事で、決して失禮は申上げません主人目通りへ御同道仕ります」與之助も莞爾り「イヤ天下の名奉行と、將軍家お聲懸りの越前公、私より願ひ出で、お目通り致し、たきに、公よりお目通と仰せ付け下さるは、此身の取つて擧げの事

にござりまする、何卒然るべくお執成しの程、願ひ上げます」答へけり。

(三十四)

翌日、大岡越前公は役宅の廣間に於て、鱗與之助へお目通り仰附けられ、夫れと聞く御家來の面々「何うだい、變つた事になるものぢやないか一時は切支丹破天連の魔法使ひ、引捕へて差出した者へは御褒美として黄金何枚下さるといふ、偉いお觸れがあつたものを、今度殿様のお目通りへ出るといふは大層違つたもんだなア」「夫れもさうだらう、千里の先も見透すといふ、不思議な先生なんだから」と皆威服致して居り、扱白石治右衛門、石子伴作の兩人は、與之助の前後に立ち、廣間へ案内せしに、大岡公は奉行といふので、恐ろしい怖い人のやうに思ふが、寔に柔和な方で人に上下の差別は附け

す、況して役目の外の事にはなれば町人にでも打解けて親しく話を致し、座に着くと、越州公は、お立出でになつた「ハッ恐れながら申上げます、お召に依つて、越州公は先づヨロリと與之助の人相を見て、『オ、鱗與之助とは其方か、遠路の處大儀であつた、予は豫て其方の玄妙不可思議なる術の話聞き、一度面會致して其方の話も承はり、且つ其術をも見たいと存じ、永々其方の行衛を捜し居つた、今日は能く參つて呉れた、サア打寛いで語れ、ズット進め』と言ふ其舉動が、今日初めて會つた人のやうでなく、流石は名奉行だと與之助は感服せり、今日初めて會つた人のやうでなく、農民の伴が神佛の力を借り奉つて、僅かに其見る處を告げるのみ、賢者の眼から見る時は所謂子供騙しの術、面目次第もござりませぬ」「イヤ左にあらす其方が今日まで見透したる事は、一として其的を外さず、予も感服致し居る、して其方神佛の力を借りると申すが、其信する所の神佛

は「左様にござりまする、一、時切支丹宗門など、世に誤まられしが、私めは下總の國印幡村の生れ、程近き隣國筑波山大権現を信心致し、且つ又小田原道了薩陀、三州知立明神の庇護を受け居りまする」と其身が幼少の砌に、初めて見た印幡沼の鯉の夢、並に災難を免かれし事など、詳しく申上げし上、全く以て神佛のお力に據り、僅かに一端を見るのみ、四相を覺り給ふ賢者に對し、却々吾々の試みます術、思召しに叶ふ筈はござりませぬ」越州公は與之助の家筋が、家康公より苗字帯刀の御免と聞かれ「天晴れなる其方の祖先汝の如き仙術者の出づるも無理ならず、何は然れ子が面前に於て、其術を試みよ」「ハッ」と言つたが、越州公も何を試験しようかとお考へになる舉動「コリヤ障子を拂へッ」との仰せ一方お椽の障子を聞く、お役宅の事で別に立派といふ事もないが、お掃除は能く行届いてゐる、越州公は石燈籠を御覽になつて、與之助、あれなる石燈籠は、笠石と臺石が最も大きいやう見受ける、あ

がある、あの臺石の下には何かがあるか、篤く見透して呉れるやう」  
 どの仰せです、お側の者は不思議に思つた石燈籠の臺石の下なら、  
 蚯蚓ぐらゐるなものだらう、笠石の下には夫れこそ何にもあるまい、  
 昔に蒸された腐れ茸ぐらゐるものだらうと考へてゐる、與之助は畏  
 りましたとあつて、兩眼を瞑り暫し膝を手に考へました、何ういふ  
 返答をするかと思つて、忽ち兩眼開いて莞爾り笑ひ「笠石の下  
 には陽氣發する所、金石亦透るところござります、書風は王羲之にして  
 墨痕新しく美事なる出来、入つに疊んで隠してございます」之を聞  
 かれた越州公、舌を巻いて感服された、夫れは御自分が現に今朝早  
 く書いて人知れず隠して置いたのです「して臺石の下なる土中の物  
 は何なるや」「ハッ」と與之助は例の如く瞑目して考へたが、今度は  
 判らぬと見へて、何時まで経つても目を開きません、一同は少しく  
 驚けり。

(三十五)

流石千里見透しの鱗與之助も、石燈籠の臺石の下、土の中の事は判  
 るまい、コリヤ與之助も閉口したものと望んだ何をするかと一同不審に思  
 ひ、矢立を差出せば「望んだ何をするか」と望んだ何をするかと一同不審に思  
 越前守公其料紙を取上げて御覽になれば「瀾れる松の根ざし堅う  
 して、揺るがぬ御代の石燈籠かな」と狂歌を記してある、越州公ハ  
 マと膝を打ち「與之助、其方の見るところ適れ」と被仰つた、一同は如  
 何なる仔細かと思ひしが與之助は全く石燈籠の下に何にもなきより  
 斯う言ひしものにて越州公も試す爲に、隠した處と隠さぬ處を、見  
 透しさせたものです實際石燈籠の下には、側松の木が根を張詰り  
 て、殆ど臺石を圍つてあります、一土堀返せば直に判れり、扱越州

公は威服致され「ハッ」「コリヤ遠慮致せ」此上は一つの密事を見透して貰ひたい  
 つて引下る、白石治右衛門と石子伴作でさへ、遠慮させられ今に至る  
 く越州公と與之助は差向ひとなり、却々之は例のない事、町奉行  
 でこそあれ、大岡公は諸侯に列せられた人、其お大名が未だ碌々素  
 性も訊さぬ與之助と差向ひになるといふ事は實に勿体ない位與之助も  
 恐れ入れば「扱與之助、天下の政道行ふに、理非曲直は其證據なけ  
 れば決断は致されぬが、此程より怪しき一つの疑獄あり、そは江戸  
 芝札の辻に於て、先夜の大雨に一人の旅人が斬殺され居つた事件  
 やが、下手人として浪人藤掛道十郎といふ者を召捕つたるが、予の  
 見る處にては此者の所爲ならず、殺されし者は相州藤澤在重兵衛と  
 申す百姓、人に恨みを受くべき人物ならず、引續き其身寄の者など  
 取調べ居るが其方の術にて下手人は何者ぞ申す事相判らうや若し其  
 者を誰と判然致しても、證據なき中では決して罪には落さぬ、唯予が

備考として聞置くのみちや、如何であらう「成程流石は越州公、御  
 念の入つたる事にござります、如何にも私も見透したる儘を申上  
 げまするが、決して其者を正しき罪人とお見做し遊ばされましては  
 申上げ兼ねます、然らば再び術を行ひます、御免」と言つて又も  
 瞑目して行ひます、稍あつて兩眼を開きまして「ア、恐ろしき有様  
 を見ました、人にして人にあらず、極重悪人もあればあるもの」と  
 憫れ、暫しは其話もせず、惘然として居れば、越州公左こそと微  
 笑まれ「罪人は相判つたるか」「ハッ正に判りました、重兵衛が實の  
 兄、村井長庵と申す醫者にございます、住居は日本橋横山町二丁目  
 「フーム、思ひがけなき……實の兄とは……」「何お驚き遊ばす事が  
 ござります、長庵儀は兄を殺したる上、嫂は早乗三次と申す者を以  
 て、吉原堤で殺害致してございます」「オ、吉原堤に遊ばしき女の死  
 骸はあつた」「未だ夫許りか、吉原江戸町丁字屋に遊女となりたる重  
 兵衛の娘小夜衣の身の料金百兩を、長庵が横奪り致し居ります、全



く嫂を殺しましたる、之が露見を恐れての事にございます。「フーム」  
 「先づ之はお心得とのみ遊ばして、御詮議然るべく存しまする」  
 之助、過分に存する」と厚う禮を述べられ、ソコで更に白石治右衛  
 門、石子作を召されて何やらお申附けになる、夫から與之助へは  
 お盃を下され、數々の引出物をお下げになりました上、「尙予が邸へ  
 折々参つて呉れ、定めて旅路の勞もあらう治右衛門方へ引取り悠々  
 休息致せ」と仰せの上、「治右衛門、與之助は大切なる予の客人なれ  
 ば、鄭重に待遇し粗忽なきやう致せ」「ハッ」といふので治右衛門は  
 愈々與之助を、主人同様に扱つて再び吾邸へ連れ歸りたり。

(三十六)

白石治右衛門は、何彼と四方山話の末、與之助に向つて「鱗氏、貴  
 殿の千里見透しといふ、玄妙不思議の術には、實以て感心致したが

人の腹の中でも見透す事は容易と存するが、手前持病は腹痛でござ  
 るが、一つお見透しは願へますまいかといへば、與之助は莞爾り笑  
 ひ「夫れは最と易い事、治せる事なら治して進せたい」といふので  
 直に見透したが、之は腸の百尋に虫が湧いて居るのぢや、虫下しを  
 一服飲まつしやい」といふより、早速懇意な藥種屋より取寄せ、虫  
 下しを飲めば「ハ、ア大分下る、今晚一度に明朝一度で失くなりま  
 せう」と手に取るやうに言ふ、暫くして成程通じがある、其夜休ん  
 で翌朝又一度下つた與之助又見て「モ、大丈夫でござるが、何うも  
 藥の加減で冷えて居る、温石で今晚一夜温めなさい」といふ、其言  
 ふ通りすれば、翌朝は綺麗さつぱり治つた「鱗氏、忝けなうござ  
 る、拭つて取つたるやうに全快致した」と喜んでのを見て、治右衛  
 門の妻が聞き「貴君、序に坊の出来物も見て頂いては如何でござい  
 ます」「オ、序と申しては勝手ぢやが」と子供胎毒も見て貰ふ、之  
 は斯うすると此處へ寄り出来る、さうしたらば打抜き膏藥を貼り

なさい」其言ふ通りによれば、忽ち治る、之れが大評判となつた、越  
 州公もお聞きになつて、天下の政道に就ての事とは違ひ、病氣の事  
 なれば、人助けに相成る、與之助が白石治右衛門方で、同心や與力に向ひ  
 あり、夫れよりは、與之助が白石治右衛門方で、同心や與力に向ひ  
 此術を施して何人の病人を治したか判らず、然るに八丁堀とは川一  
 つの隔たりて俗に島原といふ新富町、此處に昨年玄關を張りし佐倉  
 碩齋といふて、長崎修行といふ醫者があり、實に立派な普請で、地  
 所から家まで自分のものので、貧乏人には無料で見えてやり、藥代も取  
 らない施療といふ事を看板にしてゐるより此界限では「施しの佐倉  
 先生」と崇めて皆出蒐ける、是程資本を掛けて玄關を張つてゐるが、  
 何うも肝腎の病人が少くない、是程程資を掛けて玄關を張つてゐるが、  
 を致して喜んでゐる、或者は悪口にも「施しをするのは偉いが、お醫  
 者の方は下手だと見へて、頓と玄關に藥取りがゐない」など、言は  
 れてゐました、けれども平氣で施しをしてゐる、處が唯さへ患者の

來ない處へ、與之助が近所で施しを始めたから、尙更病人は來なく  
 なつて了ひ、碩齋は下男の久助を密に呼び、久助、豫て汝は一癖あ  
 る奴と見て、何の用事も無いに斯うして俺の家に置いてやつたんだ  
 が、今日こそ一つ頼みがある、久助は笑つて「ハイ私もさう思つて  
 ろやすお國許からお伴をして來て、モ一年も御厄介になつて居り  
 ますが、お庭の掃除より、外何の御用はなし……何うもお給金をも  
 頂いたり、折々の心附けを度々頂戴して、平氣では居られやせん、  
 何日か一度は立派な御奉公をする積りでゐやす」  
 「フム、能く申した  
 頼みといふのは」  
 「ア、旦那皆まで被仰いますな、其御用といふのを  
 私が當て、見ませう」  
 「フム申して見ろ」  
 「鱗與之助を殺して來いと被  
 仰るのでせう」  
 「ギエー」  
 「何うです、私の目は遠やアしますめえ、且  
 那が今のお身の上になつたのも、あの鱗與之助の家を横領したから  
 でさア、邪魔になる與之助をあの儘にして置くと、何うして旦那の  
 悪事がバレまいものでもありやせん、今の中ハツサリやつて了ひま

兩渡す、巧く手筈を考へろと申渡せば、悪徒の久助大に喜び、此  
 久助といふのは印幡村の蔵落戸で、幕張の久五郎と言ひし男、良  
 が鱗の身代を横領した事を知り居るより、常に良庵を痛めてやらう  
 と思ひしが、何うも巧く行かす何分之分といふ証據はなし、愚圖々々  
 言ふて行けば、先方も悪徒の事ゆゑ、反對に竹筒返しを食ふからと  
 考へる中に久五郎も去る者で少し眞面目になつて、良庵方へ下男  
 奉公に住込んだ、良庵も亦此久助といふ奴は一通りの百姓ぢやない  
 マア手垢けて置いていた、又役に立つ事もあらうと、給金の外に餘計の  
 心附けなどを遣りて、随分目を懸けて置き、其中に江戸へ乗出す事に  
 なりし故、久五郎の久助は同伴といふ事になり、上岡良庵は名を佐  
 倉碩齋と改め、長崎の久助は伴といふ事になり、外科も本道もやると  
 いふ、大變な勢ひで玄關を張る、唯骨折らすで手に入つた何万兩の  
 金だから、施しをして玄關を張る、費ひ、其響きで懸ては報いが来る  
 だらうと、一年も経つたから、徐々と思ふ處へ、河向ふへ千里見

しせう」と言つたが佐倉碩齋といふは偽名、實は下總の國印幡村で  
 鱗家の財産を横領した上岡良庵といふ悪醫にて、モ一何萬といふ大  
 身代ですから、療治なんか廢めて了つて、醫者とは名許り、長者に  
 なつて居ります、人の上には上、の慾が出るもので、良庵は江戸へ出て  
 玄關を構へたい、將軍のお膝元で一族揚げたら、モ一日本一の醫者  
 になれる、在金の半分捨てる氣なら何の造作もないと思ひゐた。

(三十七)

佐倉碩齋と偽名せし上岡良庵、莞爾と笑ひ、「久助、能く言つて呉れ  
 た、併し鱗與之助は大岡越州公に召されて、白石治右衛門、石子伴  
 作なと、いふ、怖い人達に取巻かれてゐるのだ、迂濶に手を出した  
 ら、却つて此方の破滅にならう、随分共に油断なくやつて呉れる、  
 其代り首尾能く行つたら、汝にやア千兩の金を遣る、手附けに今百

今度見て頂いたら癆症には違ひないが、左まで心配する事は無い、斯うすれば必ず治ると被仰るんです、海濱に祭る神佛に朝夕お詣りをしろさう、すれは必ず治ると被仰るんです、私は法華宗ですから、房州小湊の誕生寺へやりませんでした、滅切り縁が見へて食事も進みますし、未だ半月にしきやならないのに、滅切り縁が見へて食事も進みますし、未だ半月でプラ〜朝夕のお詣りが出来るやうになつたつて、今日便りがありましたから、今も鱗先生のお許へお禮に行かうと思つて居ります、「ヘイ成程妙ですな、貴君お越しなら、私もお連れ下さいますか、何しろ八丁堀の同、か、痛氣で困つてゐますんで……」左様ですか、何しろ八丁堀の同、心の類がなくなつちや、見ては下さいませんが、宜うございます、私の親類だと言つてお連れ申しませう、私も同心衆には御最負になつて居りますので、大抵な無理は聞いて下さいませう、そんなら御飯が濟みますたら、御案内申しませう、疝氣ぐらいは直に治つて了ふで、思ひます、「ヘエー左様ですか、何うぞマア宜しくお願ひ申

透しといふ風の變つた醫者が、出た爲、全然門前雀羅といふ姿になり、悪徒の久助は百兩の手附金を、頑齋から受取り、久し振りに一杯やろふと思ひ、八丁堀三角の伊勢万といふ、小料理屋へ入つて蛤鍋と鮮物の町人が来た、之も何か二種三種、三種類へて飲む、此方は一人、人連れの町人が来た、之も何か二種三種、三種類へて飲む、此方は一人、だから黙つてゐるが、向ふは二人、種類に饅舌り、「源兵衛さん、私ア此年になるが、斯んな不思議は見た事がありやせん」、「全体其不思議といふのは、どんな事をするのです」、「其見透しをする鱗與之助といふ人は未だ年若ですが、實に妙な人で、眼を閉ぢて考へてゐると、何んでも思ふ事が自分の眼に見へて来る、病人の其痛む處、苦しむ處、お醫者を見透して、斯うすれば治ると教えて下さるんです、だからモ！なつてゐたんですが、何うしても治らず、二三軒断はられたのが、

「姉さんや御飯と新香を早く持つて来てお呉れ」と急いで是れから白石治右衛門邸へ行く支度です、久助は之れを聞き何事か一人心に鎮きたり。

(三十八)

「エ、一寸旦那、失禮でござえやすが、一寸お邪魔を致します」と久五郎の久助が衝立の蔭から出たれば、先方の二人も驚き「ヘイ何か御用でございますか」「ヘイ旦那方がお話なすつて被居るのを、蔭でお聞き申して、不意に飛出しますのは、誠に何うも失禮でござえやすが、ツイ夢中になつて飛出しやしたんで、悪しからず思召して下せえやし」と言葉は下卑るも、田舎訛りで全然生意氣な人物でもなさそふ故、町人二人は何の用事か顔見合せれば、久助は今來し少婢に、改めて酒肴を吩咐け「見れば旦那方は江戸の町家で、

何屋何兵衛と被仰るお方とお見受け申しやす、私は上總の木更津でござえやすが、國ぢやア詰らねえ小料理屋をして、幕張屋久助と申す者で……堅氣のお方へ、水商賣の者が失禮ですが、實は私も若い時分から胸の病がござえやして、上總下總は申すに及ばず、水戸の醫者へまて參つて、療治した判りやせん、てんで病の名が知ねえといふんです、で何うも段々悪くなる許り、女房の申しやすには、斯んな家業だから、お前さんが悪くなる許り、店の方はやつて行ける、一つ思切つて江戸へ行つて御覽、將軍様のお膝元にやア立派な上手なお醫者様もあらうから、ナアニ金の百兩も抛る氣なら、療治の出來ねえ事はなからうといふので、ハイ私も其氣になりやして、實は二三日前江戸へ出て參りやした、處が勝手知らねえので、馬喰町の上総屋五兵衛といふへ宿を取つて、是から好いお醫者を探さうといふ矢先、唯今のお話を伺ひまして、成程有繫大江戸だ、其鱗與いふ結構な先生がゐるなら、一つ見て頂きてえもんだ、其鱗與

之助といふ先生に、願ひてえと思つたものゝ、今お話の通り金銭づくで、難かしい、手蔓がなくつちや可いねえと聞きやして、實はガツカリ力を落したんですが、聞けば江戸のお方は、人に物を頼まれ、て滅多に厭とは被仰らねえと、豫て國で聞いてやしたから、一番お願ひして見やうかと、失禮は知りながら斯うして出た次第でござえ「やす」といふ處へ、女中が新しい酒肴を持つて来た『旦那方へ差上げるといふは失禮ですが、お近づき一口差上げてえと思つて……』何うかマア一口召上つて、お盃でも頂きてえもんでげす』と久助は根が博奕打ち、破落戸仲間でも一寸口利きです、巧く先方を立て、下から出ました、商人の方は勘定高いもので、今飯を食はうとしたのだが格別懐るが痛まないのなら、未だ一銚子ぐらぬ行けるといふ腹、ツィ盃を取ると久助が、旦那々々と煽つて、酔はせる積り、二人は振舞酒は酔にされて久助さんどやら、田舎から出て来なすつて夫れはお困りの事だらう、そんなら一つ御承知があるかないか、先

生へ伺ふだけは伺つて上げやう、ア、そんなに肴を列べては困る、モ一飲めないなんだからなア丹波屋さん、一つ頼んで見て上げやうか』「左様さ、人の世話は人がするもんだ、そんなら源兵衛さん頼んで上げなさい」と話は、大抵出来た、久助占めたと思つて『左様なら是からお伴を致しやせう、肴は手の附かねえ方を、皆折へ詰めさせやす、夫からお歸りに夫を持つてお宅へお土産に……』「氣の毒だなア……ちやア此方だけの勘定を……」といふと、少婢が『イ、エ御一緒にモ一頂きました』といふ、二人は驚いて『氣の毒です、ねえ源兵衛さん』「流石は料理屋の御亭主だ、氣が利いたもんだ」と遂に二人は好い氣になつて、此久五郎の御馳走を受けて、八丁堀は白石治右衛門の邸へ、與之助に取りては敵同様な幕張の久五郎を引込みたり。

鱗與之助は斯る企みのあらんとは知らず、白石治右衛門方に居れば  
 白石方へ出入りの町人は如何に人助けとは言ひながら、與之助も煩さ  
 て呉れといへば此頃は大抵断はれるに、又丹波屋が連れて来て一應は  
 いから難病の外は、最初の町人は下男などが、強て頼み、據るなく見て  
 断はりしが出入りの者ゆゑ下女下男などが、如何に千里見透しでも、吾身  
 やる事に成り、最も見貫ひなさい、此の人なら治ると醫者を教えたゞ  
 何處の醫者にても久五郎が出でしが、如何に千里見透しでも、吾身  
 け、代りて慕張の久五郎が出でしが、如何に千里見透しでも、吾身  
 に係る事と私慾の事は許さず、夫れも或る場合に神佛の佑けなら知  
 らず、自分の事腹にも異状はない、至極達者なヒン／＼した軀故、  
 どいふが胸にも込み、怪しい人物だ、第一此二人の町人とは全然人柄  
 與之助は考へ込みに、怪しい人物だ、第一此二人の町人とは全然人柄  
 が違ふ夫れも宜いから、江戸の者でない、下總訛りもチヨイ／＼出る、  
 迂散な奴だと思ふから、「コリヤ手前見違ひかも知れんが、手前には

力の及ばぬ病だ、實に不思議の事でござる」と其儘無言である、久  
 助も此目の高いに驚いた、病氣でも何んでもないに、斯う言つて來  
 たのを、チャーンと見破つたのは憫れた、併し脱からぬ顔で「エ、  
 鱗先生、不思議と被仰りますと、病人の身に取りますか、醫者をお名指し下  
 配になりませんが、何うかお御療治下さいますか、醫者をお名指し下  
 さいますか、夫れも藥を教えて頂きたう存じやす」と低頭平身して  
 頼みます、與之助は稍暫らく考へまして、御道理ちや、然らば醫  
 者だけ教えて進せやう、ツイ川一つ隔てた處に、佐倉碩齋といふ名  
 醫がある、此處へ參つて見て貰へば、此不思議な奇病も立所に全快  
 致さう」と言切れば、流石の久五郎も「ウム」と言つて二の口が  
 開けず、久五郎心中には與之助は、モ一上岡長庵が佐倉碩齋とな  
 つて、江戸へ來てゐる事は知つてゐるのだ、寧ろその事飛菟つて、懐中  
 名奉行と七首で斬殺して呉れやうかと思ひしが、イヤ／＼此家は

し狼籍者と言つて、捕方に飛出されちやア耐らない、一通りの捕方  
 とは違ふ」と怖氣づき、「先生、誠に何うも有難うござせえやす」と  
 言ひ、急いで歸へれば、與之助は何事も言はず、笑つて平生の如く  
 にしてゐたり、町人二人も歸つて了ふ、與之助は唯自然に佐倉碩齋  
 といふ名が、胸に浮んだだけ、少しも之を上岡良庵とは知らず、此  
 方は久五郎の久助が、夢中で飛んで歸り来て、人知れず碩齋に「先  
 生、恐ろしい奴は鱗與之助です、實はコレ」と今日の一日は驚か  
 を詳しく語れば、悪人の碩齋も舌を巻いて驚きながらも口では驚か  
 ず、久助、夫れ位の事で驚いて逃げて来たのか」「へい彼奴が先生の  
 在處まで知つてゐるや耐りやせんから、兎も角お知らせ申しに戻り  
 やした」「手前も悪徒にも似合はねえ、そんな事位で逃げて来たのか  
 縦令俺の居所を知つてゐるやうとも、何んの恐れる事はねえや、又佐  
 倉碩齋が上岡良庵だと知つて、何んとか俺に敵對しやうといふなら  
 今日まで黙つてゐる筈がねえ」「成程」「確かりしねえか、手前にやア

與之助は片附けられねえのか、若し手に合はねえなら、何うも及び  
 ませんと言つて断はん」「先生、さう言はれちやア此久助も、へい  
 片附けられやせんと思つて言ひやせん、今日歸つて来たのも到底尋常で  
 は、可かねえと思つて騙し討ちにする積りなんです」「さうか、夫れ  
 が眞個なら少しも早くやつて見ろ、首尾能く行きやア千兩だ」久五  
 郎も意氣地になりて廢められずなりたり。

(四十)

根が慕張の久五郎といふ悪者、千兩と聞き通されず、何とかして  
 鱗與之助を暗殺せんと、頻りに考へ込みしが扱て思案が附かず頻り  
 に工夫を凝らしたり、話變りては此方は、野州宇都宮の遠慮して、米藏  
 に於ては旅装束で、白石治右衛門の邸、玄關へは遠慮して、勝手口  
 へ來り「エ、御免下さいまし、私は野州宇都宮の米藏と申す者でこ



願ひに参るので、コリヤ又其方の口ではないかと、お見違ひ申しましたので……何うか悪しからず」と下へも置かねやうにして、一室に案内致します、米蔵は立派な邸なので、キヨロくして平生のお饒舌りも、唯お辭儀許りしてゐる有様です、所へ又用人が参りまして、唯今鱗先生へ申上げました處、米蔵殿なら直に居室へ案内を致せとの事でございませぬ、何うかお通り下さるやう」鄭重なので米蔵煙に巻かれて通ります、一室の廣々とした處に、與之助は書見をして居りしが「オ、米蔵か、能く参つた」といふ、其舉動を見るに宇都宮にゐた時とは自然に貫目が付き、立派に見えますから米蔵平伏して、一寸は首が上りません「米蔵、さう遠慮しては困る、其方の二階に居つた時と同じやうに思つて呉れ」「へい旦那、何うも大變な御出世でございませぬ、私ども宇都宮で江戸の噂を聞く度に、嬉しくつて……耐りやせん、聞けば今度は將軍様の御前へお出でなせえやすつて……何うもお目出て之事でござえやす」して母上や妹は

ざいます、御當家に御逗留の鱒與之助様に、お目通りを願ひます」と云へば、勝手のは「イヤ野州でも信州でも、縦令奥州の果から出て来ても、モ一駄目だから歸んなさい」「へエー、では鱒の旦那は御轉宅にでもなりましたか」「イヤ、轉宅どころぢやない、近日將軍家お目通りへ出なさるのだ、ごんな町人が来たつて、見て下さる事ではない、二三日前から身を清めてゐなさるんだから、モ一諦めて國へ歸んなさい」「へエー何んだか一向私には舉動が判りませんが、何も私は見て頂きに参つたのでございませぬ、與之助様の阿母様の何からの、お使に参つたのでございませぬ、ア、此處は勝手口、何うかひ、何うか此方へ是は失禮申しました、ア、此處は勝手口、何うか改めて玄關から……」と打つて變つて鄭重な扱ひです、其中に用人が来て来りて「何うも勝手の者が存じませんで、失禮を申上げました、何故最初から斯うなら斯うと仰せられませんで、實は先達より町人共が、イヤ痴癪だ、痛風だ、脚氣だと申して、先生へ御無理を

……「お喜びなすつて下せえまし、此前の飛脚に旦那が御承知なすつたので、お鶴様はお返辭のあつた其日の中に、脇坂様から巴屋へお金をやつて、お落籍といふ事になりやした、サア親許は柚木善之進様で、之れが大張込みで荷物が十三荷といふので、御城下を驚かす程の御婚禮です、併し能く行届いてゐるので、誰にも巴屋の花魁といふ事は判りません、全く重役の柚木善之進様の貫ひ振といふ事に、なつて、夫れは大變な騒ぎでした、それに又脇坂様は質素に、といふので、夫れは、柚木の旦那が伊達好みと來てゐるから、腹を切つての大散財です」「ア、左様であつたか、夫れに又お喜び下さいまし、阿母様も大分お加減が好くおなりさいました、夫れもさうでございせまう、柚木様から御典醫をお遣はしになつて、お薬だつて朝晩二度も調合なさるんです、モ一四五日中にはお床拂ひで、一度お鶴の縁づいた、お邸へ上つて見たい、といふやうな事になりました」「ア、母上の御全快、ア、何より喜ばしい儀ぢや」「ソコで母

親様が此事を詳しく申上げて呉れ、又江戸の模様も聞いて來て呉れと被仰いますので、斯うして参りましたのです」與之助は母に孝行な人「ア、有難い」と喜びたり。

(四十一)

米藏の話に與之助は、大いに喜びまして、先づ以て宇都宮表の事は安堵致した、然るに其方にも喜んで貰ひたいは、此與之助の身上ちや、此度江戸南町奉行大岡公の御前へ出るさへ、身の譽れと喜び居つたる處、大岡公より更に御老中、若年寄の面々へもお話があつた爲、何と例のない事ではないか、身共の如き身分もなき者が、將軍家の御前へ出られる事になつた」「ヘエー何うも何といふお目出たい事でございませう、で何んでございますか、公方様が……」如何にも吹

上御庭前に於て其術を試みよといふ上意ださうだ」「へエー吹上の御殿……何うも大變な事になりやしたねえ、定めて母親様がお聞きなすつたら、どの位お喜びか判りやせん」「兎も角此度の御上覧は、モ一二三日の中であらうから、お前も江戸にゐて、其模様を見て行くが宜い、夫れが上首尾であつたら、愈よ母上を喜ばす事も出来る又何れ母上も妹お龜も江戸表へ呼んで又種々御相談申したい事もあり母上の思召しに寄つては宇都宮なり印幡村なりへ御隠屋所を設けたいと思ふ「御道理でございます、左様ならば吹上御上覧の當日まで此米藏は江戸に逗留してゐやせう」「何うかさうして呉れるやうに……」と言ふ、其事を一應白石治右衛門へ語りますと「夫程までに氣心の知れた者ならば、鱗氏の御家來として吹上御上覧の當日は、お伴にお連れになるが宜しからう、又わざ／＼宿を取らずとも、當邸へお止め置きになつて、日々の小用をお申附けになつたら、尙御都合が宜しからう」と治右衛門の好意です、與之助も大いに喜びま

して其儘米藏を止め置きければ、元來まめな男ゆゑ、能く氣が附いて立働く、與之助よりも白石方の者が調法がつて「米藏さんく」と言つて持て囃します、扱其翌日になり「扱米藏喜んで呉れ、愈よ明日となつた吹上御上覧は……」「へエー、唯今白石殿から御沙汰があつた、お前も兎も角吹上へ入るのだから、粗忽のないやうにせにやならん、夫れはモ一ぢやんと心得てゐやす、白石さんにお頼み申しやして、仲間姿になるのです、今日床屋へ入つて髪を結直して来やす、一寸刷毛先を散らして、却々粹なもんですせ、紺看板に梵天帶眞鍮巻きの木刀を背後へ差して豆絞りの手拭を握つて旦那のお草履取りです」「フーム仲間になるのか、氣の毒ぢやな」「ナア=氣の毒どころか、私ア大好きなんです、衣裳も小道具も皆此邸から借りやした、だが旦那……仲間に米藏は可げやせんね、芝居でも可内とか、脛平とか仲間らしくねえと幅が利きやせん、名などは何うでも宜いではないか」「さうでござせん、何んとか宜い名を附けて下せ

八丁堀より吹上まで、明六ッ前に着かんとして、白石治右衛門の家來  
 三人が附添ひ、鱗與之助は乗物に打乗り、未だ夜明け前の薄暗がり  
 を、提灯を點して先に立つ、之は仲間姿になつた米藏の鹿平にて、  
 威勢好く木挽町へ懸つて來り、川一つ越せば、幕張の久五郎、慾に眼も  
 逢萊橋濱の方、此方は佐倉碩齋の下男の慕張の久五郎、慾に眼も  
 眩み何の怨みもなき、鱗與之助の討たんと、吹上御庭内へ入りし  
 段々模様を探り見れば、種々討取る方法を考へしが、何しろ百兩が手金  
 ふので占めたりと、種々討取る方法を考へしが、何しろ百兩が手金  
 で、事が成就せば千兩といふ美ゆゑ、金に飽かして好い刀でも買  
 はうと、其前日に下谷車阪をブラついで探せしが、フト弓矢鐵砲を  
 列べし店に、一挺の短筒があり、當時のヒストルのやうな、巧なも  
 のではないが、其頃は未だ種ヶ島傳來の短筒と言ひ、殊の外珍重し  
 たので、久五郎は是れぞ幸ひ、尙吾身は敵に見せず、三間しか届かぬ  
 短筒ならば、遠く隔つて敵を討ち、尙吾身は敵に見せず、三間しか届かぬ  
 短筒ならば、遠く隔つて敵を討ち、尙吾身は敵に見せず、三間しか届かぬ

「困るな、夫れでは……」  
 何うだい鹿平は……「鹿平……」  
 ……鱗の仲間衆鹿平様、宜いなア鹿平結構です」「然らば夫れと極め  
 やう「旦那の名を忘れては、可やせんせ」元氣の宜い男で直に翌朝  
 の支度を宵の中にして、了へば、スルト白石治右衛門が参り、  
 明朝は將軍家には明け六つの御出門であるに依つて、其許も夫れよ  
 り前に御用意下さい」「畏りました」「何か御用意に就て不都合の事が  
 あつたら、お申聞け下さい、主人越前守より、呉れくも其儀を  
 申遣はした「有難く存する、何一つ不自由なく御用意下さい、其儀を  
 て最早此上申上げる事はござらん」と言つたが途中其身は羅る吳  
 が、横たはるとは其身の事ゆゑ少しも判からず居れり。

(四十二)

助を討取るには、是より外はないと決心して、値を聞いて見ると七十五兩だといふ、随分高い値段だが、欲しくもある。「何うだい大將少し剩からねえかね」亭主は相手を見るとき、田舎訛りがあり其上服装も野暮の事故、頭から莫迦にして「剩からないね、外を聞いて御覧」「オイ、御亭主、外にある位なら心配はしねえんだ、珍らしい品だから高いのは承知で買はうと思つてるんだ」「へエ、お前さん買ひなさるか、ね、イ、エ買へますかね」「亭主、厭な事を言ふな、買へるかなとは何んだ、お前銭がねえと思つてるんだな、宜しッ薄情な商人にやア、金から見せなきや買物は出来ねえんだ、ア、江戸といふ處は不便な處だ……オイ見て呉んな、小粒も交せず小判で九十兩百兩あつたんだが今朝からモ一十兩費つたんだ、服装が悪いつて田舎者だからつて、あんまり莫迦にして貰ふめえせ」と啖呵を切れば亭主は驚いたが代物は此方の物、金は向ふの物、賣買となりや一文でも値の宜い方へ賣るが商人、どんな田舎者でも構はないだから、

急にお世辭を言つた、久五郎は値切り附けて七十兩に剩けさせ、鬼の首でも取つた氣になり、今朝も之れを懐ろに隠して來れり、久五郎は下總幕張の生れなるが筑波山で育ち獵人の道には詳しく、鐵砲も弾込めしてイザといふ時、火繩をといふので燈袋まで、チャーンと用意して、今川向ふの仙臺邸を目當に、此邊から討たうかと距離を計つて居れり、與之助の乗物は今や橋に懸りし時、此時こそと久五郎は、柳の木に登りて火繩の用意をなし、橋の真中に乗物の着した時、斯うしてと身構へ充分にして打つて放たんと待受ける、乗物の先に立つ鹿平の米藏は、小聲で「旦那様、モ一橋一ッ越しましたし、」與之助は「イヤ、左様な事をしてはならぬ、況して右手は仙臺公のお館なれば慎んで參れよ」「へエ、右が奥州の仙臺様ですか、あの六十四万石の……」「如何にも……」「列んで見えます先の御門は……」「會津公だ」「會津様、左様ですか、お國も會津と仙臺は近し

走らんすれば、其背後から飛來りし一人の武士、久五郎の横ッ面をボカり、目から火の出る程張り飛ばした、其右手から種ヶ島をも言つたが、クル〜ッと三遍廻つて倒れた、其首根ッ子を押し附け、ぎ取つて彼の武士が「コリヤ其方は何者だ」と唸つて許り、武士は熱々と彼の男の相を見ても出さず「ウーム」と見れば昨日下谷車坂に於て、彼のれなる種ヶ島を買取つたであらう、身共は見れば、人相と申し、武器店に立寄り、汝が値段の掛引致すを聞き、人相と申し、いかに存じ、見え隠れに其方の跡を跟つけ、参つたり、若しや賊心等ある者ではな、汝如き者に短筒の要るべき筈なし、若しや吹上御庭園へ出、入り致す御方を討取るものと致す者は、吹上御庭園へ出、其方の齋方へ入るを見、夜明け前に出づるを待ち、跡追つて是

お邸はお隣り同士お仲の宜い事でございますな」「何を申し居る、上ツ方の噂など致してはならん、黙つて参れ」「米藏は喜しくつて耐、りません、大手を振つて蓬來橋を渡らうと致します、丁度乗物は橋の真中に來し時、久五郎は充分に狙ひ定めて、火蓋を切らんと身構へる、夜は未だ明け放れず、人顔も定かには判らぬ頃なり。

(四十三)

今放さんとせし久五郎の右手に何者とも知れずボンと石を飛ばせし爲に引か引きしも玉は反れて、沙留川の中へ落ちたれば「アッ」と思ひ久五郎は左の手から柳の枝を放し、本から眞逆様に落ちた、けれども久五郎は却々身の軽い奴、身を反して幸ひ怪我なく地上に突立ちしが、五郎は却々身の軽い奴、身を反して幸ひ怪我なく地上に當り、敵は目の前にある、跡追蒐けて今一發の下にと、乗物目蒐けて

手の二人は何方か、種ヶ島を持つてゐる、オドンくを食つては耐  
 らず、怖々ながら近寄り見ると夜もほのく、と明渡り、一人の武士  
 が種ヶ島を提げ、下男ともいふべき姿の男が、頭を腫らして閉口し  
 てゐれば、何うも此二人は別物らしい、併し今となりて猶豫は出来  
 ず、「いざ神妙にお繩を受けよ、吾々は南町奉行大岡越前守公に仕へ  
 る、白石治右衛門の手附であるぞ」と我鳴ればこれには久五郎青く  
 なり、豫て悪い事をする仲間の方が江戸で大岡公といへば、怖毛を  
 振ふて怖がつてゐるより、小さくなつて了ふ、武士は據るなく「フ  
 ーム大岡越前守殿御家來とあらば是非は忽ち明白致すであらう、尋  
 常にお伴致さう、拙者も御三家の御一人たる御方の直臣、總目の恥  
 辱を受くるは主君に對して恐れあり、何卒此儘御伴致すやうに願ひ  
 たい」と言つた時に、鱗之助は何か鐵砲の音に驚き、一同のな  
 すを見てゐるし、暇取るから自分も乗物から出て参りたり。

で参つたるに、不思議や一挺の乗物、八丁堀より参るを追ひ、木挽  
 町より先廻りして、此柳の木へ登りしより、初はと石を飛ばして引  
 捕へたが、あれなる乗物の中は誰にて、ま方は如何なる恨みあるか  
 義に依つては随分是より、其方の味方となつて遣はすまいものでも  
 ない、サア誠に語れ」と突放せしが、今この乗物の方から三人の武士  
 を抱き、暫し無言で居りしが、其中に今の乗物の方から三人の武士  
 が飛んで来れば、久五郎はコリヤ敵はぬと逃げんとするを、彼の武  
 士は種ヶ島の臺尻で、久五郎はボカリ「逃げやうとて逃がすか」と  
 睨みつけられ首を縮めて平太郎をボカリ「逃げやうとて逃がすか」と  
 者ッ」と二人を圍むを、武士は笑つて之れは又迷惑千萬、是れなる  
 男こそ今の乗物に、種ヶ島を放ちし者、拙者は唯今曲者を引捕へし  
 までの事、「イヤ、其儀は後に申立てよ、將軍家お膝元に於て、飛道  
 具を放ちし曲者、兩人とも御用であるぞッ」武士は宜い災難だ、昨  
 宵から立ン坊までして心切は、無になつて了つたのです、三人も相

見れば奥の助殿も御短氣だ、さう言つて振放して行つたからとて、  
 却々其許がさうかと言ひ其儘にする婦人でない事も考へねばならぬ  
 之が鱗氏が千慮の一失と申すもの、マア今と相成つて何と申しても  
 詮ない事一應は父上の側へお歸りになつて、然る上是から先の御  
 相談を致さう、何うか少しも早く良人の行衛を探し、お會はせ下さ  
 ならば犬飼様、何うか少しも早く良人の行衛を探し、お會はせ下さ  
 いますやう、「オ、勿論の事、手前が草を分けても探し出し、其許と  
 目出たく夫婦にせずには置きませぬ」伊勢清へ連れ歸られると勝手  
 に家出したお氣で定めし父は怒つて小言を申す事であると思へば、  
 清左衛門は病氣で年寄り父は怒つて小言を申す事であると思へば、  
 可愛念に涙を流し「犬飼様、娘が家出致しましたも、皆私の至ら  
 ぬ處唯此上は娘が思ひ懸慕ふ鱗與之助殿、私にも能く當人の氣心は  
 存じ居り此上は娘が思ひ懸慕ふ鱗與之助殿、私にも能く當人の氣心は  
 許す様のお骨折で、其行方を調べ下さいますやう、入費の處は何程

茲に話變りて、彼の水戸城下に於て、犬飼三十郎が厚意に依り、お  
 縫は我父なる筑波山の麓、稚尾村の伊勢屋清左衛門方へ戻れる事  
 なり良人與之助が同行する事とのみ思ひ、祇町の吾家へ歸り見れば  
 一通の書置を殘して行衛知れず、お縫の歎きは如何許りか、是まで  
 數年の間千辛万苦して漸く嬉しい世帯をするやうになりしと思ふと  
 良人は此身の爲を思つて呉れるは有難きも親許へ一人歸れといふ謂  
 はゞ縁切り状、一時は狂氣せん許りに歎きしが、犬飼三十郎が心切  
 に意見して、「之は手前も年甲斐の考へでは、其許の身を思はれて  
 た、今となつて見ると成程鱗氏の考へでは、其許の身を思はれて  
 自分やうな世を忍ぶ人間に一生連れ添ふは可哀さうだ、何不自由  
 なく暮らせる、伊勢清へ戻れと被仰るは無理もなし、併し尙考へて

(四十四)



要りましたも構ひません、私は何万兩の身代がありまして、跡目を継ぐべき肝腎の娘がゐなくて、何万兩も石瓦同然です、跡目を探し出し當家の婿養子になつて呉れるやう、お頼みなすつて下さいまし」と頻りに三十郎へ頼めばお縫も父への詫言は口へは出ませぬ、只拜んで許り居たり、扱三十郎が申しますには「茲に一つ好い事がござる、手前は來年江戸詣でござれば、唯今より與之助殿の行術詮議を始めますが、來年は江戸表に於て手一杯探して見ます、又承はれば一時切支丹破天連の魔法と思はれしも、今は天下に誰あつて、左様な世迷言を申す者なく、鱗與之助と申す者は神佛の力に依り千里見透しといふ、不思議な術を現はすに違ひない、斯様な事になつて居りますれば、最早世に憚る事はござまいせん……お縫殿も來年までは、まだ時節到來せぬものと思召し、父上に孝行を盡して、手前よりの吉左右をお待ち下され」と事を分けて申します、お縫も清左衛門も殊の外喜びです、此犬飼三十郎が江戸詣となつて、水

(四十五)

戸様お邸へ参ると、直に其日から江戸を四角八面に歩き廻り、鱗與之助の行術を探りしが何分二百六十餘大名のゐる大江戸、大岡公のお見出しになりしといふ噂が、未だ耳へ入らぬ中に、下谷車坂に於て怪しい男が、種ヶ島を七十兩で求めたを認め、不圖物好きから其跡を追つて見た處が、前申上げましたる始末、乗物の中の本尊様が鱗與之助とは存しませんから、今白石治右衛門の家來に曲者久五郎諸共引立てられやうとする處へ、鱗與之助が参りました「之れは鱗與之助」と一同は懇懇は一禮したので扱はと犬飼三十郎は胸を躍らせけり。

犬飼三十郎は鱗與之助と知りしゆえ、一同に會釋しつゝ、「初めてお目通りを致す、手前は水戸藩士、犬飼三十郎と申す者、唯今是なる

曲者を引捕へたるに其類ならん疑ひ受けましたるが、實は斯様  
 な場所立寄ります其元はと申せば、尊公の爲……斯様申しては、  
 定め御合點が参りませう、拙者は水  
 戸祝町に、お縫殿に勤め、且又貴殿にも御承知を願ひ、拙者の恩人  
 椎尾村伊勢屋清左衛門方へ、お二人をお連れ申して、数年來の恩を  
 報じたいと存せしが、是一生の誤りにして、貴殿は正しき心より  
 何れへか人知れずお立退きになりまして、今更三十郎慚愧罷り在  
 る次第と尙物語らんとするを與之助は「アイヤ夫にて萬事相判り  
 ました何分今日には將軍のお目通りへ罷り出る與之助汚れたる事、  
 世の俗事とは離れねばなりませず」と言つて一同を返つて見て、  
 「コリヤ各々方、此御人は却々以て、悪人に徒黨する如きお方にあ  
 らず、水戸の家御重臣の事ゆゑ、失禮なきやうにお頼み申す」と與之  
 助から鶴の一聲、大岡の家來共は「御三家の御家來ださうだ、何う  
 やら與之助殿の御親類らしい」と皆犬飼三十郎へ鄭重の挨拶です、

家來は「して是なる曲者は、如何取計らひませうや」と犬飼が「ア  
 イヤ其儀は大岡殿御家來にお引渡しの上、手前も同道致し、町奉行  
 所にてお調べの模様、手前承知致されよ、又萬事のお話、白石治右衛門邸へ参  
 打ち「然らば左様致されよ、今日は随分將軍御前体上々首尾を、祈り  
 られよ」「ハッ承知致した、今日は随分將軍御前体上々首尾を、祈り  
 居りますぞ」「御厚意辱けなう存する」と言ふ時、最早將軍御門出  
 早馬にて駈け附ける者が、與之助忽ち見透して「最早將軍御門出  
 の知らせが参つた、猶豫致されぬ」とて、茲に悪黨久助も何の雜作  
 もなく引張られて参りました、與之助の乗物は御門の中へ入る、扱  
 暫く與之助は控へて居れば、白石治右衛門が参り「鱗氏、御苦勞千  
 万でござる」「コレは、白石氏、途中案外なる事起り、遅刻致して  
 申譯がござらん」「何の、將軍には未だ、お茶室に御配慮忝  
 未だ半時の暇はござらうテ」「左様にござりますか、何彼と御配慮忝  
 けなう存する」「與之助殿、唯今主人が其許へ一寸お目に懸るとの事

なり、致さうとされ又、近江聖人、中江藤樹、門弟下熊澤蕃山などいふ  
 學者が現はれて、將軍綱吉公は其遺風を受け、妙な穿達ひなし唯武  
 士道は一つの床の間飾りとして、奸臣柳澤吉保の甘言に惑はされ其  
 奥方お鮫の方をお部屋様にせり上を見做ふ、諸大名も美人を愛し歌  
 舞音曲に耽りしが、此網吉將軍の次が明君吉宗公です、今  
 此お方は民を憫れみ、此網吉將軍の次が明君吉宗公です、今  
 投書函、公事方定め書、御定め書百ヶ條、と斯ういふ結構か法を作  
 られた位の方ゆゑ、鱗與之助を召され、二三のお尋ねがありし後  
 「忠相と定信は、與之助を召し連れ、茶室へ参れ」との御意、格別  
 變りしお尋ねもなくして、只管與之助を信じられ、無位無官の者と  
 御同席なされたり、流石に目は高い、徳川中興の將軍と稱へられる  
 程の事はあり、老中松平定信と大岡越州公は、與之助に茶の手前を申  
 附け、唯モ一與之助は恐れ入る許り、此日誰にも聞かぬ閑室で、與

でござる「恐れ入りましてござる」治右衛門が其座を去れば、纏て  
 治右衛門に襖を開かせて、大岡越前守忠相公、無論一同は長袴です  
 「與之助、今日は大儀であるの」と仰せられた「ハッ身分卑しき私  
 風情が、將軍御前へ出でます事、實以て身の譽れ、是れ皆大岡公  
 の御推薦と謹んで御禮を申上げます」何は然れ、御前へ召連れられ  
 「ハッ」と與之助は、謹愼して、大岡公に隨ひ吹上御庭前へ來れり、  
 與之助はモ一是から庭草履を穿き平庭から將軍を見上げ奉る、大岡  
 公は大名格、お椽の上にも履を穿き平庭から將軍を見上げ奉る、大岡  
 たり。

(四十六)

茲に一言八代將軍徳川吉宗公の、明君でありし事を、手短かに述べん  
 に全体元祿年間には世の風俗が大變に驕に長じ、又文學も甚しく盛んに



し事故、旅先で随分義侠の人の世話にもなりし者、又悪人ながら刃  
にかけた者又夫婦の爲に死んだ者、乳守のお仙の墓へも詣りたしと  
將軍へは一年のお暇を頂きモ一筋の主となり、立派にして以前  
旅せし處だけ歩いて歸り、戻りて見ればお鹿米藏は、一生當家へ奉  
公致したいと坐り込み、與之助一家は祖先に數倍した身の上とな  
り、夫に引替へ上岡良庵は、下男久五郎と共に小塚ッ原の刑場で磔  
の刑に處せられたり。

中村兵衛作 長谷川小信書  
小説 狸心中  
實價四十五錢

### 池沼鯉之助 (終)

大正元年十一月十五日印刷  
大正元年十一月二十日發行

實價四拾五錢

不許複製

【附與助之鯉沼池】

演者 如鬼坊  
發行者 樋口源次郎  
印刷者 阪部喜二郎

大阪市南區三休橋邊谷南へ入西側

發賣元

樋口隆文館

(振替口座大阪八七九七)

#### 樋口隆文館營業案内

- △樋口隆文館は主として小説の出版……及び其卸賣を専業と致居候に付各地方の販賣業者諸君……及び貸本を營業とせられ諸君は多少に拘らず御注文被下度候
- △御買日録御入用の諸君は郵券二錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本用としてなるや御書き添へを願ふ
- △樋口隆文館は成る丈け珍らしいとして内容も成る丈け面白い物を探んで毎月二三種宛は缺さず發行致べく候
- △毎月新版の通報料として一ヶ年分金貳拾四錢御送金の向へは毎月一回新版物の御通報致すべく候
- △御照會の節は返信用切手を御封入せらるゝか又は往復は……にて願上候猶御住所と御氏名及御照會の要点は出来る丈け字休明瞭に御書きを願ふ
- △樋口隆文館の所在地は大阪三休橋邊谷南入西側に御座候、振替番號は大阪八七九七、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候着金後にあらざれば一切送本仕らず候大部數の御注文には汽車便又は汽船便其他成丈け早く届く方法を以て御送品可致候

面白き小説新刊の御知らせ

日本新聞  
掲載小説

# 千里眼

渡邊默禪君作  
實價五十錢 送料六錢

此の『千里眼』は二十年前、遠州に現れたる横山花子と云へる可憐の一美人が神通自在の術を弄し、魔法使ひとして驚嘆されたる幻怪奇譚の事實を寫したるものなれども、其の裏面には悲惨骨を列り肉を刻むの消息あり、彼女の父横山正次郎は故森有禮氏の兄にて明治三年征韓の議を排して人道を説き、慷慨の言を當局大臣に薦めて衆議院門前に割腹したるより以來、流離飄零、具さに辛酸を嘗め遂に或る動機の掘ふる所となりて戀の犠牲となりて了し天下の珍たる其身を捧げて蒼波渺茫たる琵琶湖上に自ら奔り去れり、生涯二十餘年の徑路を寫して委曲を極むるの間に靈と肉の戦、個人と社會の葛藤いかに險惡峻烈なるかを説き、一面には心靈萬能の奇蹟を囁き、一面には奇に奔る輕佻の現代を諷刺す作者は素より現代文壇に盛名を縦にせる渡邊默禪君其筆力の艶麗にして繪の如く精巧なる真に近來の好讀物である。

## 樋口隆文館發行講談小説之部

- ▲天正幽靈半之丞 同
- ▲天正母里太兵衛 同
- ▲天正飯田覺兵衛 同
- ▲天正珠九助 同
- ▲天正文珠漫遊記 同
- ▲天正東海漫遊記 同
- ▲天正中條兵庫之助 同
- ▲天正中條武勇傳 同
- ▲天正中條兵庫旅日記 同
- ▲天正後の中條 同
- ▲天正後の方丸弘行 同
- ▲天正後魔風軍藤太 同
- ▲天正後姫山の旗揚 同
- ▲天正後花の大潮 同
- ▲天正後の大潮 同
- ▲天正後熊之丞 同
- ▲天正春日熊之丞 同

- ▲後宮島大仇討 同
- ▲後見玉由利之助 同
- ▲同後の由利之助 同
- ▲同後の悪狐塚由來 同
- ▲同後の松平康之助 同
- ▲同後の近藤勇 同
- ▲同後の島武雄 同
- ▲同後の鮫島武雄 同
- ▲同後の真田鬼彈正 同
- ▲同後の保科槍彈正 同
- ▲同後の高阪智惠彈正 同
- ▲同後の藥師の梅吉 同
- ▲同後の藥師 同
- ▲同其後の藥師 同
- ▲同女俠龍神お玉 同
- ◎女俠後の龍神
- ◎俠客唐獅銀治
- ◎劍客木曾庄九郎
- ◎同木曾白雲齋
- ◎磯畑伴藏秀國
- ◎磯畑伴藏旅日記
- ◎鐘捲自齋巡國記
- ◎龜井名槍傳
- ◎豪傑龜井武藏
- ◎劍法諸岡大天狗
- ◎名人岩間小天狗
- ◎劍士子泥之助
- ◎東軍川崎東軍坊
- ◎流軍衣斐丹石入道
- ◎飯沼鐵牛軒
- ◎剛勇齋藤傳鬼坊

面白き小説新刊の御知らせ

日本新聞  
掲載小説

千里眼

渡邊默禪君作  
實價五十錢送料六錢

此の「千里眼」は二十年前、遠州に現れたる横山花子と云へる可憐の一人が神通自在の術を弄し、魔法使ひとして驚嘆されたる幻怪奇譚の事實を寫したるものなれども、其の裏面には悲惨骨を列り肉を刻むの消息あり、彼女の父横山正次郎は故森有禮氏の兄にて明治三年征韓の議を排して人道を説き、慷慨の言を當局大臣に薦めて衆議院門前に割腹したるより以來、流離飄零、具さに辛酸を嘗め遂に或る動機の捉ふる所となりて戀の犠牲となり了し天下の珍たる其身を捧げて蒼波渺茫たる琵琶湖上に自から奔り去れり、生涯二十餘年の徑路を寫して委曲を極むるの間に靈と肉の戦、個人と社會の葛藤いかに險惡峻烈なるかを説き、一面には心靈萬能の奇蹟を賜き、一面には奇に奔る輕佻の現代を諷刺する者は素より現代文壇に盛名を繼にせる渡邊默禪君其筆力の艶麗にして繪の如く精巧なる真に近來の好讀物である。

樋口隆文館發行講談小説之部

- |          |          |           |          |           |          |           |          |            |           |           |          |           |          |          |           |
|----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|------------|-----------|-----------|----------|-----------|----------|----------|-----------|
| ▲天正幽靈半之丞 | ▲天正母里太兵衛 | ▲天正飯田覺兵衛  | ▲天正文珠九助  | ▲天正久保木曾漫遊 | ▲天正東海漫遊記 | ▲天正中條兵庫之助 | ▲天正中條武勇傳 | ▲天正中條兵庫旅日記 | ▲天正後の中條   | ▲天正方丸弘行   | ▲天正魔風軍藤太 | ▲天正姫山の旗揚  | ▲天正浪花の大潮 | ▲天正後の大潮  | ▲天正熊之日能之丞 |
| 同        | 同        | 同         | 同        | 同         | 同        | 同         | 同        | 同          | 同         | 同         | 同        | 同         | 同        | 同        | 同         |
| ▲後日宮島大仇討 | ▲後兒玉由利之助 | ▲後野州悪狐塚由來 | ▲後天正悪狐退治 | ▲後豪傑松平康之助 | ▲後奇傑近藤勇  | ▲後怪勇後の近藤  | ▲後日本鮫島武雄 | ▲後鮫島武雄     | ◎武田家眞田鬼彈正 | ◎三浦正保科槍彈正 | ◎同高阪智惠彈正 | ◎同後藥師の梅吉  | ◎同其後の藥師  | ◎同女俠龍神お玉 |           |
| 同        | 同        | 同         | 同        | 同         | 同        | 同         | 同        | 同          | 同         | 同         | 同        | 同         | 同        | 同        |           |
| ◎女俠後の龍神  | ◎俠客唐獅銀治  | ◎同木曾白雲齋   | ◎磯畑伴藏秀國  | ◎磯畑伴藏旅日記  | ◎鐘捲自齋巡國記 | ◎龜井名槍傳    | ◎豪傑龜井武藏  | ◎劍法諸岡大天狗   | ◎劍法岩間小天狗  | ◎劍士子泥之助   | ◎東軍川崎東軍坊 | ◎流法衣斐丹石入道 | ◎飯沼鐵牛軒   | ◎剛勇齋藤傳鬼坊 |           |

◎豪傑小松一卜齋	◎同人見熊之助	◎豪傑青地作右衛門	◎同上總六郎	◎同大力牛之助	◎同松平辰子	◎同屑屋鐵五郎	◎同海賊船東天丸	◎同東天丸五良吉	◎同俠客劍の電次	◎同甲州定五郎	◎同墨田の夜嵐	◎同最後の血櫻	◎同加藤孫六嘉明	◎同高倉長衛	◎同後の倉高	◎同越八郎
同	同	桐野金城	同	同	同	東光齋 松月堂 櫻林	同	同	玉田玉芳齋	同	同	同	同	同	同	同
▲源三位の松	▲善悪お	▲天下幽霊問答	▲怪談後日の幽霊	◎天下最後の譽	◎産湯の森變化退治	▲三本佐分利左内	▲三本大島伴六	▲三本梅田奎之丞	▲三本後藤荒太郎	▲同稲葉太郎	▲同水間大八郎	▲同豪傑杉本備前守	▲同武田武者之助	▲同武田鬼景	◎同神刀忠次郎	◎豪傑勢揃箕輪城大仇討
浮世亭夢丸	同	神田伯海	同	同	同	同	同	同	同	神田伯龍	同	同	神田伯麟	平林黒嶺	同	同
◎後時宗五郎兵衛	◎俠客後の時宗	▲お俊傳兵衛後日談	▲怪傑金忠輔	▲同後の金忠輔	▲同其後の金忠輔	▲同其後の金忠輔	▲同其後の金忠輔	▲同其後の金忠輔	▲同其後の金忠輔	▲同其後の金忠輔	▲同其後の金忠輔	▲同其後の金忠輔	▲同其後の金忠輔	▲同其後の金忠輔	▲同其後の金忠輔	▲同其後の金忠輔

▲怪談不思議の家	▲武勇槍の小太郎	▲四十番御前大試合	▲怪談水谷騒動	▲怪談後の水谷騒動	▲俠客伊丹の與之助	◎女俠伊達のお峯	◎俠客歡喜天安太郎	▲義俠信夫常吉	▲後の信夫の常吉	▲最後の信夫
渡邊野郎	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
□怪の怪後	□美人魔後	□女獅	□續々女獅	□七首藝妓	□七首藝妓	□櫻井一策	□櫻井一策	□千里眼	□千里眼	□鬼棍
怪編	魔編	子編	子編	子編	子編	子編	子編	眼編	眼編	原編
同	同	同	同	伊原青々園	同	同	同	中村兵衛	同	同
×雷鳴六郎	□磯之松風	□千枝子	□千枝子	□白菊御殿	□銀杏小路	□迷ひ子	□迷ひ子	×女小	×復小	□男禁
後編	後編	後編	後編	後編	後編	後編	後編	後編	後編	後編
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
◎俠客後の時宗	◎俠客後の時宗	◎俠客後の時宗	◎俠客後の時宗	◎俠客後の時宗	◎俠客後の時宗	◎俠客後の時宗	◎俠客後の時宗	◎俠客後の時宗	◎俠客後の時宗	◎俠客後の時宗

(注意御) これ迄は講談の部  
 樋口隆文館の小説は東西各地の新聞紙上に好評を博したるものに付其面白ことは御受合の出来るものでございます。

これより奥は新小説の部



妻	狸	浪	浪	梅	梅	梅	行友李風	雪 鷺 庵	同	山岸 荷 葉	黒法 師 霞 堤	羽 塚 荷 香	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
の	心	か	か	花	花	花	果	者	長	五	戀	命	命	命	武	質	靜	子	幣	系	編	編	編	編
罪	中	ら	ら	後	後	後	後	屋	屋	人	し	後	後	後	造	造	紙	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
子	終	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後
編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編

直引割人別特

此目録の外にも積々新出版行準備中  
でございます。

卸直目録は販賣若くは貸本営業の方に限り郵券三錢送らるれば進呈す

直印 印は二貳拾貳錢 卸直 錢  
 印は二貳拾五錢 錢  
 印は二參拾貳錢 錢  
 印は二四拾錢 錢

但し卸直は營業用として一冊に十冊以上注文の方に限る  
 送料は二冊六錢三冊八錢 (内地限)

旭堂南陵講演 宮原流水速記 歌川國松畫

◎浪士花 青地作右衛門

◎後の上 總六郎

◎最後 大力牛之助

全三冊既刊  
各一冊實價三十錢  
送料一冊に付六錢  
以上三冊迄八錢

本篇の主人公青地作右衛門は、雷名天下に鳴りし無双の劍客、荒木又右衛門の最高弟にして多年練磨工夫の結果、枯華微笑の妙境に到達し、可悟不可言の奥義を會得せし一代獨歩の大劍士である。副主人公たる上總六郎、大力牛之助の二名は青地門下の龍虎双壁にして共に一流の師範たるべきの勇士。此三勇士一生涯には千化萬變の起伏波瀾を生じ、神飛び肉動く勇壯事もあれば、魂消え涙墮つ悲惨事もある、演者は御馴染の旭堂南陵子にして挿畫は歌川國松畫伯が、優麗鮮麗の彩筆になれる木版數十度摺の美人畫を以てす、實にこれ、華も實もある近來の好讀物であると隆文館の主人が御請合申す。

りな本古稽良最の節花浪は書本

# 會大節花浪阪大

(刊既共冊両二第一第)

擬似の類書多し御購求の節は樋口隆文館發行の物に御名指ありたし

本書の價值は公平なる左記各新聞の評語にて知られよ

大演者寫眞肖像入

演出者 順次 不入同

岡本鶴治	中川伊勢吉	藤川友春	京山愛昇	岡本鶴圓
廣澤虎春	淺川三八	吉田久春	京山花丸	中川勢治

實價 三拾錢  
送料 四拾錢

神戶又新日報の評に曰く  
斯界一方の重鎮たる、岡本鶴治、中川伊勢吉、藤川友春其他七名の浪花節を言葉と節とを分け各自得意の講演を載す一讀三嘆愉快々々高座にこれ聞くに異ならず

大阪朝日新聞の評に曰く  
大阪名物浪花節の所謂大家なるもの、中川伊勢吉、外九名の講演を速記したる物にして、櫻井大尉未亡人なる新物もあり面白し

演題は赤穂義士傳の抜き読みもあれば水戸黄門の漫遊記や仙臺加賀騷動や政治小説や武勇物語など新物も又

## 競勇武傑豪本日

- 松月堂魯山講演
- 吉田恒松茂挿畫
- 川上恒松茂挿畫
- 初篇 ○ 川崎東軍坊
- 二篇 ○ 衣斐丹石入道
- 三篇 ○ 飯沼鐵牛齋
- 四篇 ○ 齋藤傳鬼坊
- 五篇 ○ 小松一卜齋
- 六篇 ○ 人見熊之助

極彩色木版畫挿入頗美本  
實價○印の物一冊二十五錢○印  
送料一冊なれば六錢三冊迄八錢

本書は日本武術大家の銘々傳にして有名なる、東軍流の元祖川崎東軍坊を初め、丹石流の開祖衣斐丹石入道... 及び其流を汲める飯沼鐵牛齋、... 其他、天道流の齋藤傳鬼坊、並に其門下にて出藍の稱を得し、小松人見の兩劍士等が、いとも勇ましき武勇傳なれば、勇を尚武を好まる、諸君は賣り切れとならぬ内に早く買ひたまへ。

品一下天てしと本古稽の節花浪は書本

浮世亭夢丸演 余部白楊君速記

浪花節勇士揃

實價送料共にて一册貳拾八錢

柳生重兵衛光吉  
織田大炊信勝  
卷一 休禪師  
目 犬塚信乃成孝  
目 淺田孝子傳  
目 高田又兵衛吉次

浮世亭夢丸演 余部白楊君速記

浪花節武勇競

實價送料共にて一册貳拾八錢

猛勇磯畑伴藏  
中 條兵庫之助  
目 佐野武勇傳  
目 大久保武藏證  
目 豪傑自來也  
目 山井正雪

浮世亭夢丸演 余部白楊君速記

浪花節俠客揃

實價送料共にて一册貳拾八錢

夢の市郎兵衛  
卷 祐天吉松  
中 勢力富五郎  
目 龍神お玉  
目 新門辰五郎  
目 喧嘩屋五郎兵衛

花節の稽古本として出づる物は、澤山である。然るに、其多くは、名實相稱はす真に其節となつて居るもの。本書は正真正正の浪花節であつて、其節調の正確なるは勿論、内容も頗る多様多趣味。受浪同好諸士の稽古本として、天下一品無類の好資料である。論より證を以て見給へ

小川霞堤君 合著 長谷川小信君書 黒法師君

家庭戀しき仇

實價 四十五錢 郵送料 六錢

これは新聞紙上で好評を博し、劇に演じても大入大當を取りました、頗る面白い悲劇的新家庭小説であります。



神戸又新日報記者 雪鷲庵君著 川上恒茂君書

長者屋敷

これは播州姫路に名も高き、長者屋敷に於ける事實怪談にして、神戸又新日報紙上に連載して大好評を博したるものでありますから、怪を喜び奇を好まるゝ諸君は、賣り切れとならぬ内に早く購ひたまへ……。



渡邊 默禪君著  
川上恒茂君畫

小説實女獅子

全三冊 頗美本  
實價一冊 金四拾五錢  
郵送料一冊 金六錢

著者默禪子自白ふ、予、從來事實譚なるものに筆を着けしこと數十回に達したるも、未だかゝる大規模の大事實に手を染めたることあらず……實に然り……本書は天下稀有の一女優が傳記にして、其内容の極めて深く廣きだけ、變幻怪奇の波瀾縱橫錯出、幾んど應接に暇なからんとす、乞ふ愛讀をたまへと、隆文館の主人が懇張つて白す。

伊原青々園君著  
井川洗厓君畫

都新聞 揭載小説 迷ひ子

實價一冊 金四拾五錢  
郵送料一冊 金六錢

著者青々園君の文は、既に世に定まれる評あり本篇は曾て都新聞に連載せられ、讀者より非常に好評を博せし小説なり、以て内容の如何を察せられよ。



羽篠荷香君著 長谷川小信君畫

命

實價一冊 四十五錢  
郵送料一冊 六錢

これは新聞紙上にて大好評……又……劇に演じても活動寫真にやつても、各地到る所にて大入大當を取りました、素的に面白い悲劇的新小説であります……。



渡邊 默禪君著  
長谷川小信君畫

小説實七首藝妓

全二冊 頗美本  
實價一冊 金四拾五錢  
郵送料一冊 金六錢

本書は東京毎日電報に連載して讀者の大喝采を博したる怪小説である、如何に灘伊丹の銘酒とあつても、樽を見た丈では酔ふものではない、兎も角一口……オット間違ッた、兎も角一冊購つて見た上で、巧い拙いの御評判をと隆文館の主人が懇張つて白す……。